

途中下車の古本屋



よしだ まさし

■目 次

途中下車の古本屋.....	2
ジュニア文庫への招待.....	25
均一棚への招待.....	31
バブル崩壊の日は近い？.....	36
恥ずかしいあとがきベスト1に悶絶だ！.....	39
古本極道大西範彦氏の書棚拝見.....	40
「西部活劇双書」を先に買ったのは誰だ！.....	49
西部小説の世界.....	51
山形古本奇譚.....	56
読まないのには訳がある？.....	64
実録・30冊155円の悲劇.....	66
読むと価値の落ちる本.....	69
『美人島征服』登場！.....	73
おくぎ旅館襲撃レポート.....	77
長いあとがき.....	96

途中下車の古本屋

【新宿御苑前駅（丸ノ内線）】

僕の勤務先は丸ノ内線の新宿御苑前駅の近くにある。新宿通りと靖国通りにはさまれた一角で、10数年前にはまだ民家の多い住宅地だったのだけれど、その後急激にオフィスビルが増え、それともなつて飲食店などもずいぶん増えた。住民の多くはオフィスビルの最上階に住むようになったりしているのだけれど、それでもかろうじて下町の風情が残っていたりもする。ちよつと裏にまわれれば、古い木造アパートがあったりもする微妙なエリアだ。

そのエリアの真ん中にやなぎ通りという通りが新宿通りや靖国通りと平行して走り、そこに「**國島書店**」という古本屋さんがある。まずは、その國島書店さんを覗いてみることにしよう。

入って右側の通路の壁側の棚には文芸書と若干のマンガ、左側の通路の壁側の棚には戦記文学、時代小説、ノンフィクションなどが並び、真ん中の棚には文庫や新書が並ぶ。間口は狭いが、奥行きがあり、ずんずんと奥に入っていくと黒っぽい本が増えていく。文庫の棚にもグラシン紙のカバーのかかった絶版本などが並ぶ。ガラスケースには、映画関係の古い紙もの、観光絵はがきなどが並んでい

るが、実はガラスケースの中はあまりじっくり覗いたことがない。奥にレジがあり、その左側には古い文芸書など。いかにも何かありそうな雰囲気だが、しよつちゅう覗いているので、僕にとつて目新しい本は特になかったりするのには残念。レジの右側にはLPレコード、美術書、映画関連書籍、アダルト書籍などが並ぶ。このあたりにも黒っぽい本がズラリと並び、初めて入った古本屋でこういう棚を見たならば、舌なめずりして端から端まできっちりチェックするのは間違いないところだ。

値段はそれほど高くない。会社に近いのでちよくちよく覗いているのだけれど、どちらかというと比較的新しい文芸書が安い値付けで並んでいたりするのが嬉しい。でも、絶版本のたぐいも何が入荷するか分からないので油断はできない。

ある時、新書の棚に古いポケミスがズラリと並んだことがあった。多少は珍しいあたりがまじっていたように思うが、値段はほとんどが100円か150円だった。この時には、けっこうまとめて買わせていただいた。

この時買ったポケミスを列記してしまう。『霊柩車をもう一台』『おとり』『ヒルダよ眠れ』『震える山』『ひとり狼』『ろくでなし』『死体置場で会おう』『運命』『わが王国は霊柩車』『犠牲者は誰だ』『動く指』『赤い運河』『殺しの前奏曲』『NかMか』『呪われた者たち』『おひまなレディ』『死体置場は花ざかり』『探偵コンティネンタル・オブ』『悪夢の街』『おとしまえをつける』。これだけ買って、

きつと1冊も読まない。なんで買ってしまふのだろう？

また、富田常雄の時代小説も何度か買っているし、半村良の『新宿馬鹿物語』サイン本を2500円で見つけたこともあった。

時々、店内の配置がガラリと変わることがある。そういう時に、並んでいる本もいっきに変わったりして、おいしい本が紛れ込んでいることも多い。要注意だ。

以前はもっとすっきりとした店内だったのだけれど、最近、だんだんと店内の在庫が増えてきている。見るからに、本を並べるスペースが不足してきている。すっきりとした店内よりも、そういうお店の方が何かありそうな気がして、わくわくしてくるのは古本者のサガだろうか。

本店は横浜の方にあるらしいのだけれど、ホームページに地図が載っているのはこの新宿店だけ。横浜の方は店舗販売はやっていないのかもしれない。店内に並んでいる本がいつきが変わったりするのは、きつと横浜の在庫と入れ替えたりしているためなんだろう。

会社を出て靖国通りに出ると、すぐ目の前にあるのが「ブックオフ新宿靖国通り店」。

ブックオフなんてものは、全国どこでも同じようなものだろうと思うのだけれど、なぜかこの店は文庫の棚に妙に安い値付けの本が紛れ込んでいることがある。基本的にブックオフの文庫は、105円のコーナーを除けば、半額より若干高めの値付けとなっているは

ずなのだけれど、なぜかこの店にはそれよりも1000〜2000円ほど安い値付けの文庫が紛れ込んでいることがあるのだ。特に翻訳文庫のコーナーでそういった本が多かったりする。新刊で出た時に見逃してしまった本、新刊で買うほどではないけれど「安かったら読んでみてもいいかな」なんて思っていた本を買うには、実にありがたい。

アダルト本のコーナーにゲイ雑誌が多いのも、土地柄というものであろうか。なんとたつて、すぐ近くに日本最大のゲイタウン、新宿2丁目があるのだから。

ブックオフ新宿靖国通り店とは反対側、新宿通りに出ると、新宿御苑前駅新宿門口の向かい側に「昭友社」がある。この周辺ではもっとも古い古本屋さんである。なんとたつて、僕がこの昭友社さんを初めて覗いたのって、高校生の時に新宿セミナーでの模擬テストを受けに来た時なのである。かれこれ35年ほども前のことだ。

当時ももっと狭いお店だったのだけれど、その後、住居部分を削るかなにかして店舗面積が広がっている。

この店の注目は、なにはともあれ外の均一棚である。文庫1冊が100円だが、4冊で200円、10冊で400円となる。この均一棚に、時々とんでもない本が紛れ込むことがあるのだ。

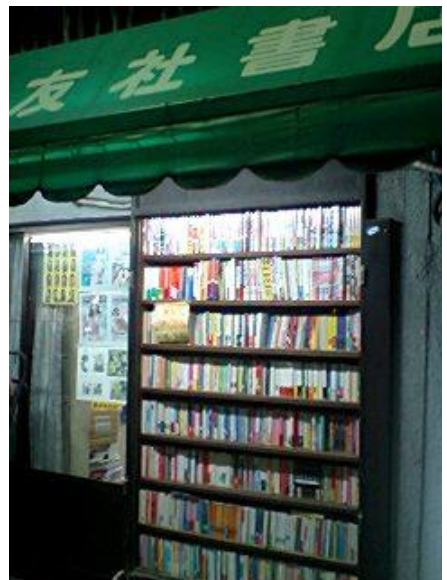
いままでの最大の血風は、次の8冊を400円で買ったことだろう。

『幽霊の2/3』ヘレン・マクロイ（創元推理文庫／初版）
『水平線の男』ヘレン・ユースティス（創元推理文庫／初版）
『ローマ帽子の謎』エラリー・クイーン（創元推理文庫／初版）
『ウインター殺人事件』ヴァン・ダイン（創元推理文庫／初版）
『夜は千の目をもつ』W・アイリッシュ（創元推理文庫／初版）
『不許複製』ミッシェル・ルブラン（創元推理文庫／初版）
『連鎖反応』フレッド・カサック（創元推理文庫／初版）
『欲望の河』大林清（春陽文庫／重版）

最近じゃ、初版というだけでかなりの高値がついてしまったりする創元推理文庫の中でも、とりわけ高値のつく『幽霊の2/3』と『水平線の男』が均一棚に並んでいたのである。ヤフーオークションなどに出れば、あっさりと1万円を超すような本だ。『幽霊の2/3』はついに復刊されてしまったが。

さすがにこんなことは滅多にないが、それでもマメに覗いていると、時として思わぬ拾い物の出来る均一棚なのである。いまだって角川文庫の『赤ちゃんよ永遠に』が並んでいるのだけれど、ずっと誰も買わないまま棚ざらしになっている。ダブリ承知でつい買いたくなってしまわないか。

店内は左側の入り口から入ると、文芸書、文庫、新書などが並ぶが、平台に並ぶ映画のパンフレットや、平積みにした古いアイドル雑誌、エロマンガなどの中に珍しいものが紛れ込んでいるのかもしれない。文庫の棚にはサンリオSF文庫や旺文社文庫、ロマン文



庫なども並ぶが、けっこういい値段がついていたりする。ハヤカワSFシリーズも並んでいるが、たいてい1千円の値段がついている。

つい先日には、この平台に映画のロビーカードがごっそり並んでいるのを見つけ、ついつい『Mr. BOO! インベーター作戦』『カリブの嵐』『ミッドナイト・クロス』『ヘルナイト』『カプリコン1』『サイレント・ムービー』『大陸横断超特急』『天空の剣』なんてあたりを買い込んでしまっている。紙ものはあまり集めないようにしているつもりなんだけどなあ。

また、右側の入り口から入ると、アダルト雑誌がズラリと並んでいるのだけれど、かなり古いものも多いので、マニアから見れば珍しいものがあるのかもしれない。また、その奥の方に古いマンガが隠れていたりするので、マンガマニアも要注意だ。

そして、新宿通りを隔ててこの昭友社の向かい側にあるのが、「ブ

ツクマート新宿店」。この界限で最も新しい古本屋であるのだけれど、なんとこの店、24時間営業なのである。さすがは眠らぬ街、新宿！

僕は毎朝、仕事が始まる前の30分ほどを会社の近くのドトールコーヒーで本を読んで過ごすことにしているのだけれど、時々、持って出た本を朝の通勤電車で読み終えてしまうことがある。朝のうちに読み終えそうだなと思ったら、もう1冊持つて出るようにしているの、たいていは大丈夫なのだけれど、うっかり予備の本を持つて出るのを忘れてしまったりすると、もう困ってしまう。本を持たないまま、30分もドトールコーヒーでどう過ごせばいいのさ。

そういう時に、この「ブックマート新宿店」が強い味方となるのだ。ちよつと寄つて、なんでもいいから適当な本を選んで、それでドトールコーヒーに向かえばいいのである。こういう時に贅沢に本を選んでいる余裕もないので、本当に適当に本を選ぶことになる。そうすると、普段なら手を出しそうにもない本を選んで、意外な出会いにつながったりもするのも楽しい。いやあ、助かります。品揃えは通常の新古本系古本屋なので、意外な拾い物を期待したりはできないのだけれど、新刊で出たばかりの本が並んでいることも多いので、新刊書店で買うのをためらっていた話題作を買うには便利だ。

先日は、店頭の均一棚にロバート・ブロックの『ザ・スカーフ』新樹社を発見。ロバート・ブロックはたいいてい持っているつもりだ

ったのだけれど、この本は買い逃していたので、100円で買ったのは実にラッキーだったのでありました。

新宿御苑にはもう1軒、ほとんど誰にも知られていない古本屋がある。いや、古本屋というのは正確じゃない。絶版本を扱っているギャラリーというべきか。

新宿御苑駅大木戸門口を出たところの横断歩道を渡つて、新宿御苑方面にちよつと入ったところにあるビルの3Fに「蒼穹舎」というギャラリーがある。正確には、「蒼穹舎」という出版社に併設されたギャラリーというべきか。写真集を刊行している出版社で、併設しているギャラリーではいつもなんらかの写真展が開催されている。そして、そのギャラリーに隣接したスペースで、写真集や評論集などの新刊書や古書売っているのである。もちろん、一般の古書店とはまるで違った雰囲気、扱っている書籍もジャンルが限定されているのであるが、写真に興味のある人だったら、思わぬ本との出会いが期待できるスペースではないだろうか。

また、もう1軒、古本屋ではないのだけれど、ついでに覗くことをお勧めしたい書店がある。「蒼穹舎」から新宿通りをさらに新宿方面に進んだ左側にある「模索舎」という書店。ミニコミや自費出版物を専門に扱う書店さんで、通常の書店では出会うことのかなわない刊行物が店内にズラリと並んでいる。場合によっては、すでに絶版になっている本が紛れ込んでいることもあるかもしれない。

【新宿（丸ノ内線↓埼京線）】

新宿御苑前から新宿まで丸ノ内線で2駅なのだけれど、埼京線のホームから丸ノ内線のホームまで離れているし、歩いてほしい距離ではないので、その2駅分を僕は歩いて通勤している。健康のためにも、この程度の距離は歩いた方がいいだろう。

で、その新宿駅周辺の古本屋なのだけれど、残念ながら現在は1軒もない。

しばらく前までは新大久保の「古書畸人堂」の支店が南口ヴィクトリア裏にあったのだけれど、撤退してしまっている。また、百貨店の古本市などにもよく出店している「本道楽」が2フロアを使ったお店を東口の方に出したこともあったのだけれど、これも短期間のうちに撤退してしまった。それ以前は、西口に「天下堂書店」があり、ここは均一本コーナーでそれなりにおいしい本が見つかることもあったのだけれど、やはり閉店してしまっている。南新宿方面のプーク人形劇場の裏あたりにもどこかのお店の支店が一時期あったのだけれど、これもいつのまにか撤退してしまっていた。

いちばん驚かされたのは、南口の雑居ビルの中にあつた「鈴平書店」。「なんでこんなところに？」と思うような雑居ビルの5階に、古本屋さんが入っていたのだ。いまにも壊れそうなガタガタのエレ

ベーターで上がらなければならぬ古本屋さんで、たいした掘り出し物があるような店でもなかったので滅多に行かなかった。ところが、このお店がいつのまにか性風俗のお店に変わっていたのである。そうとは知らずにエレベーターでそのフロアまで上がってしまった、エレベーターの扉が開くと、そこに立っていたのは黒服のお兄さん。

「いらっしやいませ」と、頭を下げてはありますか。

状況の把握が一瞬遅れた僕は、うっかりエレベーターから一歩踏み出し、その瞬間に「えっ、あれっ、ええっ、ええええっ！」とびっくりして、そのままとずさつてエレベーターの中に戻り、あわてて1階のボタンを押したのです。いやあ、あれはびっくりしたなあ。

というわけで、いまでは古本屋は1軒もない新宿駅なのだけれど、西口イベントコーナーで時々「新宿古本まつり」が開催されている。一度、この古本市で富田常雄の本をこっそり買ったことがあるのだけれど、予想外に出品点数が多いので、機会があればぜひとも覗いてみたい古本市なのである。

また、そのすぐ横の京王百貨店でも、夏と年末に古本市が開催されている。百貨店での古本市がめっきり減ってしまった昨今ではあるのだけれど、規模の大きな古本市なので、今後も頑張つて開催していってほしいものだ。

【池袋（埼京線）】

新宿で埼京線に乗ると、最初の停車駅が池袋となる。山手線を使えば、池袋までに新大久保、高田馬場、目白があり、それぞれに古本屋があるのだけれど、滅多にそっちのコースで途中下車をすることはない。特に高田馬場には早稲田の古本屋街があり、一度行けば半日以上楽しめてしまうことは分かっているのだけれど、最近はそのまでの根性がないのだ。

新大久保は年に1回の健康診断のたびに途中にある「古書畸人堂」をチェックしていて、何度か店頭の均一棚でおいしい思いをさせてもらっているのだけれど、この1軒のためにわざわざ帰りの路線を変えて途中下車しようという根性もない。

同様に、池袋で途中下車して古本屋をまわろうという根性もほとんどない。池袋で古本屋をまわろうと思ったら、人混みの中をかきわけてけっこうな距離を歩かなければならないので、正直、面倒なのだ。でも、新宿駅とは違って、いい古本屋がある駅でもある。

池袋西口には、まず「池袋古書館」がある。けっこう品揃えのいいおいしい古本屋だ。また、その先には「八勝堂書店」があり、探偵小説のレアどころを見て目の保養を楽しむことができる。そして、その「八勝堂書店」の少し裏の方には「夏目書房」があり、もう少し庶民的な品揃えの棚を楽しむことができる。「八勝堂書店」からさらにずっとずっと先まで進めば、「ブックオフ池袋要町店」があ

る。けっこう店舗面積の広いお店だ。以前は、その途中にもう1軒古本屋さんがあったと思うのだが、さつきネットでチェックしたところ見あたらなかったなので閉店してしまったのかもしれない。また、「ほんだらけ」が「八勝堂書店」のすぐ先にお洒落な古本屋をオープンしたことがあったのだけれど、これはあつという間に撤退してしまっている。東京芸術劇場の敷地内にあった「古本大学」は品揃えもよく、店をチェックするのが楽しかったのだけれど、こちらもいつのまにかお店がなくなっていた。

東口には「光芳書店」があつて、この店だけは池袋に行くたびにチェックすることになっている。池袋東口のあつちこつちに支店があったのだけれど、いまホームページをチェックすると、東口本店、東口支店、K1ブックスの3店舗だけになっているようだ。とにかく、在庫量が半端でなく、マニアックな本から雑本まで実に幅広く揃っている。しばらく行く機会がないのだけれど、この原稿を書いていたら、無性に行ってみたくなくなってしまった。

また、駅からかなり歩くのだけれど、明治通り沿いに「古書往来座」もある。こちらも在庫の多い、棚を見て楽しい古本屋だ。ここでは、時々、店頭スペースに何軒もの古本屋さんが本を持ち寄って「古書往来座外市」という古本市を開催しているが、機会がなく、いまだに行つたことがない。

他に、西口公園で「池袋西口公園古本まつり」という古本市が開催されることがある。やたらめったら出品されている本の量の多い

古本市なのだけれど、残念ながら僕はここでおいしい思いをしたことがない。なぜなんだろう。あれだけ古本が並んでいれば、僕好みの雑本が安く紛れ込んでいてもいいだろう。

【板橋（埼京線）】

埼京線に乗って池袋の次の駅が板橋駅だ。ようやく、本格的に途中下車という感じがしてくる。

まずは、東口に出る。出てすぐのところに、近藤勇の墓がある。せつ々なので、お参りしていこう。

「いい古本に出会えますように」
神社じゃないっちゅうの。

このお墓、調べてみると永倉新八が建立したものであるらしい。なぜか、近藤勇と土方歳三の名前の並んだ大きな墓石が立っている。どうして、連名の墓石なんだろう？　そして、そのすぐ横には永倉新八の墓もある。どうしてこちらは、連名じゃなくて、永倉新八の名前だけなのだろう。

ま、それはさておいて、駅前の通りを右に向かうと、じきにあるのが「ブックス橋屋板橋店」だ。一見すると、どこにでもあるこぎれいな新古書店といったところなのだけれど、棚をチェックしていくと、サンリオSF文庫が並んでいたりと、絶版コミックスが並んで

いたり、けっこうマニア向けの本があったりもする。お値段はさすがにプレミア価格がついているものの、それほどむちゃな値付けではなく、ものによっては相場よりも安いのではないだろうか。板橋でいちばん新しい古本屋ではあるが、要注目古本屋であるのかもしれない。

駅前に戻って、近藤勇の墓の前を通り過ぎると、信号のある小さな交差点の右斜め前方に「坂本書店」の看板が見える。だが、これはもう何年も前に移転した古い店舗なので、シャッターは常に閉まったままのはずだ。知らない人は、これを見て「あちゃあ、今日は閉まっているよ」と思って、帰ってしまうことだろう。もしかすると、そこで帰ってしまった方がさいわいなかもしれないけれど（理由はこのあとを読めばわかっていただけのことでしょう）、新しい店舗はそのもう少し先の右側にある。

この「坂本書店」、やたらと店舗面積が広く、棚の前にはいたるところに床から雑本が山と積まれている。いかにも何かありそうな風情の古本屋である。店舗前のスペースには、均一価格の本を入れた段ボール箱がいくつも並んでいて、これをチェックするのも楽しい。

が、この「坂本書店」、あまりの不愉快さから、二度と行かないと決めている古本屋なのである。

初めてこの店に行った時、棚の中に値段のついていないコミック



スがあった。ちょっと欲しい本だったので、レジに持って行って値段を聞いた。すると、レジにいた長髪にヘッドバンドという、昔のヒッピーのようなかにも時代錯誤な格好をした男性が「これはまだ値段がついていないでしょ！」と僕に文句を言って、その本をレジの下に仕舞ってしまったのである。

「値段がついていないでしょ！」と言われても、値段をつけないで棚に並べたのは僕じゃない。文句をつけられても困る。それに、値段をつけ忘れたのだったら、いまつけばいいじゃないか。しかし、そうは思ったものの、「値段がついていないでしょ！」という口調が明らかに喧嘩腰だったので、これはヘタに刺激しない方がいいと思って、それ以上の追求はしなかった。

こういう男が店番をしている古本屋だったのである。

次に行った時には、店内の棚を半分ぐらいまでチェックしたところで、「店を閉めますから！」と言われて追い出された。たまに閉店時間にぶつかって、「すみません。そろそろお店を閉めますので」と言われることがないわけじゃないけれど、いかにも「すぐに出て行け」と言わんばかりの口調で追い出されたのは初めてだ。なんだ、この男は？

ところが、その次に行った時、前回よりもかなり早い時間だったというのに、棚を見始めてすぐに「店を閉めますから！」と言って店を追い出されてしまったのである。

明らかに、おかしい。さすがにこの店の変だ。前からなんかおかしいと思っはいたけれど、その疑惑が確信へと変わる。

どうやらこの店は、客が来ることを歓迎していないらしい。歓迎していないどころか、明らかに客を嫌っているのだ。世の中にそんな古本屋があるとは信じられないのだけれど、この店は客が来ることを積極的に拒否しているではないか！

そして、極めつけは、最後にこの店に行った時の対応だ。

店内の棚を眺めだしてしばらくしたところで、突然「何か探してるんですか！」と声をかけられた。「何かお探しの本でもありますか？」じゃない。「何か探してるんですか！」だ。「？」じゃなくって「！」。なんで喧嘩腰？

そりゃ、探している本はあれこれたくさんある。探している本がなければ、こんなに丁寧に棚のチェックなんかしない。それに、こ

れだけ本がたくさんあれば、探している本じゃなくなつて、知らなかった本との出会いだつてあつたりするじゃないか。

「いえ、特に何を探しているというわけでもないんですけど」

とりあえずそう答える。探している本が多すぎて、そう答えるしかない。すると、とんでもないセリフが襲いかかつてきた。

「じゃあ、店内をブラブラされても邪魔ですから！」

「えっ？」

露骨に店から出て行けと言われていたわけだけれど、古本屋さんで棚を眺めないで、どうやって買いたい本を見つけてるんでしょうか？ あまりにも意表をついたセリフに、しばし呆然としてしまう。

さらに、驚くべきセリフが続く。

「そんなに棚を見て回っても無駄ですから」

無駄かどうかは、あんたが決めることじゃなくって、こっちが決めることじゃないのか？

「あのさあ、古本屋つてのは、棚を見てまわるもんでしょ。そうしなきゃ、欲しい本があるかないか、わからないじゃん」

正論だと思ふぞ。だが、この長髪ヘッドバンドはかたくなにこう言う。

「とにかく、店内をブラブラされるのは邪魔なんです」

というわけで、この店には二度と足を踏み入れるものかと、かたかくたく決意する。さすがに、古本屋でこうまで不愉快な思いをさせられたのは初めてだ（と書いて、他にも不愉快な思いをしたこと

があるつてのを思い出した。神保町の某古書店で本を処分しようと思つて、とてつもなく不愉快な思いをしたことがあつたのだ。そのことは、「実録・30冊155円の悲劇」という別の原稿に書いてあるので、そちらをご覧ください）。

ちなみに、ミクシイでこの体験を報告すると、驚くべきコメントがついた。

「ひえっ、あの長髪男、まだそんな調子なんですか？ わたしが喧嘩したのは30年前の話ですけど、あれからずっと変わってないとしたら、それはそれですごいことかも。」

知り合いが30年前に喧嘩していた（笑）。

不愉快な思いをしてもかまわないという人は「坂本書店」を覗いてもいいでしょうけれど、そうでない人はその少し手前にあるきつね塚通りに入ってください。ずっと入って行って、首都高速道路の通る中山道にぶつかったところのすぐ右側にあるのが「木本書店支店」。

小さな店ながらも、黒っぽい本がけっこう並んでいる。仙花紙本の小栗虫太郎や江戸川乱歩なんてのが棚にこっそり紛れ込んでいたり、角川文庫のSFマークが何冊も並んでいたりするので、じっくりと棚をチェックするのが楽しい店なのだ。じっくりと棚をチェックしていても、「邪魔だから出て行け」と言われないのも嬉しい（笑）。



再びきつね通りを戻って、「坂本書店」のある通りに出たら、そこを右折してすぐにあるのが「木本書店本店」。本店も支店同様に小さなお

店ではあるのだけれど、店内に並んでいる本は玄人好みの本が多い。特に映画関係、芸能関係の本が充実している。僕の探求書とはあまり重ならないので、それほど面白い物をしたことはないが、映画『少林寺』に関する特集本を買えたのはこの店だった。

右側から入ったところにあるガラスケースの中には、探偵小説研究誌「鬼」のセットがずっとあるのだけれど、とてもとても僕ごときに手出しできる値段ではないのが残念。

「木本書店本店」の前を通り過ぎると、踏切があり、そこを通り過ぎてまっすぐに進むと右側にあるのが「街のふるほんや ふたご堂」だ。ここは「街のふるほんや」を名乗るだけあって、黒っぽい本、かたい本、プレミア価格の本がほとんどないかわりに、誰もが



気軽に買えるコミックスがたっぷりと並んでいる。近所の子供たちが小遣いを握りしめてコミックスを買いに来るのに、びつたりの古本屋

と言えよう。

ポイントカードを発行していて、買い物をするたびにスタンプを押してくれるのも、嬉しいお店だ。

僕自身は、店頭の均一棚で春陽文庫の三橋一夫を買ったことのあるお店という印象が強いんだけど、さすがにそんな幸運はそれきりない。

「ふたご堂」の裏の方、新板橋駅の近くにあるのが「板橋書店」。大正時代にソウルで開業したという恐るべき歴史を持つ古本屋さんである。店内に当時のお店の写真などが掲示されているので、それを見せていただくだけでも楽しい。

店頭には段ボール箱にぎっしりと詰まった50円均一の本が並ぶ。

店内はけっこう広く、そこにありとあらゆるジャンルの本がぎっしりと並ぶ。実用書、学術書、歴史、山岳、民俗学、映画、美術、文庫、新書、文学などなど。棚に並ぶ本を見てみると、こだわりを持って本を選別している様子がうかがえる。とはいっても、堅苦しな本ばかりではなく、アダルト雑誌が平積みになっていたりもする。一部、本棚の前に本棚を置いてある場所があつて、後ろの本棚の本はチェック不能状態となつている。どうやら、中国関連やアジア関連の本がそこに埋もれているようなので、ちよつと気にはなるのだけだ。



なお、コミックスや比較的新しいベストセラーのたぐいはほとんどないので、そういった本を期待する人には向かない。

「ふたご堂」「板橋書店」から板橋駅の正面にあたる方に移動すると、「セカンドハンズ板橋店」がある。ここは、何度か覗きに行ったことのあるものの、最近はずいぶん覗きに行かなくなつてし

まったので、特にコメントはなし。確か、コミックス中心のお店だったと思います。

【十条（埼京線）】

北口を出てすぐの路地を左に抜けると、踏切の手前に「ブックオフ十条駅前店」がある。小型店舗なので、たいして面白みもない。ごくごく普通のブックオフだ。

実はこのブックオフの2軒手前に「林屋書店」という古本屋があつた。小ぶりの古本屋ながらも、古い文芸書などが並んでいたりして、たまに覗くのを楽しみにしていたのだけれど、ブックオフが開店してしばらくしたところで店を閉めてしまった。僕としては、ブックオフよりも昔ながらの古本屋の方がありがたいのだけれど。

駅前に戻り、今度は十条銀座というアーケード街に入る。個人商店が延々と続き、大勢の買い物客が行き交う活気のある商店街で、ここを歩いているとなんとなく楽しくなってくる。嫁さんの実家が東十条の方にあつて、そっちの商店街も同様に活気があつて、お店を覗いてまわるのが楽しい。大型スーパーが進出すると、こうした個人商店が片端から潰れていって面白くない街となってしまうのだけれど、このあたりは昔ながらの商店街が元気に生き残っている。とても、暮らしやすそうだ。

その十条銀座をしばらく行つて、細い道を左に入つたところに「重藤書店」という、店の半分が新刊、半分が古本という珍しい店があつただけれど、先日行つた時には店が見つけられなくなつていた。いつなくなつても不思議のない雰囲気のお店だったので、おそらくは店を閉めてしまつたのだろう。

この店では、店頭の均一棚でロバート・シルヴァーバーグの『生命への回帰』日本文芸社を買つたことがある。

さらに十条銀座をどんだん奥に向かつて歩いていくと、左側に「ブックマート十条銀座店」がある。ブックマートと聞いただけで「自分には関係ないや」とか思つていただけけれど、実際にお店を覗いてみてびっくりした。品揃えがものすごくいいのだ。非常に幅広いジャンルにまたがる本が揃つていて、しかも、プレミア価格の古めのレア本も少なくない。いわゆる新古書店と侮つてはいけないお店なのだ。品揃え、値付けに関しては、どちらかというとマニア向けの古本屋さんといつてよいだろう。棚の中に「東京おとなクラブ」の4冊セット（残念ながら1冊抜けている）があつたのには、さすがにびっくりしたが、他にもマニアが喜びそうな絶版コミックスなどの棚なども充実している。

さらに距離を歩くことをいとわれない人には、帝京大学病院入口交差点の近くに、古い関係の本を専門に扱う「鴨書店」という古本屋があるようだが、僕は行つたことがない。また、東十条方面まで足

を伸ばせば「山本書店」「彩林堂」もあるが、十条駅の途中下車で寄るにはちよいと遠いかもしれない。

【赤羽（埼京線／京浜東北線）】

赤羽駅で埼京線から京浜東北線に乗り換えるので、そのついでに駅の外に出るのはそれほどハードルが高くない。ふだん乗り降りしない駅だと「わざわざ古本のために途中下車する」という感じになるのだけれど、赤羽駅だと「どうせ乗り換えるのだから、ついでに古本屋でも覗いちゃおうかな」なんて気分で、気軽に改札口の外に出ることができてしまうのだ。

おかげで、週に1回は赤羽の古本屋をチェックすることになるのだけれど、でも、毎週チェックしているのは、何軒かあるうちの1軒だけ。だって、他の古本屋は駅からちよいと歩くんだもの。

で、その毎週チェックする1軒というのが、お気に入り「平岩書店」だ。以前は西口を出てすぐ目の前にあつただけれど、駅前再開発とともに姿を消してしまつていた。すっかり、閉店したものだと思つていただけけれど、実は駅前にドーンとそびえ立つイトーヨーカ堂の裏に移転していたのだった。随分長いことそれに気付かずに、店がなくなつたことを嘆いていたのだけれど。

この「平岩書店」、店内は棚の8割ぐらいがアダルト書籍で占め



ここで拾ったレア本は数限りなくあるのだけれど、いちばん凄かったのは宮野村子の『血(上下)』だろうか。これは、ネットで自慢するなり古本仲間の彩古さんから速攻で「譲って!」とメールが入って、あっさり『日本語版アメーzingストーリーズ』と交換してしまったのだけれど。他に橋外男が2週連続であったり、千葉真一の『千葉ちゃんのスポーツ特訓』などという本があったり、三木鶏郎の『冗談十年』があったり(上中下の下巻だけなかった!)、東京創元社の現代推理小説全集がズラリと並んでいたりと、とにかく何度もおいしい思いをさせてもらっている。

られている。よって、店内にはあまり用事はない。問題は店の外の均一棚なのだ。この均一棚に、やたらとレアな本が並ぶのである。昭和20

30年代発行の本が、平然と並んでしまったりするのだ。入り口を挟んで右側が文庫と新書の均一棚、左側がその他の単行本という構成で、いずれも3冊200円。ただし、

文庫と新書は6冊300円、10冊400円でも買える。

しかも、この店のおやじさんが実にマメな方で、しょっちゅう均一棚の本を入れ替えているのである。おかげで、2〜3週間も行かないでいると、並んでいる本がごっそり入れ替わっていたりする。定点観測が実に楽しい棚なのだ。

それにしても、いったいこの店は、これだけの本をどこから仕入れているのだろうか? あとからあとから古い本が棚に出てくるのが不思議でならない。もつとも、ふと気がつくと、数年前に並んでいた本がまた棚に並んでいることもあるので、新しく仕入れた本ばかりが棚に出てくるわけでもないらしい。きっちりローテーションを組んで、棚に出してきているようなのである。

惜しいのは、均一棚に並んでいる本の天と地の部分に、赤のマジックで遠慮容赦なくラインが引かれていることだ。どんなにレアな本であろうが、他の店なら1万円を越えるような本であろうが、無惨にも赤マジックのラインが引かれてしまうのである。それさえなければ、もっと嬉しいのになあ。

あるとき、マンガ家の喜国雅彦さんから「赤羽にいつつも閉まっている古本屋があるでしょ」と言われたことがあった。まったく思い当たる店がなかったのだけれど、必死になって探したところ、思いもかけない場所にその店があった。なんと、「平岩書店」に行く途中の小さな交差点の、ほんのすぐ横にあったのだ。微妙に店が通りから引っ込んでいるために、ほんの数メートル横を毎週のように通

っていたというのに、ぜんぜん気がつかなかったのである。

店の名は「京華堂平塚書店」。

ただし、喜国さんの言うように、この店はいつつも閉まっていた、いままでに店が開いているところに行くわたしたのは1回しかない。その1回で望月三起也の絶版マンガと古いSM小説を買うことができたのだけれど、それっきり店が開いていたことはなかった。おそらくはもう商売をやっていないのだろう。

ところが、その店を強引に開けさせた人がいる。そう、古本女王の異名をとる石井さんだ。

彼女は、ガラス戸越しに店内をのぞき込んで離れようとせず、それを不審に思っ出てきた大人しそうなお婆さんに、「私は遠くから来たんです。店を開けてください」と、あたかも店を開けるのが当然であると言わんばかりの口調で主張して、無理矢理に開けさせてしまったのである。いやあ、さすがだ。

でも、なんにもなかったんですけどね。

西口には他に「古本のとんぼや」があったのだけれど、この店はどこか別の場所に移転してしまっただけらしい。

そして、古本屋ではないのだけれど、その「古本のとんぼや」に行く途中にとんでもない新刊書店があった（随分長いこと行ってないので、まだあるのかどうかは不明）。その書店、新刊書店でありながら、返品しそこねたとおぼしき古い本を50円とか100円といった値段をつけて売っているのである。1970年代前半に刊

行された金の星社の「ウエスタンノベルズ」などもあり、ヘタな古本屋よりも古い本が並んでいたりするのだ。ただし、残念ながら並んでいる本の多くは排気ガスを被って汚れ、さらには日に焼けて退色していたりする。ちよいと手を出しかねてしまうような本ばかりなのだ。それでも、山上たつひこの『湯ノ花親子』なんて本を買ったこともあるのだけれどね。

駅の反対側、東口にはまず「紅谷書店」がある。東口を出て左側にあるアーケード街の中にある。

店内には、新しいミステリーもあれば、古い探偵小説もあり、古い映画雑誌などもドーンと平積みになっている。早川の異色作家短編集もあれば、桃源社の大ロマンの復活なども並んでいる。なかなか、品揃えのよい古本屋さんである。一度覗いてみる価値は十分にある古本屋さんであろう。

ただし、古い本に関しては、店内に並んでいる本にあまり変化はない。繰り返し覗きに行く楽しさには、いまいち不足なのである。

東口の駅前通りをまっすぐ突っ切って交差点を渡ると、すずらん通り（もしくはラ・ラ・ガーデン）という大きなアーケード街となっていて、そこにも1軒「リサイクル・ハンズ」という古本屋さんがある。店の看板があまりにもブックオフとそっくりで、思わず笑ってしまう。ここはコミックス、ゲーム、DVDなどが中心ではあるのだけれど、文庫や比較的新しい文芸書も並んでいるので、たま



ス、1階がそれ以外の書籍となっている。ここもたまに覗くのだけれど、ほとんど買い物をしたことはない。

そして、さらにその少し先に「山遊堂赤羽本店」がある。なぜ赤羽本店という名前がついているかという点、以前はすらん通りの中に「山遊堂すらん通り店」もあったからだ。ところが、すらん通り店を閉めてしまい、本店だけが残ってしまったというわけ。ちなみにこの山遊堂、蔵にも西川口にも店があったのだけれど、その両方とも閉店してしまっている。むちゃくちゃ店舗面積の広い鳩ヶ谷店はまだあるし、ネットで検索すると王子店もまだあるようなのだけれど、いまはその3店舗だけなのだろうか。

それはさておき、「山遊堂赤羽本店」であるが、まずチェックするのは店舗横の均一棚。なんとまあ、台に乗らない限りは手の届か

には覗いてみるのもいいだろう。そのアーケードに入らずに左

の方に進むと、「ブックオフ赤羽駅東口店」がある。2フロアを使って、2階がコミック

ないような高さまでぎっしりと本が詰まっている。店の規模に比較して、均一棚の規模が異様に大きい。もつとも、その均一棚にある本を買ったという記憶は、まったくくないのだけれど。

店内の在庫もけっこう多く、それなりに面白い本が見つかることもある。いままでこの店で買った最高の1冊はというと、香山滋『怪獣ゴジラ』の復刻版だ。実業之日本社から出た『ゴジラ 1954』という2万5千円する大型本についていたもので、オリジナルの岩谷書店版を帯から奥付まできっちり再現したものである。なんでも、そんな豪華本の一部が古本屋に流れたのかは謎だが、入手などまず無理と想像していたこの本が500円で買ってしまったのは実にラッキーであった。

他にも大衆芸能関係で面白い本が買えたりと、なかなか楽しい古本屋さんなのである。

「山遊堂赤羽本店」のすぐ前にある横断歩道を渡って、少し裏道に入ったあたりに「鳥海書房」という古本屋さんがあった。おそらく、神保町にある「鳥海書房」の支店だったのだろうと思う。非常に分かりにくい場所であり、偶然見つけるなどというこの期待できそうにない場所なのだけれど、僕がこの店を見つけたのは本当に偶然からだった。

朝の通勤電車が事故のために川口駅で止まってしまい、復旧までかなり時間がかかりそうだったので、「たった1駅だったら歩いてしまえ」と、赤羽まで歩いたのである。その時に、たまたま見つけ

たのがこの「鳥海書房」だった。もちろん、朝だったので店が開いているわけもなく、その日の会社帰りに速攻でチェックしにいった。

店頭の均一棚の品揃えもよく、けっこう好きなお店ではあったのだけれど、残念ながら数年前に閉店してしまっていた。残念。

ところが、しばらく前に「鳥海書房」のあった場所を通ると、なんと同じ場所に別の古本屋が入っているではありませんか。いつのまにやら、「阿南古堂書店」という古本屋がそこに入っていたのだ。うわあつ、ぜんぜん知らなかったよ。

しかし、無惨にもシャッターが閉まっている。定休日だ。

仕方なく、別の日に行ってみる。ううっ、定休日じゃないのに開いていない。

また別の日に行ってみる。また閉まっている。やってないのか？ この店は開いていないのか？

しかし、検索して見つけたホームページを見る限りでは、別に店を閉めてしまったというわけではなさそう。たまたま、なんらかの用事があった店を閉めている時にぶつかってしまったものらしい。懲りずにまた行ってみる。開いていた！ ようやく開いていたのだけれど、そして面白い本も並んでいたのだけれど、微妙に買った本がない。残念！

【川口（京浜東北線）】

赤羽で京浜東北線に乗り換えて、最初の駅の川口で途中下車。かつては鑄物の街として栄えたらしいが、駅の周辺にはあまりそういった雰囲気はない。鑄物工場などが集中しているのは、もつと川寄りのエリアなのだろう。そういえば、『キューポラのある街』という小説があった。高校生の時に学校の図書館に並んでいるのを借りて読んだが、なぜか最終巻だけが図書館になく、ついに最後の巻を読みそこねてしまった。ちゃんと読み直してみたい気もするのだけれど、この歳になってから読んだところで、かつての楽しさは味わえないのだろうなあ。

まずは東口に出て西川口方面に向かうと、「ブックオフ川口駅東口店」がある。ま、どこにでもあるブックオフだ。

その先の川口陸橋下という交差点を右折すると、「ひまわり書房」があるのだけれど、ここ数年、店を開けているところを見たことがない。検索してみると、「古本屋巡礼記」というブログに2009年6月に店を訪問した記述があるので、どうやらやっていることはやっているらしい。てっきり、閉店してしまったものと思っていたのだけれど。

そして、そのちよつと先の細い道を入ったところにも「古本の店ひまわり」という店舗がある。もし開いていれば、こちらの方が面白い。それなりに広い店内に、床から積み上げた本があちこち

に山を作っていたりして、どこに何が埋もれているのかを探検する楽しさを味わえるのだ。多少珍しい本を見つけても、プレミア価格がついているということもないのが、嬉しいお店なのだ。

ちよつと距離はあるが、「ひまわり書房」の前をずっとずっとずっと歩いていって、川口市役所を通り過ぎたところにあるのが「荒木書店」。けっこう黒っぽい本が揃っていて、丁寧に棚をチェックすれば、なにかしらありそう。実際、店の隅に積まれていた本を徹底的にひっくり返した古本女王・石井さんが、香山滋の『Z9』を掘り出したこともある。その本は僕が買わせてもらったのだけれど、カバ欠で書き込みもあったとはいえ、500円で買ったのだから文句はありませんです。

駅に戻って西口に出ると、西口交差点を左に曲がったあたりに「ブックマート川口店」がある。開店したばかりの頃に偶然見つけてサンリオSF文庫なんかを買えたのだけれど、その後はまったく覗きに行っていない。

そして、ちよつと距離はあるのだけれど、飯塚交差点のところにあるのが「ブックオフ川口飯塚店」。2フロアを使っている店舗で、このあたりではいちばん店舗面積の大きなブックオフではないだろうか？ もっとも、店舗面積のわりに、買いたい本の減多に見つからないお店ではあるのだけれど。

ただし、開店直後には友成純一の『人獣裁判』を105円均一コ

ーナーで2冊買ったし、バンダイのエンターテイメントバイブルのおいしいところを何度も買ったという実績があることはあるので、やはりたまには覗きに行きたいお店ではあるのだ。

その近所に、古いマンガがたくさん並んだ昔ながらの古本屋さんがあったのだけれど、いつのまにか店がなくなっていた。近所にブックオフが開店したあたりをくらって閉店してしまったのだろうか。

【西川口（京浜東北線）】

川口の次が性風俗のお店がズラリと並んでいることで有名だった西川口。しかし、川口警察の徹底した取り締まりによって、性風俗店はこのエリアから次々と撤退し、おかげでテナントの入っていないビルが一気に増え、あつという間に街そのものが寂れてしまったのだという。なんとも、情けない話だ。

ちなみに、なんでまたこのエリアに性風俗店がそんなに多くあったかというところ、鋳物工場で働く職人さんたちが遊ぶためであったという。鋳物工場で働く職人さんというのは、けっこうな高給取りであったのだ。その職人さんたちの相手をするお店が増えてくると、今度はその噂を聞きつけて周辺からここに遊びに来る男性が増え、その結果、いつのまにやら一大ピンク街ができあがってしまったと

いう次第。

いまは、寂れてしまったこの街をどうやって再生させるかという街おこしに頭を悩ませている最中で、飲食店を誘致してB級グルメの街として売り出そうなどというアイデアなどが試されたりしている。

とにかく、空いているテナントビルはいくらでもあるのだ。線路脇に近い最近、ムエタイのジムができたが、そこもつい最近までは性風俗のお店が入っていたところである。いっそ、いろいろな格闘技を誘致して「格闘技の街」として売り出す手もあるかもしれない。ま、僕としては、もっと古本屋が増えてくれるのがいちばん嬉しいのだけれど。

といったところで、さっそく西川口の古本屋をまわってみよう。まずは、東口を出てすぐ横にある「ブックオフ西川口東口店」。

ほとんど駅にくっついた場所があり、途中下車で覗くにはすこぶる便利な場所と言える。しかも、そうした便利な場所でありながら、店舗面積もやたらと広い。3フロアを使っていて、地下がDVDやCD、ゲーム、2階がコミックス、1階がその他の書籍となっている。いかにもブックオフにありそうな本を探しに行くのだったら、まずここを覗くことにしている。

東口を出てまっすぐ進むと、すぐにあるのが「アオイ書店西川口駅前店」。



この店は以前、店頭の均一棚のシステムが面白かった。本の厚さで値段を決めていたのである。値段がいくらだったかは忘れてしまったが、たとえば10センチ100円とか、20センチ200円といった具合。それを測るための目盛りが棚に刻み込んであったのだけれど、いまでもその目盛りの跡が残っている。

この「アオイ書店」はとにかく絶版コミックスに強いお店で、店内のいたるところにレアな絶版コミックスが並んでいる。また、コミックスのセット物にも力を入れていて、ビニールで包んだコミックスの揃いがズラリと並んでいる。ただし、お値段の方もそれなりなので、絶版コミックスに関しては掘り出し物を期待するようなお店ではない。

絶版コミックスに関しては、僕などが手を出すようなお店ではないのだけれど、文庫や単行本の棚に絶版本が紛れ込んでいたり、比較的新しい本が安く並んでいたりとということもあるのです。どちらかというとそちらの期待で覗きに行くお店となっている。

なお、この「アオイ書店」は、本店が別の場所にある。西川口駅から歩いて歩けないこともないけれど……まず歩く人はいないだろうという場所にある。こちらにも、絶版コミックスがむちゃくちゃ充実している。

ただし、支店よりも店舗面積が広く、絶版コミックス以外の品揃えも本店の方がずっと面白い。アダルト関係でも古い本がごっそりと並んでいるし、いわゆる雑本のたぐいがやたらと並んでいて、棚をチェックするのがけっこう楽しい。

ちなみにこの本店、やたらと天井が高くて、通常なら2フロアになるようなスペースが1フロアとなっている。その上の方まで棚が続いているのだけれど、当然、そんな高いところなど、踏み台に乗っても手が届かない。そこで、この店は板を渡して空中通路を作り、非常にアバウトながら店舗を2層に分けているのである。しかも、ネットを張って、上の本が下に落ちないようにしてあるのだ。下から見上げると、そのネット越しに本が並んでいるのが見えるのだけれど、薄暗いので何が並んでいるのかはまったく分からない。

一応、店の奥に階段があつて、「上の本をご覧になりたい方は声をかけてください」と貼り紙がしてあるのだけれど、上にあがっている人を見たことはないし、僕自身もいまだに声をかけられないでいる。もしかすると、お宝が眠っている可能性がないでもないよなあと思いつながら、上層にあがる勇氣は持ち合わせていないのだった。

「アオイ書店西川口駅前店」の前をそのまますすぐ進んでいった先の方に、「山遊堂書店西川口店」があつたが、ここはすでに閉店してしまっている。閉店したあとに、また別の古本屋が入ったが、これまたじきに閉店してしまつた。けっこう店舗面積の広い古本屋だつたので、店内をまわるのが楽しみだつたのになあ。

そして、そのひとつ裏の通りにも「ブック&スペース」という小さな古本屋があつただけれど、ここもいつの間にか閉店してしまつている。

線路を越えて西口に出ると、線路際にあるのが「一力堂宇佐美書店」。角に建つ別の建物を挟み込むようにして建つお店で、細い通路でふたつの店舗が連結されたような、ちよつと奇妙な配置のお店となつている。そのせいもあつて、店内の棚の並び方がいささか変則的で、レイアウトにはかなり苦労したのではないかと思われる。おそらく、可能なかぎり店舗空間を有効に活用しようと試行錯誤をした結果が現在の店内なのだろう。おかげで、それほど広いお店ではないにもかかわらず、ちよつとした迷路感覚の店内となつている。並んでいる本は郷土史などの堅い本が多いものの、よくよくチェックすると雑本のたぐいも多く、床から積まれた本の中に面白そうな本が隠れ潜んでいたりする。

ここのご主人、けっこう話し好きらしく、何度かつかまつて、あ

これ業界の話などを聞かせてくれたことがあった。自分の自慢話が多いのがちよいと難点ではあるのだけれど、楽しいご主人だ。

線路際から離れて駅前通り、イトーヨーカ堂の手前にあるのが「創文堂書店」。ここは、いかにも昔ながらの町の古本屋さんという感じがする。マニア向けの本が並んでいたりはしないけれど、けっこう棚をチェックするのが楽しい古本屋さんだ。

【蕨（京浜東北線）】

きっと、この「蕨」という駅名を読めない方もいらっしゃるだろう。「わらび」と読む。蕨市というれっきとした市であるのだけれど、「面積はとっても狭い。なんと、日本で一番面積の狭い市である。しかも、五十音順で並べると、日本で一番最後になる市町村でもある。小さいながらも、自己主張の強い市と言えよう。そして、古本屋に関して、なかなか充実しているエリアであったりもするのだ。

まずは、東口を出て線路沿いに川口方面に向かうと、「なごみ堂」という小さな古本屋さんがある。線路沿いにあるので、京浜東北線の電車の中からも見る事ができる。電車の中から「おっ、今日はまだお店が開いているな」とか、「なんだよ、もう閉まってるよ」などと確認ができる古本屋さんなのだ。

はつきりいって、この周辺で最強の古本屋さんである。品揃えがあまりにも濃すぎる。しかも、怪しげな本が多く、並んでいる本から「ほら、買おうがよいぞ。オレは面白い本なんだぜ。ほら、買いなさいな」と声が聞こえてくるのである。

大衆小説、大衆芸能関連本、怪しげな実話本などが店内にぎっしりと並んでいる。

しばらく前までは、店内に入って右側の棚にレアな翻訳小説がズラリと並んでいた。ところが、「翻訳小説は売れないんだよねえ。なんで売れないんだろう」などとぼやいていたかと思うと、あっさり翻訳小説を棚から引き上げて倉庫に仕舞い込んでしまった。僕はその棚でネビル・シュートの『操縦士』というむちゃくちゃレアな本を見つけて大喜びしたもののただけれど（読むつもりで買ったのに、読まないうちにどこかに埋もれてしまった。いったい、どこに埋もれているのだろうか？）。

もともとここには、「有藤書店」という古本屋さんが入っていた。翻訳小説を中心にしたお店で、その棚を眺めているだけで心が癒されてしまうような、素晴らしい品揃えの古本屋さんだった。年配のご夫婦がやっているお店で、夏の暑い日に覗きに行けば「冷たいものでもどうぞ」と言って冷えた麦茶をふるまってくれ、冬の寒い日に覗きに行けば「温かいものでもどうぞ」と言ってお茶を出してくれるというお店だった。何も買うものがない時には、お茶だけ飲んで帰るのがなんとも申し訳なくなるのだけれど、そんなことはまっ

たく気にされていないようだった。

ある日、この店の棚でロバート・ネイサンの『それゆえに愛はもどる』を見つけたことがあった。ロバート・ネイサンでただ一冊持っていないなかったのが、この『それゆえに愛はもどる』だった。ずっと探していて、なかなか見つかることのできなかつた本だった。

あまりにも嬉しかったので、ついつい「ずっと探していた本なんです。これでロバート・ネイサンの本が全部揃いました」と奥さんに話しかけると、「あらあ、それは良かったですねえ」と言っていて、奥にいるだんなさんにまで「この1冊でロバート・ネイサンが全部揃ったんですって」と声をかけてくれた。そして、奥から出てきただんなさんが一緒になって喜んでくれて、「じゃあ、これはもうお持ちですか？」って、岩波書店の『いまひとたびの春』を持ってきてくれた、なんてことのあったお店なのである。

「はい。それもこちらのお店で前に買わせていただきました」
そう、『いまひとたびの春』も、この「有藤書店」で買うことのできた本だったのだ。

その「有藤書店」がネット専業に移行して、あの棚を眺める悦楽は失われてしまったのだけれど、その店舗を引き継いだ「なごみ堂」さんは、しっかりその精神を引き継いで、素晴らしい棚を作っていた。人づてに聞いた話では、「なごみ堂」のご主人は、もともと「有藤書店」のお客さんだったとか。なるほどと頷ける品揃えの棚である。

この「なごみ堂」で買ったレア本はというと、実にあれこれあるのだけれど、先ほどのネビル・シュートの『操縦士』以外に、『裸の自叙伝 ストリップ半生記』ジプシー・ローズ、『活動屋日記 美人発掘』栗田信、『姿三四郎の手帖』『亜細亜は一なり』富田常雄などなどといったところがある。なにせ、店を覗きたびに必ずなにかしら買っている。たいていの古本屋は、覗きに行っても手ぶらで出てくることの方が多いのだけれど、この「なごみ堂」だと、なにかしら買いたくなる本が必ずあったりするのだ。

などと絶賛しながらも、実はたまにしか店を覗きに行っていない。なぜかというところ、会社帰りに寄ろうと思っても、閉まっていることが多いからなのだ。夜の8時閉店が基本なので、ちよつとでも残業をしないと、もう間に合わない。しかも、こないだ覗きに行った時には「最近7時に閉めているんですよ」などと言う。それじゃあ、会社帰りにはまったく間に合いません。でも、まあ、たまに覗きに行くくらいがいいのでしょね、きつと。

その「なごみ堂」の比較的近くにあるのが「ブックオフ蕨駅東口店」。

ま、しょせんブックオフですから…などと甘く見てはいけない。この「ブックオフ蕨駅東口店」は、他のブックオフでは扱わないような多少古い本が平然と並んでいたりのりである。しかも、ふと

気がつくくと、ミステリの絶版が105円の均一棚にけっこう紛れ込んでいたりすることもあるのだ。横溝正史や山田風太郎の絶版が並んでいることだってあるという、実にブックオフらしからぬブックオフなのである。

さらには、文庫の50円均一棚があったり、単行本の300円均一コーナーがあったりと、なんとも不思議なブックオフなのである。そこから駅前大通りに戻ると、すぐの左側に「エンターキング蕨駅前店」がある。ゲーム、コミックスに力を入れたチェーン店であるのだが、小説の単行本なども新しめの本が並んでいる。

また、その駅前大通りをさらに進むと、右側に「渋谷書店蕨店」がある。アダルト書籍をメインに扱うチェーン店だが、オープンした直後には小説やコミックスの絶版を格安で買うことができた。いまじゃ、もう覗きに行く気はしないのだけれど。

歩いていくにはちよいと遠いが、そこをさらに先まで進むと、猫橋という奇妙な名前の交差点があり（橋があるのか？ まったく印象にないのだけれど）、その先の左側に古本屋が一軒あったが、なんとという名前のお店だったか？ ネットで検索しても見つからないのだけれど、昔ながらの町中の古本屋という感じのお店が一軒あった。久しく覗きに行っていないので、まだあるのかどうかは分からないのだけれど。

そして、さらにその先には右側に「古本三国志芝店」というお店があるが、規模の小さな新古書店なので、正直、面白みはない。い

ずれにせよ、歩いていく距離じゃないので、覗きに行くこともないのだけれど。

駅近くまで戻って蕨陸橋東という交差点から細いバス通りを浦和方面に入ると、「Bパラダイス」という古本屋がある。ま、いわゆる新古書店というやつで、これまた特にコメントはなし。

そこをさらにまっすぐにどんどん進んでいくと、ちよいと距離はあるのだけれど、「春日書店」という古本屋さんがあって、黒っぽい本がけっこう並んでいる。絶版文庫の棚が充実している他、大衆芸能関係の本やスポーツ関係の本などもたっぷり並んでいる。アダルト雑誌の棚にも、古いプレミア本が多く並んでいた。レジの後ろの棚に並んでいる絶版コミックスも、半端でなく充実している。

ちなみに、ホームページで目録販売も行っているが、店頭に並んでいる本をそのままホームページの目録に掲載しているので、店頭で売れるたびにホームページの目録から削除したりしているのだろう。管理がけっこう大変だろうなと、つつい余計な心配をしてみよう。

しばらく前に覗きに行った時には、店内の棚がスカスカに空いていたので、てっきり閉店してしまうのかと思ったのだけれど、特にそういうこともないようなのでひと安心している。棚の変化が乏しいので、そうそう頻繁に覗いても買う本があるというわけでもないのだけれど、けっこう好きな古本屋さんなのだ。

「春日書店」の近くには「池宮書店川口芝店」という小さな古本屋さんがあったが、ここはもう何年も前に閉店しているはず。たぶん、神保町にある池宮書店の支店だったのだろう。

いったん駅に戻って西口に出ると、駅前交差点を左に曲がったところに「旭書房」がある。ここは、絶版コミックスがやたらと安いのが最大の特徴だろう。なんでこのコミックスがこの値段で並んでいるのだろうと、不思議に思えてしまうくらいに安い。絶版であっても、一般のコミックスと値段が変わらないのだ。もちろん、プレミア価格をつけているコミックスもあるのだけれど、それにしてもそうそう無茶な値付けにはなっていない。

絶版コミックスのコレクターだったら、覗いて損はない古本屋だろう。

しかし、絶版コミックスのコレクターではない僕だって、何度もおいしい思いをさせてもらっている。講談社文庫の江戸川乱歩推理文庫の最後の1冊『偉大なる夢』を入手したのもこの店だし、山田正紀のもっとも入手困難と言われている『化石の城』があったのもこの店だ。定期的に覗く価値のある古本屋さんなのである。

西口にはもう1軒、「森のしずく」があるが、こちらは特に黒っぽい本もなく、店の奥のアドルト書籍がメインという感じなので、特にコメントすることはない。

【南浦和（京浜東北線）】

いよいよ最後の駅となった。本当は最寄り駅は武蔵野線の東浦和駅なのだけれど、不便な武蔵野線を使いたくないがために、自転車で南浦和まで出ているのだ。

で、その南浦和の古本屋はというと…西口に「古本三国志」というお店があるのみ。チェーン店で、かつては南浦和の東口にも店舗があったが、こちらはあっさり閉店している。そして、西口の「古本三国志」だが、蔵にある「古本三国志」と同じで、まったく覗きに行く気になれない品揃え。たまに通りすがりに覗くこともあったが、まるつきり本を買ったことがない。

悲しいかな、最後の駅にある古本屋はこれだけなのだ。西口に大型の新古書店が誕生して、少年倶楽部文庫を大量に買ったこともあったし、東口のすぐ横に小さいながらも面白い本の紛れ込む古本屋があったこともあったし、自転車でちよつと寄り道すれば「とれいん書房」というちよつとおいしい古本屋もあったのだけれど、それらの古本屋はみんな消え失せてしまった。

おかげで、南浦和からは寄り道をせずにまっすぐ帰宅することになってしまう。せめて通り道に定点観測するにふさわしい古本屋の1軒もあれば、ありがたいのに。

ジュニア文庫への招待

本稿のタイトル、「ジュニア文庫への招待」には、実は大いなる嘘が隠されている。なぜなら、ジュニア文庫を代表する名作の数々を紹介しようなどというつもりはさらさらないからだ。そもそも、あの膨大な量のジュニア文庫の全体像を把握した上で、その精華ともいべき作品を紹介する作業など、とてもじゃないが僕の手にはあまる。そういうことは、僕のようなジュニア文庫をちよつとかじっただけという人間にはなく、もつともつとディープにのめり込んでいる方にお任せしたい。

じゃあ、僕がここで何を書こうとしているかというと、実は絶版になっているジュニア文庫の紹介なのである。なにしろ、ジュニア文庫は絶版本の宝庫なのだ。現役である本よりも、絶版になっている本の方がはるかに多い世界なのである。しかも、その中には大人向けの小説に移行してメジャーとなった作家が、人知れず出していた作品なんてのがけっこう隠されている。であるからして、そうした作品を紹介し、「さあ、皆さんも一緒に古本屋をまわってジュニア文庫を漁ろうではありませんか」と、そのようなお誘いをしたいと考えているわけなのです。

ただし、出版点数はやたらと多いが、発行部数はひたすら少ない

ジュニア文庫である。しかも、1冊50円とか100円といった値段しかつかないジュニア文庫は、古本屋にとって積極的に扱いたいジャンルであるわけもなく、流通のしづずらい商品なのである。よって、お目当ての本を見つけ出すというのは、そう簡単なことではない。探せども探せども目的の本は見つからず、1冊の本を手に入れるのに古本屋行脚を何年間も続けなければならないということもマレではない。10年以上探し続けて、ついに見つからないなんてこともあたりまえの世界なのである。

つまり、「絶版ジュニア文庫を求めてひたすら古本屋をまわる泥沼の日々への招待」というのが、本稿の正確なタイトルであったりするわけなのです。ちよつとトホホ、かな。

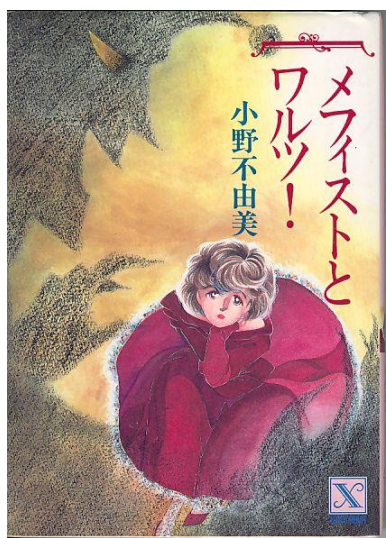
さて、前置きはそのくらいにして、まずは『屍鬼』というとてもない大作でステイヴン・キングを越えたという評価すら得た小野不由美が登場願おう。「十二国記シリーズ」「悪霊シリーズ」で小野不由美がジュニア小説の書き手であるということは周知の事実であるが、実はデビュー作以降の3作が絶版になっているのである。

1作目は『バースデイ・イブは眠れない』。アマチュア劇団を舞台にしたサスペンス小説である。そして、その続編の『メフィストとワルツ!』はなんとコンゲーム小説だ。少女小説でコンゲーム小説というのはかなり珍しいと思うが、それを本格的にやってしまうところがさすがは小野不由美。そして、3作目の『悪霊なんかこわくない』はお化け屋敷をテーマとしたホラー小説で、これがけっこ

うコワイ。はつきりいって絶版本にしておくにはもったいない作品だ。

発行元は講談社X文庫ティーンズハート。集英社文庫コバルトシリーズと並ぶ女の子向けジュニア文庫の老舗で、ピンク色の背中が目印。古書店の文庫の棚で、ピンク色に染まったコーナーがあれば、そこがこのティーンズハートのコーナーであると思つて間違はない。上記の3冊を手に入れようと思つたならば、ひたすらこのピンク色の棚をチェックするというのが、唯一の道なのである。

だがしかし、問題がひとつある。このピンク色の棚は、僕のように小さい歳をしたおやぢが血マナコになって本を漁るには、ヒジョーに恥ずかしいコーナーなのである。なにしろ、この棚の前にいるのは中学生ぐらいの女の子ばかりなのだ。その女の子たちをおしのけて、眼底がピンク色に染まるまでピンクの棚のチェックをしなければならぬのである。



しかも、この3冊の入手の困難さは超A級といつてよく、何年探そうともまるで見つからないという可能性も充分にある。特に見つからないのが『メフェイスとワ

ルツ!』。この見事なコンゲーム小説が見つからないなんて……すでに持っている僕にとっては至上の喜びだったりするわけですね(笑)。苦勞して手に入れた者としては、再版だけはしてもらいたくないと切に願うしだいなのであります。

ちなみに、小野不由美にはもう2冊、マニア泣かせの絶版文庫があった。たった10冊の本を出ただけで姿を消してしまったパンブキン文庫から出た『呪われた十七歳』『グリーンホームの亡霊たち』の2冊。ほとんど絶望的に入手の難しい本であったのだが、講談社X文庫ホワイトハートから加筆改題のうえで再発行されている。どうしてもオリジナルバージョンで読みたいという方だけ、泣きながら古本屋まわりを続けて下さい。

次はダークパワーみなぎる力作、『OUI』でいっきにブレイクした桐野夏生に登場願おう。『OUI』の作風からは想像もつかないだろうが、桐野夏生はその昔、野原野枝実というペンネームでそれはそれは可愛らしくも楽しいジュニア小説を書いていたのである。

発行元はMOE文庫というところで、そこから11冊の本が出されている。タイトルを列記すると、『恋したら危機!』『恋したら危機!パート2』『恋したら危機!パート3』『あいつがフィアンセだ!』『媚薬』『急がないと夏が……』『トパーズ色のBAND伝説』『セントメリーのお茶会にどうぞ』『銀の指輪は冷たく輝く』『小麦色のメモリー』『恋の偏差値しあわせ未満』。青春ラブストーリー、

SF、ファンタジー、コメディなど題材はバラエティに富んでいるが、どれもキャラクターがたっているし、文章もしっかりしているので、クイクイ読まされる。

特にお勧めなのは「ブルーサイド・ファンタジー」と銘打たれた『急がないと夏が……』。これは、ジャック・フィニー風の時間をテーマとした良質のファンタジーなのである。とてもとても『OUI』と同じ作者が書いたとは信じられないピュアな物語なのだ。

なお、MOE文庫が潰れたあと、集英社文庫コバルトシリーズから『涙のミルフィーユボーイ』『ガベージハウスただいま五人』という作品も出ているのだが、当然ながらこちらも絶版だ。

どれもこれも入手の難易度はそれなりに高い。ここにタイトルをあげた13冊を全部揃えようと思ったら、やはり古本屋のジュニア文庫の棚の前に何年も何年も立ち尽くす日々を過ごしていただくしかあるまい。

さて、続いて『不夜城』の馳星周にも登場願おう。桐野夏生と同時期に推理作家協会賞を受賞した馳星周にも、別名義でジュニア小説を書いていた過去があるのだ。その時に使っていたペンネームは古神陸といい、その名義で出した10冊の小説のうち3冊が小学館スパークエスト文庫より発行されている。もちろん、入手難易度超A級の絶版本である。

作品のタイトルは『双龍伝①』『双龍伝②』『アルティメット・ブレイド』。いずれも格闘技をテーマとした作品で、『双龍伝』の方は夢枕獏の



『不夜城』以降の作品とは光と影のように、まるつきりの対極にある作品である。

ちなみに、これらの作品については馳星周名義で再刊することは絶対にしないと著者本人も断言しているので、将来的には貴重なコレクターズアイテムとなること間違いなし。安心してレアコレクションとして本棚に並べておける本なのである。

余談になるが、古神陸名義の作品では、『不夜城』よりもあとに発行された『Ribbon』という小説が異彩を放っている。なにしろ、他の作品が基本的に活劇小説であるのに対し、この作品はバリバリのポルノ小説なのだ。ジュニア文庫ではないが、ぜひともコレクションの中に加えておいて、著者がその存在を忘れた頃に不意打ちのようにサインを求めるといいだろう。

中国を舞台にした歴史小説、武侠小説、ファンタジー小説で独自

一連の格闘技小説に対するオマージュといったおもむきのある力作だ。『アルティメット・ブレイド』の方は、一転してひたすら軽いノリの小説で、読んでいてヒジョーに楽しい。『不

の世界を築き上げた井上祐美子も、ジュニア文庫の出身である。いちご文庫というところから、『虹の瞳きらめいて』『ローズ・ガードンの夏物語』という2冊の本を出している。ただし、この2冊には中国のチュの字も出てこない。著者が中華モノに目覚める前の作品なのである。もつとも、中世ヨーロッパ風の世界を舞台にした異世界ファンタジー『虹の瞳きらめいて』などは、その世界を中華風に変えてやれば『桃花源奇譚』につながるのだと思えないこともないのだが。

著者本人から聞いた話では、実は3作目も書きあげていたのであるが、刊行にいたる前にいちご文庫が消滅してしまったのだという。惜しい。ちゃんと出ていけば、探すべき絶版本が3冊に増えていただろうに。

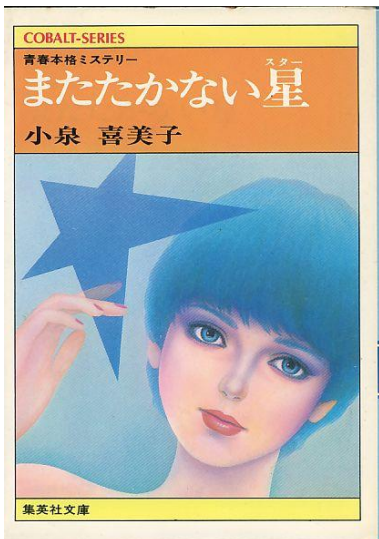
それはさておいて、このいちご文庫、他にもチェックすべき作品の多い文庫である。たとえば、川又千秋、横田順彌、井上雅彦といった面々が別名義で出した小説が収録されていたりするのである。また、横溝美晶、志茂田景樹といった作家の作品もあり、ジュニア文庫コレクターのスケベ心をみごとなまでにそそってくれる文庫なのである。いまのところ、このいちご文庫を揃えることに成功したという例を僕はただの1人も知らない。チャレンジしがいのある文庫なのだ。

なお、いちご文庫の作品の多くは、中国語に訳されて台湾や香港のコンビニに並んでいるという情報もある。中国語が読める人なら

ば、こちらで入手の方がよほど簡単かもしれない(笑)。

それにしても、MOE文庫だの、パンプキン文庫だの、いちご文庫だの、ほとんどの人にとってはまるで馴染みのない世界の話だろう。まったくもって、ジュニア文庫の世界も奥が深い。たとえば、ケイブンシヤ文庫コスモティーンズをご存じだろうか。ホラー小説をメインに出していたジュニア文庫のだが、ここからは朝松健、田中文雄、竹河聖、眉村卓といった面々の本が出ている。また、アルゴ文庫といってたった4冊の本を出しただけで姿を消してしまった文庫もあるのだが、なんとその4冊の中には横田順彌や松尾由美の作品が紛れこんでいるのだ。まったくもって油断のできない世界なのである。

しかも、油断できないのはそうしたマイナーな文庫だけではない。集英社文庫コバルトシリーズには小泉喜美子の『またたかない星』



山尾悠子の『オットーと魔術師』、佐々木譲の『ベイシティ恋急行』なんて作品が入っているし、講談社X文庫ティーンズハートからは『狼叫』、『頭弾』で冒険小説ファンを熱狂させた



樋口明雄が牧村優名義で出した『星降る街に』『霧の学園』が出ているし、ソノラマ文庫には辻真先の『佐武と市捕物控』、野村胡堂の『岩窟の大殿堂』六一八の秘密』、香山滋の『海底

牢獄』『悪魔の星』、高木彬光の『死神博士』『白蟻の鬼』、今日泊亜蘭の『アンドロロボット'68』なんて作品があるのだ。

どうだろう、さすがに読んでみたくなる本がなにかしらあるのではないだろうか。すぐにでも古本屋に駆けつけて、ジュニア文庫の棚を漁ってみたくはならないだろうか。ジュニア文庫の中には、子供向けの本とバカにできない作品がわんさと紛れこんでいるのです。さあ、皆さんも一緒に絶版ジュニア文庫を求めてひたすら古本屋をまわる泥沼の日々に突入しようではありませんか。運さえよければ、4〜5年ぐらいで、ここに紹介した本の数冊ぐらいは手に入ることができるとでしょう(笑)。

といったところで、最後にとっておきの珍品を紹介しよう。ジュニア文庫の老舗中の老舗といえば秋元文庫ということになるのだろうか、その中にとんでもない作家の小説がまぎれこんでいるのだ。

そのとんでもない作家とは、武内つなよし。そう、あの『赤胴鈴之助』の著者である武内つなよしの書いた小説が秋元文庫から出ているのだ。タイトルは『異次元の光体』。驚くなかれ、なんとあの「少年ジェット」が主役の小説なのだ。あのブラックデビルだって登場してくるのである(若い人は知らないだろうなあ)。どうです、欲しくなるでしょう。

だけどこの本、そう簡単に見つかる本でないことだけは保証する。聞いたところによると、この本に8千円出して購入したマニアもいるとか。それぐらいレアな本なのである。

だが、もし近所のブックオフにこの本が紛れこんでいたとすれば、たぶん値段は100円であろう。なんと、いつきに7千9百円の大儲け! さあ、いまずぐ近所の古本屋に走ろう。絶版ジュニア文庫を探しに行こう!

【探せるもんなら探してみやがれの絶版ジュニア文庫10冊】

『異次元の光体』武内つなよし／秋元文庫

『メフィストとワルツ!』小野不由美／

講談社X文庫ティーンズハート

『霧の学園』牧村優(樋口明雄)／講談社X文庫ティーンズハート

『急がないと夏が……』野原野枝実(桐野夏生)／MOE文庫

『アルティメット・ブレイド』古神陸(馳星周)／

小学館スーパークエスト文庫

『虹の瞳きらめいて』井上祐美子／いちご文庫

『異次元カフェテラス』松尾由美／アルゴ文庫

『またたかない星』小泉喜美子／集英社文庫コバルトシリーズ

『ベイシティ恋急行』佐々木譲／集英社文庫コバルトシリーズ

『佐武と市捕物控』辻真先／ソノラマ文庫

初出…「おすすめ文庫王国」8「本の雑誌社

1999年12月

均一棚への招待

1995年の4月以降、買った本をデータベースに入力して記録に残すようにしている。それからおよそ十年の歳月が流れ、いったい自分が何冊の本を買ったのかをチェックしてみると……:チェックなんかするんじゃないかった。知りたくなかったぞ、こんな数字。こんな数字というのがどんな数字かという、なんと1万とんでとんでイスタンブルじゃなくって9冊だ。みごとなまでに1年千冊のペースで本を買い続けているということらしい。その1万9冊に費やした金額もちゃんと記録に残っているのだけれど、武士の情けでそれだけは聞かないでほしい(武士じゃないけどさ)。はっきりいって、自分でも知りたくない。

その1万9冊のうち、文庫は全部で4301冊。これまた武士の情けで、そのうちの何冊を読んだのかなどというヤボなことは聞かないでほしい(だから武士じゃないっちゃうに)。読むために買ったのではなく、本を買うのが好きだから買っているのだと理解していただきたい。ちよつとした気の迷いで読んでしまうこともあるのだけれど、基本的には純粹に買うという行為が目的なのだ。読むために買うなどという、そんな不純な動機から本を買ったりなどしてないのだ(あ、これちよつと嘘)。

ま、読了した冊数は勘弁してもらおうとして、そのかわりにその4301冊の文庫につき込んだ金額の方は正直に白状してしまおう。えーと……:62万1499円だ! うわーっ、いま初めて知ったけど、ほとんど読もしない文庫にそんなに金を使っちゃってるのかよ。我ながらかなり衝撃的な金額だぞ。ダメージが大きいぞ。

だけど、ちよつと冷静になって計算してみると、これって1冊あたりたったの145円にしかないじゃん。や、安い! 安すぎる。いくら古本屋の均一棚で買うことが多いからといって、1冊145円かよ。缶ジュースなみじゃん。

そこでさらに調べてみると、100円以下で買っている文庫が2890冊であることが判明。買った文庫の7割近い冊数だ。かつて喜国雅彦氏から「100円おやじ」だの「3冊200円おやじ」だのというぜんぜんありがたくない称号をいただいて、「そ、そんなことはないぞお!」と反論したのだけれど、もう反論できません。

そこで今回はすっかり居直って、古本屋の均一棚をマメにチェックしていけばこんな文庫が手に入るんだぞ、均一棚はこんなに楽しいんだぞ、さあ、みんなと一緒に均一棚で文庫を捜そうよ、などという原稿を書いてしまうことにしよう。

まずはとつても簡単に見つかる絶版文庫からスタートしてみよう。樋口明雄の『爆風警察』『爆風警察2 バトル・インフェルノ』

の2冊（ともにソノラマ文庫ネクスト）。

警視庁のみだし集団・特別捜査班の活躍を描くノンストップアクションだ。1作目ではテロ組織を相手にした死闘を描き、2作目では元中国特殊部隊にいた不死身の超人との戦いが歌舞伎町を戦場に変える。とにかく派手でスピーディーでむちゃくちゃ面白いアクション小説なのだ。正統派冒険小説魂と正調ジュニア小説魂とが理想的な形で融合した面白小説なのである。

にもかかわらず、ソノラマ文庫ネクストそのものが刊行中止となったため、この2冊は絶版。第3弾も刊行予定なし。実に実に残念。

樋口明雄では、他に高校の映画研究会を舞台としたハイパーアクションシリーズ『ハイスクール重機動作戦』『ヴァンパイア特捜隊』『爆風カーニバル』『ハート・オン・ファイア』の4部作もお勧めだ（こちらは富士見ファンタジア文庫）。いずれも古本屋の均一棚を少しマメにチェックすれば容易に見つかる本だろう。とりあえずはこのあたりで均一棚で文庫本を安く見つける楽しさの一端を味わっていただきたい。これが「3冊200円おやじ（もしくはおばさん）」への第一歩だ。

お次はちよいとだけ難易度を上げる。藤本泉の『オーロラの殺意』『東京ゲリラ戦線』『呪いの聖域』（いずれもハヤカワ文庫JA）。

藤本泉というと江戸川乱歩賞作家という印象が強いためにミステリ作家と捉えられがちだが、実は「ありえたかもしれないもうひとつの日本（たとえば、アメリカとソ連に分割統治された日本）」

などを描いたSF小説にも優れた作品が少なくない。このあたりでSF作家としての藤本泉を再評価するためにも、この3冊を均一棚で探してみよう。いや、再評価するためには均一棚で見つける必要はないのだけれど、再評価などというお題目を掲げた方が本を探すという行為に説得力を持たせることができるかと思っ、ちよとっかつつけてみました。要は、ちよとっ珍しい本を安く見つける面白さを味わってもらいたいだけなんです。再評価なんかなくても、あるいは買った本を読まなくても、どうでもいいんです。

ちなみに先日、行きつけの古本屋の3冊200円の棚で『東京ゲリラ戦線』を見つけて、すでに持っているにもかかわらず買ってしまったのだが（だって、安いんだもん）、あきれたことにその翌週にも同じ棚に『東京ゲリラ戦線』が並んでいた。さすがに2週連続では買わなかったが、場合によってはこの程度には見つかる本なわけです。ぜひ探してみてください。

さらに難易度をあげてみよう。春陽文庫の明朗小説、青春小説、ユーモア小説。

春陽文庫というと時代小説や探偵小説というイメージしか持っていない人も多かろうと思うが、かつては三橋一夫、鳴山草平、園生義人、白川渥、中野實、中村八朗、竹森一男といった作家たちの明朗小説やユーモア小説が山のように出されていたのである。そして、これが実はどれもこれもとつても面白いのだ。当時としてはごくごく一般的な水準の娯楽小説だったのかもしれないが、今の目で

読むと、実におおらかでのんびりとしていて、一服の清涼剤のごとき読後感を味わえるのである。しかも、昭和30〜40年代の風俗の描写なども興味深く、今の娯楽小説とはまるで異なる読み方を楽しむことができるのだ。

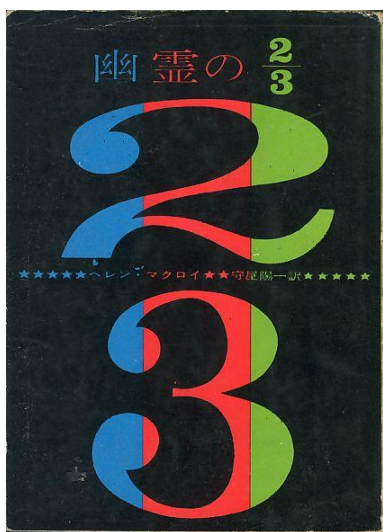
特にお勧めなのが中野實。『新婚リーグ戦』『恋愛百メートル自由形』『花婿三段跳び』『娘十八御意見無用』『乙姫様御上陸』などなど、タイトルを見るだけでもワクワクしてくる。そして、ギャグでんこ盛りのテンポのいいセリフを楽しんでいると、1日に3冊でも4冊でも読めてしまうのである。滅多に手に入らない本なのに、1日に何冊も読めてしまうというのは実に困ったものだと思うが、本当にあつと言う間に読めてしまうのだ。

さすがにこのあたりの本を見かけることはそう多くはないが、それでもプレミア価格をつけている古本屋はまだごくごく一部の店にすぎない。町中の古本屋に出れば、たいていは均一棚に並ぶ。あれば1冊100円以下で買えることの多い文庫なのだ。そもそも、もとの定価が安いということもあり、プレミア価格をつけるか均一棚に並べるか、そのどちらかしかありえないのだろう。運さえよければ、誰かが放出したのであろう古い春陽文庫がごっそり均一棚に並んでいる光景に出会うこともあるだろう。

ここまで国産小説の紹介が続いたが、もちろん翻訳小説でも均一棚で探す楽しみを味わせてくれる文庫は山のようにある。たとえば、数少ないながらも文庫に収録された西部小説を集めていくとい

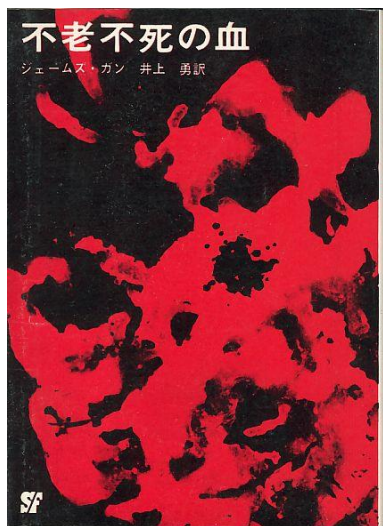
うのはいかがだろうか。

比較的入手しやすい本ならば、ジャック・シェーファアの『シーズン』（ハヤカワ文庫NV）、アーネスト・ヘイコックス他の『駅馬車』（ハヤカワ文庫NV）、マックス・ブランドの『砂塵の町』（中公文庫）、トム・イードスンの『セント・アグネスの戦い』（集英社文庫）、テイバー・エヴァンズの『連邦保安官』（創元推理文庫）といったあたりがあるが、均一棚で探して面白いのは角川文庫だろう。角川文庫からは『11人のカウボーイ』ウイリアム・D・ジェニングス、『ロイ・ビーン』C・L・ソニクセン、『小さな巨人』トーマス・バージャー、『夕陽に向かって走れ』ハリー・ロートン、『ジョリー』ミルトン・バス、『ホワイト・バツファロー』リチャード・セイルといった西部小説が出ている。これらを均一棚で見つけて揃えていくとなると、けっこう手間がかかるだろう。が、ここはひとつ均一棚にこだわって探していったきたい。いや、あなたがこれらの小説をどうしても読みたい、お金をいくら積んでもいいから手に入れて読みたいと、そうおっしゃるのなら均一棚にはこだわらない。だけど、そうまでして読みたい人がどれだけいます？ まあ、安く手に入ったら読んでもいいかなとか、その程度の人がほとんどでしょう。なら、均一棚です。缶ジュース1本にも満たない金額でこうした西部小説が手に入るのなら、たとえ読む気はなくても買ってみたいかなと、そう思いませんか？ そして、真っ白の背中に黒の文字が入っているだけのシンプルな装丁のこの頃の角川文庫



覚悟しなければ入手は難しい本でしょう。が、間違いなくこれらの本も均一棚に並びぶことがあるのです。僕自身の経験からいうと、『不老不死の血』を均一棚で発見する確率はよくて1

が本棚に揃ってくる、なんとなくもつと増やしていきたいというそこはかかない野望が芽生えてきたりして。そうしたら、もつともつとディープに角川文庫の絶版翻訳小説の世界にのめりこんでいって欲しい。角川文庫は均一棚で見つかるレア小説の宝庫ともいえるべき世界なのですから。ミステリからホラーからSFから文芸作品まで、誰も知らないような小説が山のように埋もれているのです。さて、こうやって均一棚で探していつて楽しい文庫のタイトルを列記していくと、紙数がいくらあっても足りないのだけれど、このあたりで一気に超ウルトラ級に入手難易度の高い文庫の紹介に移ろう。創元推理文庫の『幽霊の2/3』ヘレン・マクロイ、『水平線の男』ヘレン・ユースティス、『不老不死の血』ジェームズ・ガン。「そんなんが均一棚にあるかあ!」、思わずそう叫びたくなる方もいらつしやることでしょう。確かに、それなりのプレミア価格を



00円おばさん」への道をともに歩もうではありませんか。えっ? そうまでして20年に1度の『幽霊の2/3』や『水平線の男』を手に入れたとして、そんなに面白い小説なのか

0年に1度、『幽霊の2/3』『水平線の男』は幸運に恵まれて20年に1度といったところでしょう。もちろん、幸運に恵まれなければ一生かかってもこれらの本を均一棚で発見することはできません。だけど、宝くじだって買わなければ絶対に当たらないのと同じで、均一棚のチェックをしなければ絶対にこれらの文庫を100円で買うことはできないのです。そして、10年に1度しか見つからないようなレアな文庫であっても、そうした本のリストが10冊分あれば毎年のように10年に1度の超レア文庫を均一棚でゲットすることが可能です。120冊分のリストを持っていれば、毎月のようにとんでもない大物を均一棚で見つけて血風を吹かせることができるのです。さあ、あなたも今日から絶版文庫のリストを片手に古本屋の均一棚をチェックしてまわり、栄光の「3冊200円おやじ」「3冊200円おばさん」への

って？ そりやもちろん、読む気のない僕に分かるわけがないじゃありませんか。

初出…「おすすすめ文庫王国2003」本の雑誌社

2003年12月

バブル崩壊の日は近い？

「古本は安い！」、僕はいままでその言葉を至上の人生訓として日々を過ごしてきた。もちろん、世の中には壮絶に高い古本もあるのだということは、充分に分かっている。「ぐおっ！ 我が家の車よりも、この本1冊の値段の方が高いじゃないかあ！」とか、「ぎよえっ！ この雑誌の揃いで家が1軒建つんじゃないかあ！」という驚愕の叫びを、いったい何度繰り返してきたことか。が、しよせんそういう本は自分とは無縁であると思っていた。自分の生活圏の中にある古本とは、主に3冊200円、1冊100円、どんなに無理しても1冊3千円、せいぜいがそんなものかと思っていたのだ。それがため、マンガ家の喜国雅彦さんからは「3冊200円おやじ」という称号をたまわり（まるつきり嬉しくないぞ）、猟奇の鉄人 Kashiba 氏からは「均一棚の魔術師」と呼ばれるようになってしまったのであるが（こっちはちょっとだけ嬉しい）、とにかく「古本とは安く買えるもの」というのが僕の信念であった。

ところが最近、この信念にひびが入りつつある。そのきっかけのひとつが「ヤフーオークション」であった。インターネット上でさまざまな物品のオークションを行なっているサイトが誕生していることはすでにご存知の方も多いと思うが、そのひとつがヤフーオ

ークションである。僕はその中のミステリーやSFを扱っているコーナーを頻繁に覗いているのだけれど、時として思いもよらない本が恐るべき値段で落札されることがある。

たとえば、一部でカルト的人気を誇る佐々木丸美の本であるが、文庫落ちしていない作品が出品された場合、平気で1万円を越えてしまったりするのである。古本屋の店頭では100円均一台以外で見かけることの方がマレな本だというのに。

また、小野不由美のデュー直後の3冊、『悪霊なんかこわくない』『バースデイ・イブは眠れない』『メフィストとワルツ！』、このあたりが出ても簡単に1万円の大台にのってしまったりする。今までに見た最高記録では『メフィストとワルツ！』の2万6500円とこのがある。自慢じゃないが、僕はこの『メフィストとワルツ！』を50円で入手している。『バースデイ・イブは眠れない』と『悪霊なんかこわくない』の2冊は、いままではあわせて12冊買っているが、その合計金額は1055円だ（ああ、これを人に譲らずにとっておけば、大儲けじゃないかあ！）。

さらに茅田砂胡の『デルフィニア戦記』の原型となった『王女グリンダ』の2冊も凄い値段になる。大陸書房から出たこの2冊は、著者本人が二度と再刊することはないと宣言していたこともあり、オークション価格がどんどんセリ上がってしまった、ついには2冊で2万4500円という値段まであがっているのを目撃したことがある。ブックオフで見つけりや、高くて定価の半額だというのに。

そしてきわめつけが、横溝正史の『悪魔の手毬唄』。なんと、角川文庫の『悪魔の手毬唄』初版が6万円台で落札するのを目撃してしまったのである。ポーゼン。だって、だって、たかだか角川文庫だよ。角川文庫1冊にどうして6万円も払う気になる？ しかも、そこまでセリ上がったってことは、少なくとも2人はそのくらいの値段を出しても買いたいと思っただってことなんだけど……。

かくして、僕の持っていた価値観は根底からくつがえされてしまうことになる。もしかすると「古本は安くはない！」のかもしれない。安いと思っていたのは、単なる幻想だったのかもしれない。安く見つけるってことはウルトラ超絶大ラッキーなことだったのかもしれない……。

そして、悪魔が囁きかける。「安く買ったら、高く売りやあいじゃん」。ああ、高原の岩清水のように澄みきった僕の古本ライフレにそんな不純な欲望が！ いかん、いかんぞお！ だが、100円均一台で佐々木丸美を見つけたたびに「ウワッハッハッハ、今日はついてるぜえ！ これで9900円の儲けだあ！」などと思ってしまうのである。あげくの果てに「我が家には100円で買った本が山のようにある↓つまりオレは金持ちなのだ↓いくらでも高い本を買ってやるぜえ！」という幻想にとりつかれてしまうのである。いやはや、バブル絶頂期に浮かれ騒いでゴルフの会員権とか不動産やらを買いかさっていった人たちの気持ちがよく分かってしまっているのか。

ところで、僕の好きな作家に香山滋がいる。『ゴジラ』の原作者として知られる作家であるが、古本の世界では高値のつく作家としても知られている。「古本は安い！」を信条とする僕にはなかなか手の出ない作家ではあるが、無理のない範囲でコツコツと集めてきた。そして、その香山滋のサイン本を手に入れるというのが、僕の長年の夢であった。

しかし、ただでさえ古書価の高い香山滋である。そのサイン入りの本となれば、天文学的な金額になってしまうのは目に見えていた（えーとー、天文学って5桁の数字を扱う学問でしたっけ？）。それゆえ、香山滋のサイン本入手は、見果てぬ夢と諦めていた。

ところが、ヤフーオークションのために金銭感覚が完全に麻痺したまさにその瞬間に、僕は香山滋のサイン本を見つけてしまったのである。インターネットの古書店の目録に掲載されていたのだ。お値段はというと……5万円。通常の僕にしてみれば、たかだか1冊の本につく値段とは信じ難い金額である。

が、なんとたつて気分はバブル絶頂期。「5万円？ ということはさあ、100円で買える本5冊分の金額じゃん。ちゆうことは、500円のことかあ？ くう、たまんねえなあ。たかだか500円で香山滋のサイン本が買えちゃうのかよ」

大いなる誤解である。誰がどう見ても、大間違いである。が、金銭感覚を喪失した僕には、それがまるで見えなかった。喜々として注文を出し、みごと香山滋のサイン本をゲットしてしまったのである。

る。

そりゃあ、嬉しい。すごく嬉しい。長年の夢がついになんてしまったのだ。が、手元には5万円の請求書も来ている。100円で買える本5冊分の金額だけれど、でも、5万円は5万円だ。「いざとなりや『王女グリンダ』をやフーオークションで売ればいいじゃん。楽勝じゃん」などと思っていたが、『王女グリンダ』は嫁さんの本であった。勝手に処分するということは、離縁を覚悟しなければならぬということである。小野不由美の本も、佐々木丸美の本も、みんな人に譲ってしまった。うーむ……。

貯金通帳から、なけなしの5万円が姿を消した。そして、『王女グリンダ』は中央公論新社から再刊されることになった。バブル崩壊の日は近い。「悔い改めよ」と、チクタクマンも言うことだろう。

初出…「本の雑誌」2000年11月号／本の雑誌社

恥ずかしいあとがきベスト1に悶絶だ！

男性が女性になりすまして小説を発表するということは、よくあるとは言わないにしても、けっして少ないことではないだろう。では、すでに他の作品で名をなした男性作家が、別名義を使って女性になりすますという例はどうか？ これも天藤真、大谷羊太郎、草野唯雄がよってたかって作り上げた鷹見緋沙子のように、けっしてないわけではない。だがしかし、そのまま女性になりきって「あとがき」を書いてしまうということは？ しかも、キャピキャピの若い女の子の文体で書いてしまうという例はどうか？

これが、実はある。双葉社のいちご文庫というところから出ている『アリスが丘（パジャマの国のキリコの巻）』という小説がそれだ。著者の名前は浅丘ちあき。巻末の著者紹介によると「小説は本作がデビュー作」ということだが、実はこれが大嘘。浅丘めぐみのファンとしても知られる某男性SF作家が、この作品のために作り出したペンネームなのである。

あの人、このワンフレーズごとに改行する（いかにも女の子の子した小説）を書いたのかと思うと、それだけでも悶絶ものなのだが、「あとがき」の恥ずかしさたるや本文の比ではない。

「やったーっ！

とうとう

あたし——

書き上げちゃいました。」

って、ちよつと引用するだけで4行も使ってしまう、このハートマークの飛び交うかのような文体！

「おもわず——

あたし、あえいじゃってます。」

って、あなたは宇能鴻一郎ですか？

いやあ、これは恥ずかしい。恥ずかしいあとがきコンテストがあれば、優勝間違いなし。これに比べれば、某男性翻訳家が（森のぞみ）という正体バレバレの別名義で女性になりすました『星の海のミッキー』の訳者あとがきなんて、実にかわいいもんだ。

ちなみに、本書はとつくのとうに絶版。この（世にも恥ずかしいあとがき）を読むためには、古本屋をせっせとまわっていたくないのである。

初出…「本の雑誌」2002年6月号／本の雑誌社

古本極道大西範彦氏の書棚拝見

ドアの向こうには、本のラビリンスが広がっていた。ひたすら、本だけがあつた。膨大な量の本を前に、僕は力なく笑うしかなかった。

「古本極道大西範彦さんの本棚を見に行きませんか」

某月某日、奈良さんからそう声をかけられる。

大西さんとは過去に2度ほど同席したことがあるし、本を買ってもらったこともある。だけど、個人的にどういう方なのかはよく知らなかった。しかし、古本極道などと呼ばれているからには、よっぽど本を持っているのだろう。人の本棚を見るのは楽しい。特に古本を集めている人の本棚は楽しい。いままで、内藤陳さんの本棚、彩古さんの本棚、Kashidaさんの本棚、喜国雅彦さんの本棚、森英俊さんの本棚、黒白さんの本棚、貫井徳郎さんの本棚など、その道の達人の本棚はいろいろと見て来ているけれど、それぞれに個性があり、本棚を前にしているだけでいっただってこの上もなく楽しかった。大西さんの本棚だって、きっと楽しさに溢れているに違いあるまい。

「よろこんで！」

僕は奈良さんに答えていた。出不精であり、なおかつ人見知りする僕ではあるのだけれど、本棚を見るためだったらどこへでも出かけていっちゃいます。

そして、奈良さん、須川さんと一緒に三軒茶屋にある大西さんのマンションにお邪魔したのだけれど、いやもう、その凄いこと凄いこと。どう凄いのかは僕の表現能力を遙かに超えてしまっているのだけれど、でも、その片鱗なりともお伝えするように努力してみよう。

まず、玄関のドアを開けて中を覗き込む。この段階でもう笑ってしまう。いやもう、笑うしかないんです。本しか見えない！ 玄関を入って、もう左右の壁は本で埋まっているのだ。右側は野球関係の本。左側は新橋遊吉。そう、新橋遊吉がズラリと並んでいたのだ。玄関を入るなり新橋遊吉！ そんな家、他にありません？

玄関をあがったところから、すでに足元の本の山を蹴り崩しそうになってしまう。本棚に入りきらなかった本が、床に積まれているのだ。しかも、買ったまま開封していない雑誌の入ったダンボール箱が置いてあったりして、通路のための空間はひたすら侵食されてしまっている。

「ここが寝室です」

入ってすぐ右側の部屋を見せてくれる。

寝室？ 本しか見えないんですけど。いや、本の山の向こう側に

僅かに見えているのはベッドだろうか。もしかすると、ベッドかもしれない。しかし、たとえベッドだとしても、そのベッド以外には本しかないではないか。寝室なのか？　これが寝室なのか？　これを寝室と呼んでしまっているのか？

「ここが書庫です」

寝室の先の右側の部屋が書庫であると、大西さんは主張する。だけれど、大西さんが寝室と主張するさっきの部屋だって、書庫以外のなものでもないと思えてならないのだが。というか、この通路だって書庫以外のものでもないではないか。なにしろ、通路の壁はすべて書棚で埋め尽くされ、床にはかろうじて人ひとりが通れる獣道が残されているだけなのだ。

大西さんが書庫と主張する部屋を覗こうとした僕は、その書庫の入り口の外側に凄いものを見つけてしまった。

書庫の入り口の両脇に書棚が置いてあるのだが、その左側の棚の天板にボルトどめされた板が右側の棚にむけて伸びていて、その上に本がごっそりと乗せられているのだけれど……板の反対側が右側の棚に届いていない！　つまり、左側の書棚の天板にボルトどめされただけで、反対側はなにものにも支えられていない板が宙に突き出しているのだ。そして、その上に本が乗せられているのである。もちろん、その板は本の重さで下に向かって大きくしなっている。なぜ、その上の本が雪崩を起こして下に落ちないのか不思議でならないのだが、どうやら絶妙のバランスを保って、下方にしまった板

の上にしがみついているものらしい。う、うーむ……。いや、これは見なかったことにしよう。

大西さんが書庫と主張する部屋を見る。書庫だった。まごうことなき書庫だった。かろうじて人が通れるスペースを残して本棚が並び、ひたすら本だけが存在する書庫であった。

入ってすぐ左の棚には文庫がズラリと並んでいる。国枝史郎伝奇文庫が並び、少年倶楽部文庫が並び、講談名作文庫が並び、山田風太郎が並び、鮎川哲也が並び、鮎川哲也が並び、鮎川哲也が並び、鮎川哲也が……あれ？　鮎川哲也の同じ本が4冊ずつある！

「ブックオフでも買う物がないのもしかたなくて、ダブリ承知で買ってしまっただけですよ」

「帯欲しさに買ってしまっただけですよ」

「あと1冊で2セット目が揃うとなると、我慢できないじゃないですか」

「そ、そうですね。」

「でも、鮎川哲也はこの奥の方にワンセット揃ってるんです。そっちがベストメンバーですね」

「なんと、これ全部がダブリですかあ！」

棚の上の方には、国枝史郎伝奇文庫のダブリ、少年倶楽部文庫のダブリ、講談名作文庫のダブリなどもごっそりと並んでいる。うーむ、さすがは古本極道！

さらに創元推理文庫のカバーなし、帯付き、パラフィン付きとい

うレアなところがズラリと並んでいたりするのだけれど、これまたよくよく見れば2冊ずつ、3冊ずつ並んでいたりするので。

春陽文庫のおいしいところもごつそりとある。なんで、小糸のぶなんかまであったりするんだ？

ああ、『私だけが知っている 第一集』が4冊並んでるよ。

「これは第二集がなかなかないんですよ」

はい、僕もKashibaさんから譲ってもらってようやく2冊揃いましたから。でも、第一集を4冊並べることはないと思います。

うひゃあ、文庫の目録がズラリと…棚5段分もあるよ。

そして、書庫の一番奥の壁際に、またしてもおそろしいものを僕は見てしまった。右側の本棚と左側の本棚の間に板を渡して、その上に本を積み上げてあるのだ。今度はちゃんと左右の書棚に届く板ではあるのだけれど、問題はその板が長すぎるということだ。長すぎる板の上に本を積み上げると、その板は真ん中からどんどん下に向かってなくなっていく。かまわず本を乗せる。さらに板は曲がる。でも、かまわずにもっと本を乗せる。板はどんどんしなくなっていく。あ、あのお、そろそろその板、バキツと折れそうなくらいに曲がってるんですけど。かなり危険なんですけど。い、いや、見なかったことにしよう。

書庫に入ってすぐ右側の書棚には、国産の探偵小説、大衆小説が並ぶ。龍膽寺雄、楠田匡介、木々高太郎、栗田信などがズラリと並ぶ（ただ単に記憶に残っていた作家の名前がこの4人だけだっ

ただけなんで、もちろん他にもレアな作家の作品が山のように並んでいる）。

そして、その棚の向こうにはドアが。えっ、ドア？ そのドアの向こうって、寝室（と大西さんが主張する部屋）のはずだけれど、寝室（と大西さんが主張する部屋）のその部分にはドアなんかなかったはず。

「もともとは通路にしていたドアなんですよ。だけど、ドアを開け閉めするスペースを考えたら、書棚が置けないじゃないですか。それがもつたいたないので、はずしてきてその壁に立てかけておいたんです」

なるほど。そういうことでしたか。

「だけど、そのドアの後ろには押し入れのドアがあるはずなんですよ。でも、もうそのドアは動かしようがないんで、押し入れのスペースがまったく無駄になってしまっ。きつと、一生使わないままの押し入れなんですよ」

ドアの背後にドアが隠されているということだが、まったく見えない。というか、近寄れない。

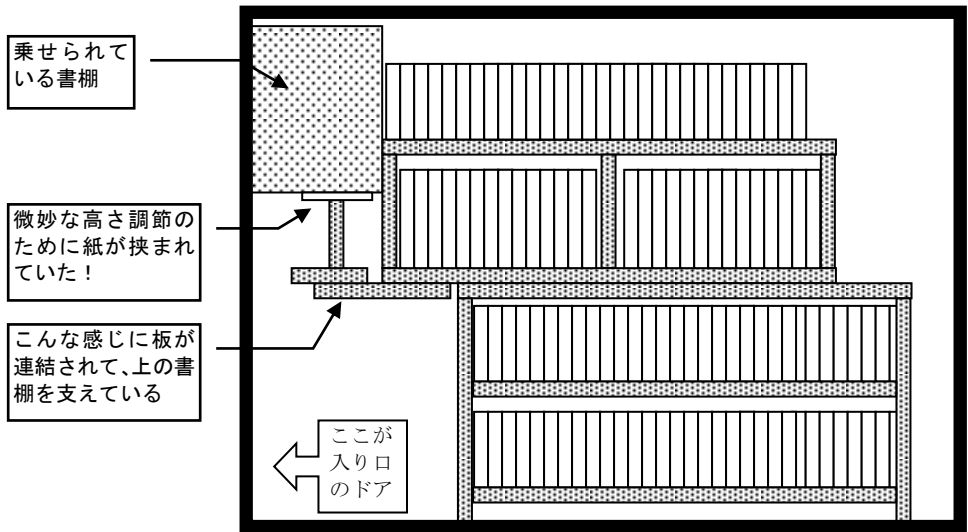
「うーん、「どこでもドア」ならぬ「どこだよ？ドア」です」

思わずくだらないギャグを発してしまっ。

移動しようとして、足元に積んであった本を崩してしまっ。いや、玄関に入った時からもう何度も足元の本を崩しているのだが。

「かまいません。そのままにしておいてください」

これ以上被害を広げないために書庫から出ようとして、またして



大西さんはそう言う
てくれるが、そう
もいかないでしょう
かがみ込んで崩した
本を積み直そうとす
るが、その瞬間に今
度は背後の本の山に
腰がぶつかって、そ
ちの本を崩してしま
う。あわててそっ
ちの本を押さえよう
とふりかえると、今
度はふりまわした腕
が別の本の山を崩し
てしまう。あせれば
あせるほど被害が広
がっていく。なるほ
ど、こうなることが
分かかっていて「その
ままに」と言ってく
れたのか。

もんでもないものを見つけてしまう。文章で説明するのはかなり
難しいのだけれど、なんとか頑張ってみよう。

入り口脇の書棚の上に、横向きに置いた書棚があって、それが下
の書棚の幅よりも横にはみ出している。そのはみ出した部分の下面
の板の下側に一枚の板がボルトで固定されている。その板は、さら
に横方向に突き出していて、その板の上に他の板が乗せられている。
そしてその板の上にはさらに別の板が立てられていて、その板が入
り口の上部に渡された書棚の片方を支えている。 ああ、やっぱ
り文章で説明するのは不可能だ！ 図を作ってみたので、その図を
参照してください。

とにかく、入り口ドアの上部に書棚が乗せられていて、その片方
は書棚が、そしてもう片方は板を何枚も使って連結した建造物が支
えているということなのです。ありえませんが、どう考えてもありえ
ない構造です。こんなものが、本の入った棚を支えられるわけがあ
りません。理論上、絶対に不可能です。見なかった。僕は見なかつ
た。こんなものを、僕は見ていません。絶対に見ていません。

大西さんの愛用する小島工芸の書棚は、側面の板に書棚同士を連
結するための穴が空いているので、その穴を利用してこういう無茶
な連結を試みているようなのだけれど、僕はいつさい見ていません
から。

それにしても、とんでもない量のコレクションである。いったい、どれだけの年月を注ぎ込めば、これほどのコレクションが揃うのか。「そうですね。10年はたつてないでしょう。7〜8年ぐらいですかね。ミステリーを集め始めたのは、ここ7〜8年ですよ」

大西さんは僕の質問にさりげなくそう答える。げげっ。僕なんて、中学生の頃から古本屋に入り浸っていて、いまだにここにある本の一割ぐらいのコレクションしか持ってないぞ。

「いったい、どれくらい買ってるんだ？」

「うーん、年間2千冊ぐらいですかね。月百冊どまりということとは絶対にないですから。買う時はセットで一氣に買いますし。コンスタントに月百冊で、あとはスポットでドンと」

いやあ、一氣にドンと買うという意味では、Kashibaさんということんでもない人がいたから驚かないけど。

「落穂舎とか芳林から目録が来ると、多少高くても欲しい本には注文を入れてしまいますね。注文を入れたあとで、当たって欲しいようなはずれて欲しいような…」

具体的な金額を聞いてみると、三冊二百円をメインに買っている僕からすると驚異的な金額である。でもまあ、Kashibaさんとか、彩古さんとか、高額本をバンバン買っちゃう人たちを見てきているので、驚かないといえれば驚かない金額ではあるのだけれど。

「買って後悔するよりも、買わずに後悔する方が辛いですから」それは確かに言える。「うひゃあ、またダブっちゃったよ」とは

笑って言えるが、「チクシヨ、もしかしたら持つてるかもしれないと思っただけれど、持ってなかったじゃないかあ！チクシヨ！なんで買わなかったんだよお！俺のバカヤロー！海なんか大っ嫌いだよ！」と叫ばずにいられなかった時の悔しさは他に例えようもない。それに、この家だったら、まだまだ本を置く場所ぐらいはなんとかなりそうだし。

ところで、いままで買った本でいちばん高かった本で？

「やっぱり『貼雑年譜』ですよ。あれはまったくの別格。古本で高かったのは、こないだヤフーで落札した楠田の『都会の怪物』が7万でした。すごく状態がいいんですよ」

本当だ、すごいや。むちゃくちゃ状態がいいじゃありませんか。カバーなんて、まるでカラーコピーで作ったばかりみたいにきれいじゃないですか。へえ、こんないい状態の本が出てくることもあるんだ。

それにしても、どうして大西さんは古本にこんなにもめり込んだのだろう？僕なんかだと、もともと古本が好きだったことは好きだったけれど、本格的にのめりこんだのは「怪の会」という探偵小説愛好会の他のメンバーの影響が強い。たいていは、なんらかのミステリーサークルに入って、そのメンバー間で古本のやりとりなんかをしているうちに古本病にかかってしまうものなのだけれど。

「いわゆるミステリーサークルには入っていったことはないし、まわりに影響を与えるような人もいなかったですね。性格的にテーマを

決めて集めるのが好きで、直木賞作品を集め始めたのがテーマ別収集の最初ですね」

つまりは、接触感染ではなく、突如として発病してしまったというわけで、これはかなり珍しいパターンなのではないだろうか。生まれつき病原菌を保有していたということなのか。

僕が大西さんと書庫の前にいると、奥の部屋まで行っていた奈良さんと須川さんがやたらと興奮した声をあげている。

「おおっ、すごいよ、ものすごく片づいているよ」

「すごいね、これは。完璧だよ」

思わず一番奥の部屋を覗きに行く。

うっ、まったく足の踏み場もない部屋なんですけど。本とダンボール箱とで、完璧に埋め尽くされているんですけど。いまなら空

「なにいつてんだよ。以前はもつと凄かったんだから。いまなら空気が吸えるじゃないですか」

以前の状態を知っている奈良さんと須川さんが大興奮している。そ、そうなんですか？　これが「完璧」に片づいた状態なんですか。

僕には泥棒が入って荒らしていった後にしか見えないんですけど。「そういえば、前に住んでいた家に泥棒が入ったことがありますね。ここよりもずっと狭かったから、部屋の中の密度はもつともっと濃い状態の時です。帰宅して、あれ、なんかおかしいなとは思ってたんですけど、すぐには泥棒が入ったと分からなかったんですよ。

でも、プラスチックの容器の上下が逆さまになっていたりするんで、これは泥棒が入ったなとようやく分かって。分かるまで20分ぐらいかかりましたかね。そこで警察に通報しておまわりさんに来てもらったんですけど、駆けつけたおまわりさんが、これはまた絶対に荒らされましたね、と。いえ、もたらこんな状態なんですけど」

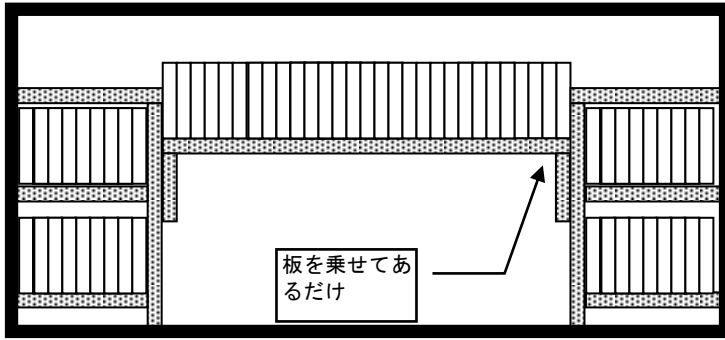
しかし、本しかない部屋に泥棒に入っても、古本の知識のある人間でないと何も盗むものがないような。

「ええ、貴金属も現金もありませんから、被害は何もなかったんですけど」

その前の家からここに引っ越すのも、さぞかし大変だったことだろう。僕の場合は、本を運ぶためだけに4トントラックを借りてきて、それを山前譲さんに運転してもらって引っ越したのだけれど、大西さんの場合はとてもそんなことで済む量じゃあない。

「そうですね。業者にお任せしたんですけど、大きめのダンボール箱で250〜260箱ぐらいですか。箱詰めのおぼちゃんが8人来ましたけど、やつてもやつても終わらないんで、しまいには怒ってましたね。そして、荷物を運ぶのにいちちゃんが6人。引っ越し費用だけで53万円かかりました。でも、さすがはプロですね。最終的にはちゃんと引っ越しできましたから」

しかし、本当にこれが完璧に片づいた状態なのか？　3年前に引っ越して以来、一度も開けていないとおぼしきダンボール箱もある



みたいだけれど……、ちよ、ちよっと待ったあ！ もしかして、その本とダンボール箱の下に埋もれているものはソファじゃないですか？ ソファだよ。人間が座るためのソファだよ。

「前の家では使えたんですけどね」

今では完全に荷物に埋もれてしまっていて、ソファとしての機能は果たしていない。そのソファをどけて、本を綺麗に積み上げた方がよほど効率がいいと思うのだけれど。

「だけどさあ、通路が完全にふさがっているから、絶対にこのソファを家の外に出すことはできないよ」

奈良さんがなぜか嬉しそうに断言する。まあ、奈良さんでなくても、そう思う。

「ここで思わず心配になってしまったのだけれど、冷蔵庫とかテレビが壊れたらいったいどうするのだろう？ 壊れたものを外に出すこともできないし、新しいものを家の中に入れることもできないではないか。うーむ…。」

そして、この部屋の入り口でも僕

はまたしてもおそろしいものを見つけてしまう。

入り口の両側に書棚が置いてあって、その左右の書棚の間に板を渡して入り口の上部にも本が並べられるようにしてあるのだけれど、その板を支えている部分が実に微妙なのだ。左右の書棚の側面に板を一枚ずつボルトでとめてあって、その板の厚みの部分に横板が乗せているのである。つまり、左右の書棚に間に渡した横板を支えている部分は、板の厚みの分だけなのである。やっぱり文章だけだと分かりにくいかもしれないので、図を作っておいたので参照して欲しい。

しかも、その横板は、ただ乗せてあるだけで、ネジやボンドといった固定するためのものは何も使われていないのだという。ということは、ちよっとよろめいて手でもつこうものなら、簡単に頭上の板が大量の本とともに落下してくるということなのだ。うっかり寄りかかることも危険である。

「まあ、本に埋もれて死ぬなら本望ですね」

そうか？ 本当にそうか？ 本当にそうなのか？ 僕は嫌だぞ。いくら本好きでも、本に埋もれて死んだりして、新聞沙汰になつたりするのは絶対に嫌だぞ。

「けれど、本に埋もれて死んでも、誰も発見してくれませんか、僕の場合は。そのままミイラ化しますね」

ああ、やっぱり嫌だあ！

通路を隔てた反対側がキッチンとリビングダイニング。リビングダイニングの床は、これまた見事に本とダンボールに埋もれている。どうせリビングダイニングとして使うつもりがないのなら、本棚をたくさん並べて、整理すればいいと思うのだが。

「たまたま部屋を整理しようと着手するんですけどね、気がつくと床に座り込んで本を開いているんで、まったく整理できませんね。石井さんが来たときに、私が本棚に並べますよと言ってたけど、できるのかなあ」

無理です！

そのリビングダイニングの実に中途半端な位置に、細長く背の高い書棚がポツンと置いてあった。

「部屋の一番奥のあのスミに入れるつもりで買ってきたんですけど、あそこまで通路を作ろうと思っっているうちにこの棚の中にも本が入ってしまっただけ。ほんの数メートルなんですけど、その数メートルが遠いんですね」

リビングダイニングの奥の壁に並ぶ書棚には、時刻表など鉄道関係の本が並ぶ。また、「旅」などという雑誌も並ぶ。野球、鉄道、ミステリがコレクションの3大柱なのだ。

そして、キッチン。ここのテーブルにパソコンが置いてある。その横にあるのは、コピー、ファクシミリ機能を兼ね備えたスキャナーだ。

「そのスキャナーは昨年の暮れに買ったんですけど、けっきょく、

1ヶ月半ぐらい通路に置いたままで、通路に置いてしまうとその上に本が積み上げられてしまうというのはこの家の法則なんで、どんなに埋もれていって、かなり危なかったですね」

もちろん、ここのテーブルの下も本だらけだ。

そして、テーブルの上の天井に取り付けられた戸棚を開くと、中に入っているのは主婦の友社のTOMOコミックス。ミステリを原作にしたコミックスのシリーズだ。僕は望月三起也の本を1冊だけ持っている。だけど、普通はそこには食器とか調味料が入っているもんなんですけど。

かくして、3LDKの本の迷宮の探検は終わった。とにかく凄かった。本の量もさることながら、質も凄かった。レアな本が山ほどあった。これほどの本が7、8年ほどで集まってしまうものなのか。しかも、それらの本のほとんどが「背中を見られる状態で本棚に並んでいる」のである。床に積まれている本も数限りなくあるのだけれど、本棚に並べべき本の大半はちゃんと本棚に並んでいるのだ。

そして、スペースはまだまだたっぷりある。リビングダイニングに本棚を並べ、床に積み上げてある本をちゃんと整理したならば、まだまだ本を収納することができるのだ。いざとなれば、ダブル本を処分すればいい。そうすれば蔵書は半分以下に減り、いくらでも本を置くスペースができるのではないか。

問題は、そういう作業をする余裕すら与えないスピードで本が増殖を続けているということだろう。まだまだ余裕があるようであり、ふと油断すればあつと言う間に残りのスペースも本で埋まってしまうに違いない。

2時間ほど書棚を見せていただいて、ひたすら圧倒されて家を後にしたのだけれど、ふと気がつけばその2時間、ついに一度たりともどこかに腰をおろすということがなかった。腰をおろすことのできるスペースが、ただの1箇所もなかったのだ。まだまだ本を置くスペースはあるのだけれど、人間が腰をおろすためのスペースはない。あのお、けつきよく、あのドアの向こう側はすべてが書庫と呼ばれるべきなんじゃないでしょうか？

「西部活劇双書」を先に買ったのは誰だ！

その情報を見つけたのは、会社のパソコンでミステリー系のサイトを覗いてまわっている最中のことだった（会社がおおらかなのをいいことに、昼休みはたいいネットサーフィンを楽しんでいるのです）。古本好きのミステリーファンが集まる某ホームページの掲示板に、A書房という本郷にある古書店について次のような書き込みがあったのだ。

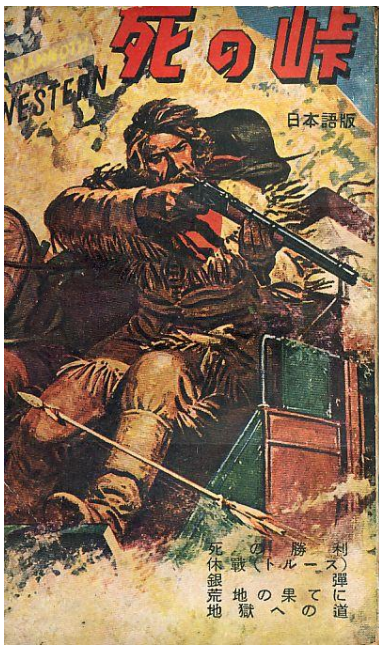
「ところで、ここ、コレクターズアイテムがざくざくありますよ。SFミステリーのカルト的名作、ヴェルコールの『人獣裁判』とか、エドガー・ウォーレスのリーダー氏の超レアな短編集『インチキ一座』とか、旅窓新書の『地下鉄サム』とか、『アメーzing・ストーリーズ』と同型のウエスタン物とか」

ああっ！ その文章を見つけた瞬間、僕は思わず叫んでいた。その『日本語版アメーzing・ストーリーズ』と同型のウエスタン小説こそ、僕が長年にわたって探し続けている本ではないか。何度か古書目録で見かけたことはあっても、そのたびに値段のあまりの高さに涙をのんであきらめてきた本だ。欲しい。欲しいぞお！ いったいいくらで並んでいたのだろう。僕は値段を問い合わせる書き込みをその掲示板にアップした。3千円までだったら迷うことなく買

う。3千5百円でも、たぶん買っちゃうだろう。4千円だったら……泣きながら買っちゃうのかもしれない。ああ、いくらで並んでいたのだろう。

そもそも西部小説に興味を持つようになったのは、ジャック・シエーファアの『シエーン』を読んだのがきっかけだった。映画で有名な作品だが、実は原作小説の方も映画に負けず劣らず素晴らしい作品なのである。西部を舞台に、流れ者と大地に根をおろした一家との交流がこまやかに描かれ、なおかつクライマックスのガンファイトまで一気に読まされてしまうという名作中の名作なのだ。

若き日にこの小説と出会ってしまった僕は、『シエーン』に続く感動を求めて西部小説探索に乗り出した。が、翻訳されている西部小説はほとんどなかった。そして、たまに見つけてもけっこういい古書価がつけられていることが多かった。しかも、いくら読んでも



西部活劇双書③『死の峠』

誠堂新光社 1951年12月15日発行



西部活劇双書⑥『恐怖の墓石』

誠文堂新光社 1951年12月15日発行

『シェーン』に匹敵する作品はまるでなし。ああ……（涙）

しかし、失望を繰り返しつつも、西部小説の探求はやめなかった。そして、いつしか手に入れた日本のトップに燦然と輝くようになったのが、『日本語版アメージング・ストーリーズ全7巻』の発行元である誠文堂が刊行した『西部活劇双書全6巻』であった。つまり、A書房にあったという本なのである。

翌日の昼、「3千円だったと思う」という回答を得た僕は、即座に机の引き出しから『全国古本屋地図』をとりだし、A書房の場所を確認した（な、なんでそんな本が会社の机の中に？）。そして、終業時間とともに会社を飛び出してA書房のある本郷に向かった。だが、ない。ないのだ。A書房のどこにも『西部活劇双書』がないのだ。店主に聞くと、「ああ、その本でしたら昨日売れましたよ」とあっさり言うではないか（キヤーツ！）。「そのお客さんは『人獣

裁判』もあると聞いてきたって言うんですけど、なんとその『人獣裁判』はその直前に売れてましてね。そんなことって滅多にないんですけどねえ」、続けてそう言いながら店主はしきりに首をひねっている。うーむ、おそろべしインターネット！

僕はがっくりと肩を落とす。悠長に値段の確認などせずに、即座に買いにこななければいけなかったのだ。ああ……。その夜、僕は泣きながら『シェーン』を読んだ。何度読んでも、やはり『シェーン』は素晴らしかった。

かくして、『西部活劇双書』はいまだ探求本のトップに居すわり続けている。いつの日か絶対に手に入れてやるとかたくかたく心に誓っているのであるが、それにしても……。僕の『西部活劇双書』を先に買ってっしたのは誰なんだあ！（号泣）

初出…「本の雑誌」2000年6月号

西部小説の世界

かつて、日本にはSFと西部小説を出す出版社は倒産するというジンクスがあったらしい。

具体的にどこの出版社がSFと西部小説を出して倒産したものやら。そもそも、そんなジンクスが生まれるほど、西部小説を出した出版社が日本にあったのか？

そう思って調べ出したのが運の尽き。いつのまにやら、西部小説の収集を始めてしまっているではないか。そんなつもりなどでなかったのだけれど、新刊で手に入る西部小説が皆無であるとなると、ついつい集めたくなくなってしまふのだ。「集められるものなら集めてみる」と言われているような気になって、「よおし、それほどう言うなら集めてやろうではないか！」と、ついつい挑戦を受けて立ってしまうのである(いや、誰も挑戦などしていいのだけれど)。

いずれも絶版ではあるのだけれど、比較的容易に手に入る西部小説はというと、ハヤカワNV文庫から出ていたジャック・シェーファアの『シェーン』であろう。これは古本屋の均一棚で見かけることもよくあるので、見かけたら即買いである。なぜなら、むちゃくちゃできのいい小説だからなのだ。映画の『シェーン』ものすごくよかったけれど、それと同じくらい原作のでもいいのだ。きつ

ちりと男と男の友情を描いた名作なのである。

この『シェーン』を最初に読んでしまったのが運の尽き(さっき「運の尽き」と書いたばかりなのに、またしても運が尽きてしまったのだ)。西部小説とはこれほどまでに面白いものであったのかと感激して、他の西部小説も手に入れようという意欲はどんどん高まってしまふ。

そしていま、わが家の本棚の一角には「西部小説コーナー」が出来上がってしまったのだが、非常にマイナーな世界なので、ほとんどの人はその存在すら知らないような本ばかり。そこで、今回はどういふ西部小説がかつて出されていたのか、その片鱗なりとも紹介してみることしよう。

一番新しい西部小説の叢書は、昭和59年に片岡義男監修で中央



『ホンドー』
ルイル・ラムーア著
中央公論社
ペーパーバック・ウェスタン

公論社から刊行された「ペーパーバック・ウエスタン」という叢書である。いかにもペーパーバックといった安っぽい紙を使用した叢書で、2ヶ月の間に、ゼーン・グレイの『ユタの流れ者』『最後の一人まで』『ルイス・ラムーアの『賭博師ファロン』『ホンドー』『争いの谷』という2人の作家の5冊を出しただけで、あっさりと終わってしまっている。刊行が始まった時には、「これで新しいウエスタンが読める」と喜んだものだが、結局、翻訳されたのは古めかしい作品ばかりで、目新しさはまるでなかった。噂によると、片岡義男がアメリカにいた頃に読んだ小説を選んだのだろうかということだが、真偽の程は不明である。もともともと多様な西部小説の世界を日本に紹介してくれるものと期待したのだけどもなあ。

で、この叢書を刊行した中央公論社は「西部小説を出す出版社は潰れる」というジンクス通りに倒産して、中央公論新社として再出発することになるのだ。

同じ頃、中公文庫からマックス・ブランドの『砂塵の町』、集英社文庫から『セント・アグネスの戦い』といった作品が単発的に翻訳されているのだけれど、こちらもほとんど話題になることはなかった。

少し時を遡ると、意外なところから西部小説が刊行されていたという事実に出くわす。なんと、児童書を発行している金の星社から1970年代の前半に「ウエスタン・ノベルズ全14巻」が刊行されているのだ。こちらは、日本の児童文学作家を起用して西部小説

を書かせた異色の叢書で、山中恒、塩谷太郎、小西茂木らの手によって『大酋長ジェロニモ』『まぼろしの騎兵隊』『保安官ワイアット・アープ』などが刊行されている。

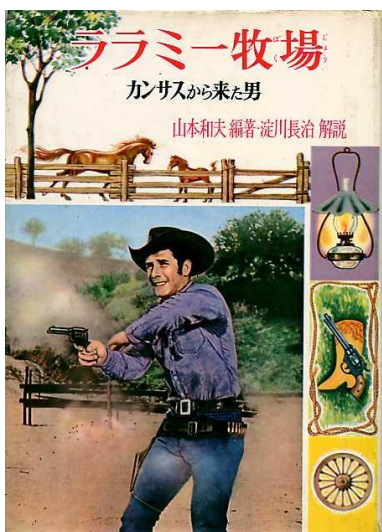
ところが驚いたことに、この「ウエスタン・ノベルズ」は金の星社が刊行した西部小説の叢書としては第二弾なのである。なんと、さらにさらに時を遡った1950年代の後半に「西部小説選集全10巻」を刊行しているのだ。これまた日本の児童文学作家を起用して書かせた叢書で、小西茂木『谷間の銃声』、塩谷太郎『西部の男』などが刊行されている。

この金の星社はいまでも児童文学の刊行を続けており、西部小説を出して潰れたという事実はまったくくない。

金の星社から「西部小説選集」が出された1950年代後半から1960年代前半というのは、アメリカのテレビドラマが数多く放



『まぼろしの騎兵隊』
山中恒著
金の星社
ウエスタン・ノベルズ全集



『ララミー牧場』
カンサスから来た男
山本和夫編著・淀川長治解説
ポプラ社

映された時代でもあった。そして、その中には西部劇も多く含まれていた。『ララミー牧場』『ライフルマン』『拳銃無宿』『ガンズモーク』『ローハイド』などなど。また、映画館でも数多くの西部劇が公開されていた。

となると、当然ながら西部劇関連の本も出てくるのだけれど、その中で小説はというと、ポプラ社から淀川長治の解説付きで刊行された「ララミー牧場全10巻」がある。こちらも金の星社と同様に、日本人の手による子ども向けのノベライゼーションであって、翻訳小説というわけではない。いまのところ、全10巻のうち6冊を手に入れただけなのだけれど、あとの4冊が揃うのはいいことになることや。

また、「ララミー牧場」はもうひとつ、浪速書房から中島河太郎監修で出されたノベライゼーション「ロバート・フラール全集」もある。

当初は全8巻を予定していたシリーズであるのだが、どうも3冊だけ出してポシャってしまったようで、どれだけ探そうとも3巻までしか見つからない。

こちらは、テレビドラマの写真が大量に収録されていて、全ページ数の3分の1ぐらいは写真集となっている。

当時は映画雑誌もよく西部劇を特集した増刊号を発行したりしていた。その中で最も異彩を放っているのが「映画物語／西部劇特集号」であろう。昭和36年5月に第一号を出して、そのまま月刊で西部劇特集号を一年以上にわたって出し続けている。しかも、映画やテレビドラマを取り上げるだけではなく、西部劇に関する文化全般をとりあげている。銃器の解説ページがあるかと思えば、当時の実在のガンマンに関する解説などもあり、実に充実した内容なのだ。そして、驚くなかれ、毎号のように翻訳小説が掲載されているのである。『駅馬車』の原作者であるアーネスト・ヘイコックスの短編小説とか、ゼーン・グレイの短編小説など、ここでしか読めない小説が掲載されているのだ。おかげで、苦労して集めることになってしまったのだけれど、問題は何号まで出た雑誌なのか分からないということなのだ。あと何冊集めれば完集ということになるのだろうか。

さて、さらに時代を遡っていくと、「新鋭社西部小説シリーズ」という叢書がある。エマーソン・ホッフの『幌馬車』、マックス・ブランドの『峡谷の銃声』、アーネスト・ヘイコックスの『大平原』、



『叛逆者の道』
 フランク・グルーバー著
 新鋭社 西部小説シリーズ

ゼーン・グレイの『辺境の狼』、フランク・グルーバーの『叛逆者の道』、オムニバス短篇集の『真昼の決闘 西部傑作短篇集II』という6冊を出したところまでは確認できている。おそらくは、この6冊で刊行が中断してしまったものと思われる。巻末の刊行予告では、他にも面白そうなタイトルが並んでいるのだけれど、どんなに探してもこれ以上の情報が出てこない。

この新鋭社という出版社はいまはないので、もしかするとこの6冊を出して潰れて、「西部小説をだすと潰れる」というジンクスのもととなったのかもしれない。

さらに遡ると、雄鶏社からルイス・ラムーアの『ホンドー』、早川書房からジャック・シェーファアの『悪人への貢物』、朋文社からコンラッド・リクターの『大草原』などの小説が単発として出ているのだけれど、コレクターとして絶対になんとかしたいのが19



『アリゾナの決闘』
 誠文堂新光社 西部活劇双書

50年に誠文堂新光社から発行された「西部活劇双書／マンモス・ウエスタン全6巻」であろう。

この誠文堂新光社というのは、SFの世界では「日本語版アメリカ・ストーリーリーズ」を刊行した出版社として知られているのだが、その「日本語版アメリカ・ストーリーリーズ」とほぼ同じ体裁で西部劇の短篇集を6冊出しているのだ。いまのところ、なんと5冊を入手して、残るは第5巻の『挑戦』という短篇集のみなのだけれど、実にてごわい叢書で、まるっきり見かけることがない。あと1冊で完集かと思うと、多少高くてもかまわないと思うのだけれど、古書目録等で見かけることすらない難物中の難物なのだ。

ちなみにこの誠文堂新光社、SFと西部小説の両方を出した出版社であるのだけれど、なんといまだに現役で出版を続けている。まったくもって、SFと西部小説をだすと潰れるなどというジンクス



『アパッチ山脈の決戦』
アーネスト・ヘイコックス著
スタア社

は、いったいどこから生まれてきたものなのやら。

この「西部活劇双書／マンモス・ウエスタン」よりも古い西部小説で手許にあるのは1冊だけ。昭和15年にスタア社というところから双葉十三郎訳で出たアーネスト・ヘイコックスの『アパッチ山脈の決戦』という作品で、表題作の他に「町の挿話」「駅停」の2本の短編小説を収録している。表紙の横書きのタイトルを右から左に読むという時代の本で、さすがにこのレベルの本になると、入手できたのがラッキーとしか言い様がない。

というわけで、単発で出た作品は他にもいろいろあるものの、コレクターとして手を出すべき西部小説を列記してみた。本気でこれらの本を集めようと思ったなら何十万円という金額が必要になるのだけれど、それでも集めたくなくなるのが絶版本というものなのだ。そうそう、そんなに出さなくても手に入る西部小説が1冊だけあ

ることを忘れていた。最後に、その1冊を紹介しておこう。

昭和41年に暮らしの手帖社から発行されたルイス・ラムーアの『おゝ フロンティア（西部開拓史物語）』という作品がそれ。なんとこの本、いまだに出版社在庫があるのである。お値段はというと、310円プラス消費税。なにせ、昭和41年の値段のままなのだ。お近くの書店で取り寄せをお願いすれば、簡単に買うことができる。

映画『西部開拓史』をルイス・ラムーアが小説化したもので、新大陸に渡ってきた一家が、さらに西部へ、フロンティアへと移住し、そこで起きるできごとを描いた大河小説。幌馬車隊での移動、インディアンの襲撃、列車強盗、一対一の決闘、バッファローのスタンビート、ゴールドラッシュ、テント小屋と踊り子、賭博師、保安官と無法者などなど、西部小説の要素のすべてが詰め込まれている。よろしければ、入手のうえ読まれてみてはいかがだろうか。

初出…日本冒険小説協会会報「イーグル」

山形古本奇譚 その1

- A 変わらず汚い本を読んでんねえ。
- B 汚いたって、君も好きな山田風太郎だよ。
- A だって『山又夜叉（うめがいやしや）』なんて小説、聞いたこともないよ。
- B まあね、実は僕も知らなかったんだ。ほら、こないだ出張で山形まで行ったろう。その時に駅前で古本市をやっていたね。そこで買ったんだけど、いくらしたと思う。
- A 珍しい本なのか。
- B さあてねえ。よく分からないけど、珍しいんじゃないの。
- A じゃあ、八百円。
- B 残念でした。なんと三十円。
- A おいおい、本当に珍しい本なのかよ。
- B それがね、珍しい本がのきなみメチャ安だったのさ。たとえば『SFマガジン』の創刊号があったのだけれど、これが驚くくらい、たったの千五百円。
- A ゲゲッ！！ ケタがひとつ足りないじゃないか。
- B まあ、その創刊号は表紙がちぎれかけていたりして保存状態がよくなかったんだけどね。でも、2号以降は極美状態のものが一律千円だよ。

- A ……その古本屋、よほどモノの価値を知らなかったんだ。
- B いやいや、そういうわけじゃないんだよ。その古本屋のご主人、五十前後の見るからに古本屋という感じの小柄な人でね。いろいろ話をしてみたら、本のこととはちゃんとわかってるんだ。
- A じゃあ、なんでそんな値段を付けてんだよ。
- B まあ、そのことも説明するけどさ。それよりも、そのご主人から古書業界の奇妙奇天烈なエピソードを聞かされてね。いやその面白いこと面白いこと。眉に唾をたっぷりとつけないことには聞いてられないような変な話しばかりなんだけど、ご主人、大真面目な顔で話すんだ。古書業界には奇人変人のたぐいが山ほどいるっていうから、もしかして本当なのかいなという気がしないでもないんだけど……聞きたい？
- A そりゃ、あんた、聞きたいに決まっているだろ。それともなにか、ここまで話しをひいといて話さないともいうのかよ。
- B まあまあ、抑えて抑えて。ちゃんと話してあげるから。僕が『SFマガジン』の創刊号に興奮して棚をひっかきまわしていたら、少しはモノの価値の分かる客が来たとでも思ったんだらうね、向こうから声をかけてきたんだ。
- 「そういう本に興味があるんですか。安いでしょ。ええ、とてもこんな値段で店頭に出るような本じゃないですね。そうですね、今日、東京から。いえね、私も前は東京の成城に店を出していたん

ですけど、ちょっと事情があつてこっちの方に移ってきましてね。だけどねえ、こっちの方じゃこういう本は全然売れないんですよ。だからこういう値段をつけているんですけど、それでも売れないんですよからね。もともと専門はこっちの方に並べているような超常現象関係の本なんですけどね、こういう本も全然ですよ。この『SFマガジン』にしたつて、東京じゃこんな値段で売つてるとこんなか絶対にないですよ。神田のX X書店なんか、創刊号からの揃いを三百万で仕入れて、五百万で店頭に並べてますよ。五百万じゃ売れないでよつて聞いたら、売れなくてもかまわない、店の顔になればいいんだつて。それにしてもねえ、五百万ですよ。驚いちゃいますよねえ…。

だけどね、この業界じゃ五百万ぐらいはザラですからねえ。中には二千万、三千万という本だつてありますから。でもねえ、エドガー・アラン・ポーの本が売れた時にはさすがにびっくりしましたよ。エドガー・アラン・ポーつてご存知でしょ。そのポーの本で、人間の皮で装丁されているという伝説の本があるんですよ。『黄金虫』という小説の初版なんですけどね。いやあ、さすがに肉食人種ですね、人間の皮をなめして製本に使つてしまうという技術がちゃんあるんですよ。その本をね、(おもむろに右手の人差し指を一本たてながら) 神田の△△堂書店がこれを買つてきたんですよ。

これつて、いくらのことだと思ひます。一億円? いえいえ、一兆円ですよ、一兆円。イチの後ろにゼロが……エート、十二個かな、

とにかたくたくさん並ぶ一兆円ですよ。で、その本を百貨店の古書市に二兆円の値段をつけて出しましてね。いやあ、それが売れちゃったんだから驚いた。会場の一角が突然どよめいたんでなんだと思つたら、二兆円の本が売れたつていうんですよ。その時はもう、百貨店の方でも特別室を用意するわ、テレビ局が取材に来るわで大騒ぎになりましたけどね。いやあ、驚いた。外国のコレクターが日本の古書店に買われたつてんですぐに追いかけてきて買つていったらしいんですよ。二兆円ですからね……」

A おいおい、話作つてんじゃないの。人間の皮で装丁した本なんか本当にあるのかよ。それに、一冊の本に二兆円なんて払う奴がいるか。二兆円て言つたら、エート…、よく分かんないけど、とつてもなく凄い金額だぞ。

B だから眉に唾をたつぷりつけなければ聞けない話だつて言つたらう。だけどね、ここまではまだおとなしい話なんだ。このあとね、「古本早取り養成ギブス」を開発したある古書店主の顛末、というんでもない話になつてしまふんだけど、うーむ、悪いけど約束の時間なんだ。続きはまた今度ということ……。

A おい、待てよ。「古本早取り養成ギブス」つて、いったい何なんだよ。おい……

山形古本奇譚 その2

A さあて、今日こそはこないだの続きを聞かせてもらおうか。

B 続きって？

A なあ、頼むからとぼけないでくれよ。山形の古本屋で聞いたって話をしてくれただろ。

B ああ、あの話しね。

A ああじゃないよ、まったく。それで「古本速取り養成ギブス」

の話しをしかけたところで、約束があるからまたとか言って逃げちゃったんじゃないか。おい、「古本速取り養成ギブス」って、いったい何なんだよ。気になって夜も眠れないじゃないか。

B うん、僕もね、花形満が何歳で車の運転免許をとったのかを考えると、気になって気になって夜も眠れない…

A そういう話しじゃないだろ!! 怒るよ。

B 落ち着いて、落ち着いて。うん、山形の古本屋で聞いてきた話しね。人間の皮で装丁されたという伝説の本が二兆円で売れたっていうところまで話したんだっけ。だけどね、本当にあった話しかどうかは僕は知らないよ。とにかく、眉唾な話しばかりなんだから。

A 眉唾でいい！とにかく話しなさいって。

B うん、そうだね。こないだも話した通り、山形の古本市で古本

屋のご主人からいろいろと古本業界の話しを聞かされたんだけど、変な話しばかりだね。あまりに面白いものだからおとなしく耳を傾けていたら、あとからあとから奇妙奇天烈な話しが出てくるんだ。で、古本業界にもいろいろ変な人たちがいるという話しになってね。とにかく、自分が欲しい本、つまり自分の店に並べたい本を手に入れるためだったら、手段を選ばないというか、あっさりとか常識のらち外に踏み出してしまおうというんだ。この話しが壮絶でねえ。

「例えばね、□□書店のご主人。この人は毎日、ビルの階段を駆け上がる訓練をしているんですけどね、どうしてだと思えます。ほら、百貨店なんかで古本市が開催されるでしょう。あどときにね、開店と同時に店内に駆け込んでエスカレーターを誰よりも早く会場まで駆け上るためなんですよ。とにかく誰よりも早く会場まで辿り着いて誰よりも早く珍しい本を確保する、そのためにはエレベーターなんか待つてられないわけです。いやあ、私もね、△△百貨店の階段を駆け上る訓練をだいぶしましたけどね、6階のイベントフロアまで1分45秒はどうしてもかかってしまう。これじゃあダメなんです。

しかしね、会場まで真っ先に辿り着いたとしても、どこに何の本が並んでいるかが分からなければあとから来た人にめぼしい本を持ってかれてしまうでしょ。そこでどうするかというと、前の日か

ら商品搬入のスタッフとしてやってきて、自分の欲しい本がどのあたりにあるかチェックしてしまう。いやもう、とにかくみんな必死ですからね。どんな手段だつてとりますよ。

そうそう。私もね、ある古書市でひどい目に会ったことがあるんですよ。珍しい本を見つけて、それを手に持ったまま会場をまわっていたんですけど、突然うしろからガツーンと頭を殴られましたね。思わず頭をかかえてひっくりかえって、ふと気がつくと手にしていたはずの本がなくなっているんです。横どりされちゃったんですよ。で、足元を見ると、そこに平凡社の百科事典が転がっていません。それで後頭部を殴られたんですよ。それ以来、百科事典や凶鑑のようなゴツイ本を持った男が後ろに立つと気をつけるようになりましたけど、聞いてみるとね、同様の被害者は他にもだいたいいるっていうんですから……。まったく、どこのどいつが犯人かは知りませんが、ひどいことをするもんですよ。殴られた頭も痛かったですけれど、それよりも本を取られたのが悔しくてねえ。「ゴルゴ13」じゃありませんけど、古本市においては「オレの後ろに立つな」と言いたいですね。

それから、こんな話もあるんですよ。やっぱりある古書市の時、入り口の前で開店を待っていると某古書店の主人が屈強な店員をふたりひきつれてやってきましてね。なぜかひどく大きなカバンをさげているんです。なんだろうと思っていると、そろそろ開店かなという頃にそのカバンの中から黒いジャンパーを取り出しまして

ね。三人が揃って着込むと、なんとねえ、そのジャンパーにはクギがね、内側から外側に向けてギツシリと植え付けてあったんですよ。開店と同時に店内に走り込んでいって本棚の前に三人でガツリとスクラムを組んでしまう。まるでヤマアラシみたいなもんだから、危なくて誰も近寄れやしませんよ。そうしておいて本人たちはゆっくりと本を選び、その棚が終わるとスクラムを組んだまま次の棚に移るといふ具合で、まったくもう悠然たるものでしてね。でもまあ、これはやりすぎだということで他の店からもクレームがついて、この古書店主は業界を追放されてしまいましたけどね……」

A ……。

B だから、眉唾な話しだよって何度も言ってるだろ。

A いくら眉唾な話しだったって、そんなジャンパーをわざわざ作る奴なんか本当にいるのかよ。

B まあ、常識で考えたらいないだろうけど、古書業界には奇人変人のたぐいがたくさんいるっていうから。もしかしたらいるかもしれないなあっていう気もするじゃない。それにね、ほら、この話しをしてくれた山形の古書店のご主人ね、もともと東京に店を出していたんだけど事情があつて山形に移ってきたって言っていたんだ。と、いうことは……。

A もしかして……。

B うん、この山形のご主人こそが業界を追放されたというこのジ

山形古本奇譚 その3

ヤンパーの本人ではないかと。

A それじゃちよいと話しができすぎだよ。おっと、それよりも肝

心の「古本速取り養成ギブス」の話しはどうなってるんだよ。

B ああそうか。ええと、悪い、このあとすぐに行かないといけな

い場所があるんだ。その話しは今度するからさ。今日はここま

でということだ。

A おい、待てよ。そりやないだろ。おい。待てってば。おい……。

山形古本奇譚 その3

ヤンパーの本人ではないかと。

A それじゃちよいと話しができすぎだよ。おっと、それよりも肝

心の「古本速取り養成ギブス」の話しはどうなってるんだよ。

B ああそうか。ええと、悪い、このあとすぐに行かないといけな

い場所があるんだ。その話しは今度するからさ。今日はここま

でということだ。

A おい、待てよ。そりやないだろ。おい。待てってば。おい……。

か。

B 別に逃げ出したわけじゃないんだけどな。

A いいや、言い訳は聞かないぞ。人間の皮で装丁されたという本

が二兆円で売れたという話しや、釘をぎつしりと植え込んだジ

ヤンパーを着込んだ男が古本の棚の前に立ち塞がったという

話しはもう聞いた。今日こそは「古本速取り養成ギブス」の話

しだ。

B 他にも、長年探していた本を手に入れた瞬間に興奮でシヨック

死してしまった客の話とか、世界に二冊しかない本だという

のに手に入れるなりその場で燃やしてしまった客の話とか

も聞かされたんだけどな。

A いいや、そういう話しはいい。とにかく「古本速取り養成ギブ

ス」の話しだ。

B ランニングシャツに麦藁帽子、それに釣り人用のゴム長靴とい

ういでたちで古本市に現われる謎の老人の話しというのもある

んだけどな。

A ウ、ウーン。それも聞きたいけど、いい。パスだ。

B パスは三回までだからね。

A 七並べやっつるわけじゃないんだから早く話しなさいって。あんまりじらすとしまいに温厚なオレも怒っちゃうよ。

B まあまあ、抑えて抑えて。前に話したように、山形の古本市で古本屋のご主人から古本業界に関する奇妙奇天烈このうえもない話しを山ほど聞かされたわけだけれど、欲しい本をいかにして手に入れるかという話しになってね。なかなか大変なんだ、これが。今までは知らなかったんだけど、なかなか競争の激しい世界らしくてね。で、いかにして本棚の本を素早く取り出すかという話しになったんだけど…

「エスカレーターを誰よりも速く駆け上る特訓をしたり、釘をぎっしりと植え込んだ皮ジャンを着込んでみたりと、それぞれでいろいろと工夫を凝らしますが、なんといっても古書市で自分の欲しい本を手に入れる基本は、誰よりも速く自分の探している本を見つけだし、そして誰よりも速く棚からその本を抜き取る、とにかくこの2点ですね。

ですから私たち古本屋は、まず目を鍛えます。本の並んだ棚をさっと一瞥しただけで自分の欲しい本があるかないかの判断ができるかどうか、それが勝負の分かれ目になるわけです。一冊一冊のタイトルをじっくりと読んでいたのでは、それこそ日が暮れてしましますからね。私もそのための特訓はだいぶやりましたよ。自分の店

の中に本を一冊隠してもらいましてね、その本をいかに短時間のうちに見つけ出すかという特訓をやったものです。おかげで本棚一段だったらパツと見ただけでだいたい分かりますけど、それぐらいじやまだまだ未熟でしてね。達人になると本棚一本をチェックするのにほんの一瞬。チラリと見ただけで欲しい本があるかないかが分かってしまうといえますからね。

そして欲しい本があったならば本棚からその本を取り出すわけですが、これがまたスピードの勝負となるわけです。こうやって目的の本をめぐって手を伸ばして、本の背の上端に人さし指をひっかけ本を本棚から引き抜く。それを本を見つけた次の瞬間に一瞬のうちにおこなわなければなりません。コンマゼロイチ秒でも人より遅れをとれば、それだけでその本は手に入らないわけです。この特訓もだいたいやりましたよ。本棚の前に立って両足をほぼ肩の幅に開き、軽く腰を落とした構えからサツと手を突き出して人さし指いっぱい本を引き抜く。この特訓を指先の皮がボロボロになるまでやりました。つらいですよ、これは。

名人になりますと、この動作が実に美しい。流れるようなフォームで目にも止まらぬ速さで本を引き抜くわけです。時々、古書市会場ですういった名人どうしが出会うと、いやもう実にスリリングな勝負が展開されてね。ほら、昔「シエーン」という西部劇がありましたでしょう。あのアラン・ラッドとジャック・パランスの息詰るような早撃ちの勝負をご存知でしょう。あの緊張感をね、目の

前で味わうことができるのですよ。

ところで、ある古本屋の主人がこの特訓をするためのギプスを開発しましてね。名付けて古本速取り養成ギプス。エキスパンダーを改良して「巨人の星」の大リーグボール養成ギプスと同じものを作ってしまったのですよ。よくまあそんなものを手作りで作れたと思うでしょ。そしたらね、なんと彼は大人のおもちゃ屋に行ってSMグッズを買い込んできたらしいんですね。なんでも女性を拘束するための皮の腕輪とかジャケットのたぐいとかがいろいろあって、中にはロープを通すための金属性のリングのついたものもあるっていうんですよ。そうしたものを買ってきてリングのところにエキスパンダーのバネを取りつける、それだけで簡単に出来上がったっていうんですからね。まったくもって、あきれた話ですけど。

ところが、それを初めて身に着けて使った時に事故がおこりました。エキスパンダーのバネの間に腕の肉をバチバチに挟まれてしまったんです。これは痛いですよ、きつと。

でもね、奥さんにしてみればかなり不気味だったと思いますよ。なにしろ、だんなが突然SMグッズを買い込んできてニヤニヤしながら部屋に閉じこもったかと思うと、突如として絶叫が家中に響き渡ったわけですから。そのうえ、あわてて駆けつけると、上半身裸でSMの衣装を身に着けただんなが床の上を駆け回っていたというんですからね。だんなは苦痛にのたうちまわるわ、奥さんは貧血をおこして倒れるわで、なんでも大変な騒ぎになったらしいですよ。

腕を鍛え上げて古書市で大活躍してやろうとでも考えたのでしようけど、結果は見事なまでの大失敗。腕を伸ばしたところまではよかったんですけど、縮めるときに挟んじやったんでしょうね。いやあ、さぞかし痛かったでしょうね。

でも、その人は本当に懲りない人ですね。今度はギプスのバネを自転車チューブに付け替えたわけですよ。これはなかなか調子がよかったようですけどね…、実は意外な盲点がありました。ある日、そのギプスをつけたまま仕事をしていた時に店の電話がなりましてね。そのご主人、勢いよく受話器を取って耳に当てようとしたまではよかったんですけど、ついギプスをしていっていることを忘れてしまってますね。ゴムチューブにひっぱられる勢いそのままに受話器を顎に叩きつけて、モシモシのモを発音するゆとりすらなく悶絶して病院行き。なんとまあ、顎の骨が砕けていたそうです。まったくもって、古本屋も楽じゃないですよ」

A あんたねえ、いくらなんでもその話だけは信用しないよ。俺がいくらお人好しだからって、そこまでは人間ができてるわけじゃないからね。話し、作ってるだろ。正直に言ってみな。

B 困ったな。本当の話しかどうかは知らないけど、聞いてきたそのまます話しているだけなんだから。別に自分で話しを作っているわけじゃないんだけどね。

A いいや、あんたを信用してここまで耳を傾けた俺が間違っている

た。そもそもその山形の古本屋のおやじとあんたとは初対面なんだろ。初めて会ったあんたにどうしてそこまで話すんだよ。

B まあ、僕の人の徳のなせるわざかな。

A もういい。今後、あんたのそういう話しは一切聞かないからな。

B そうか。残念だな。いや、実はこないだ熱海であった文具市の会場でね、ヒノデワシというメーカーの、消しゴム作って30年というおじさんからタコ焼き消しゴム開発にからむ面白い話しを聞いたんだけど、そうか、聞きたくないんだ。

A …あつ、パス取り消し。次のカードあったよ。

B 七並べやつてるわけじゃないんだろ。僕はもう帰るから、じゃあね。

A えつ、おい、待てよ。待てつてば。おい…。

初出：「ワトソン JAPAN」 笠倉出版
1992年3月号・5月号・7月号

■山形古本奇譚について

かつて「ワトソン JAPAN」という雑誌があり、僕はその創刊号から3号にわたって「山形古本奇譚」という連載原稿を書かされていきました。

読んでおわかりのように、まったくバカげた内容の話なのですが、たまたま出張で山形に行った時に、駅前の百貨店でやっていた古本市会場で、古本屋の親父さんから聞かされた話なのです。

その話がなんとも奇妙奇天烈で、あまりにも面白かったのでさっそく知り合いの編集者に話したところ、面白いから原稿にしろと言われて無理やり書かされたものなものでした。はたして、古本屋で聞いた話など普通の人が読んで面白がるのだろうか、などと疑問に思いつつ書いたのですが、けっこう受けたようです。

ちなみに、この原稿に書いたことは、本当に僕が山形の古本屋の親父さんから聞いた話なのです。きつと、誰もが作つた話だと思ふことでしょうか、天地神明に誓って事実なのです。そりゃ、ほんのちよつとは脚色を入れました。それは、認めます。でも、本当に本当に、ここに書いた話は初対面の古本屋の親父さんから聞かされた話なのです。

読まないのには訳がある？

「絶対読まないと分かっている本を買う際の心の葛藤、その裏に隠されたドラマ、それを赤裸々に告白してほしい」、それが編集部からのオーダーであった。

が、それを聞いた瞬間、「心の葛藤？ 隠されたドラマ？ なんだそれ？ そんなもん、あるわけないじゃん」、即座にそう思ってしまった。なにせ、1ヶ月に読む本が10冊程度しかないというのに、その10倍の冊数を買ってしまったという私である。つまり、読まない本が年間に1千冊は溜まってしまおうということなのだ。本は読むためにあるのではなく、買うためにあると言った方が、はるかに実態に近い。そんな私に心の葛藤？ そんなもん、あるわけないじゃん。

なんでまた、読まないと分かっている本をかたはしから買ってしまいかというと、これはもう、自分の手元に揃えておきたいからと言うしかない。たとえば、早川書房の異色作家短編集。新装版ではなく函入りの旧版が、手元に17冊あるとする。全18巻の叢書なので、あと1冊でコンプリートになるという状況だ。さあ、この状況で残りの1冊を手に入れたと思うずにいられるだろうか？ つて、速攻で答えちゃうけど、いられるわけないじゃん。読みたいかどうか

かなんてことにはまるつきり関係なく、ただただコンプリートにしたいと思うに決まってるじゃありませんか。

ま、早川の異色作家短編集の場合はどうでも面白いから、読まないと分かっている本を買うと言うわけじゃあない。だけど、これが元々社最新科学小説全集だとしたらどうだろうか？ これまた全18冊の叢書なのだけれど、最後に残った1冊がレイ・ブラッドベリの『火星人記録』だとしたら？ 『火星年代記』のタイトルでとつくの昔に読んでいた作品なので、元々社版で読み返すことなど絶対にならないのだけれど、それでも欲しいと思ってしまうのだろうか？ つて、聞くまでもなく欲しいわけですよ。なんとしてでも揃えたいと思ってしまうわけですよ。

こうした叢書に限らず、ちよつとでも珍しげな本があると、それをかたはしから買いたくなってしまうという悪癖もあったりする。たとえば、幻想小説の龍膽寺雄が書いたサボテンの解説書、明朗小説の白川渥が書いた神戸のガイドブック、不思議小説の三橋一夫が書いた健康本、『デューブ・スロート』の主演女優の書いたセックズ指南書、そういった本を見つけると、読む気もないのにかたはしから買いたくなってしまうのだ。もちろん、そこに心の葛藤も隠されたドラマもあるわけがない。あるのは「だって欲しいんだもん」という中村うさぎの欲求だけなのだ。

その結果、蔵書は際限なく増えていってしまう。どうにもこうにも收拾がつかないほど増え、書棚からあふれ、床に積み上げられて

いく。そして、その挙げ句にどういうことになってしまいかという
と、なんと「心の葛藤」が生じてきてしまうのだ。つまり、「本を
置くスペースがもうないというのに、読みもしない本をこれ以上買
いこんでいいものだろうか？」と。

かくして、今日も私は古本屋の棚の前で立ちつくす。手に持って
いるのは、林麟の『條件反射學方法論』。木々高太郎名義の探偵小
説ならいざ知らず、この本だけは絶対に読まない。読みもしない本
をこれ以上買いこんだとして、いったいどこに置くつもりなのか。
でも、買ってしまおうですよ。ああ…。

初出…「本の雑誌」2002年11月号

実録・30冊155円の悲劇

ひたすら古本を買いまくっている。読みきれぬ量をはるかに上回る冊数の本を買っている。

「めったに見ることのない絶版本が1000円だったから」

「こんな本が出るなんて、知らなかったから」

とにかく理由をつけては古本を買ってしまう。ハナから読む気のない本も、すでに持っている本も、かたはしから買ってしまう。

要するに、本を買うという行為が好きなのだ。

その結果、部屋の中は本だらけとなり、積み上げた本が山をなし、これ以上の本を置くスペースは皆無となる。どうする？ もう、本を買うのをやめるか？ だが、本を買わずしてなんの人生ぞ。本買いこそが人生だ。城山三郎先生もおっしゃっている。「男子の本買い」と。

かくして、今度は買った本を古本屋に売りに行くことになる。次に買う本を置く場所を確保しなければならぬのだ。馳星周ならば「オレの本を古本屋に売るんだったら、ゴミ箱に捨ててくれ」と言うのだろうか、本を捨てることなどできるわけもない。

ところで、ごく普通の本を近所の古本屋に持ち込んだとして、だいたいいくらぐらいで買い取ってもらえるものか、皆さんはご存じ

だろうか？ 僕はたいていリサイクル系古書店に持ち込んでいるのだけれど、過去9回の記録は次の表の通りとなる。

店 舗	冊数	買取金額	1冊平均
ブックオフ 岩槻店	73冊	2,350円	32.2円
ブックオフ さいたま円正寺店	33冊	790円	23.9円
古本市場 川口伊刈店	15冊	610円	40.7円
古本市場 川口伊刈店	22冊	180円	8.2円
ブックオフ 岩槻店	25冊	250円	10.0円
古本市場 川口伊刈店	30冊	155円	5.2円
ほんだらけ 蒲生店	30冊	290円	9.7円
ほんだらけ 蒲生店	150冊	2,820円	18.8円
ほんだらけ 蒲生店	116冊	3,345円	28.8円
合 計	494冊	10,790円	21.8円

持ち込んでいる本にさほど違いがあるとも思えないのに、なぜか1冊40円で買い取ってくれた店が、次には8円、その次には5円にまで下がってしまった。マニュアル査定のリサイクル系古書店で、なんでこうまで買取金額に差が出てしまうのだろうか？

それにしても、30冊で155円というのは、なんともいえず屈辱的な気分である。「買い取り査定をお待ちのよしだ様、計算が終了しましたので買い取りカウンターまでお越しください」

店内放送で呼び出されてドキドキしながらカウンタ

ーまで行って、155円だ。ギッシリ本を詰め込んだ大きな紙袋と引き換えに、手のひらに100円玉1枚、50円玉1枚、5円玉1枚を乗せられた瞬間の屈辱感！ おれはこの155円が欲しくて大切な本を処分してしまったのか！ いや、お金が目的ではなくて、蔵書を減らすことが目的だった。金額はたいした問題ではなかったはず。でも、でも、看板に「高価買取」って書いてあるじゃん。

このように、ごく普通の本を古本屋で処分する場合、蔵書を減らすという目的以外のことを期待してはいけないのである。しかも、店によってはほんのちよっとでも古くなった本は買い取りを拒否されてしまい、蔵書を減らすという当初の目的すら達成できないこともあるのだ（特にブックオフは買い取り拒否が多いのだけれど、「こちらで処分しようかあ」って、にこやかに言うなあ！）。一度、タクシーで本を売りに来ている人を見たことがあるのだけれど、間違ってもタクシー代が出ることはなかっただろうなあ。

いずれにせよ、普通の本はこうやって近所の古本屋に持ち込めばよい。難しいのは、プレミア価格のつくような絶版本の処分方法だ。なにしろ、店によっては1千円、2千円といった値段で売られているような本であっても、近所のリサイクル系古書店に持ち込んだのでは「この本は買い取れません。よろしければこちらで処分しましょうかあ」って言われるのが関の山である（だから、にこやかに言うなっ）。
かつては、そういう本は冊数をまとめて専門古書店に買い取って

もらっていた。ミステリならミステリ専門の古書店、マンガならマンガ専門の古書店に持ち込んでいた。それならばそこそこの値段で買い取ってくれるからだ。

ところが、これも店によっては屈辱的な扱いを受けることにもなる。

ある時、サブカル系の本を処分するのに、神保町にある古書店に連絡をとったことがあった。

「買い取ってほしい本があるのですが、処分したい本をリストにしてあるので、あらかじめフアクシミリで送って見てもらった方がいいですか？」

電話に出た女性にそう訊ねると、「はい、お願いします」と言うので、処分本のリストをフアクシミリで送った。はつきりいって充実のリストであった。前もってその店の棚をチェックして、その店で1千円以上で売られているような本ばかりをピックアップしたリストだった。

だが、それつきりなしのつぶて。ぜんぜん返事の連絡がない。1週間ほどたって電話をしてみると、またしても女性が出てきて「店長が外出中ですので、戻ってきたらこちらから電話をします」という。ところが、それつきりまた連絡がない。仕方がないので1週間ほど待つてからまた電話をしてみると、今度はようやく店長という男性が電話に出た。そして、その店長の開口一番のセリフがこれだ。「リスト見ました。で、どうして欲しいわけ？」

な、な、な、なんなんだ、この無礼なセリフは！ リストを送った方がいいかと聞いたなら「お願いします」と言われたから送ったんだぞ。それなのに、なんで「どうして欲しいわけ？」などと言われなければならないのだ。

「買い取ってもらえる本があったらお願いしようと思って、リストを送らせてもらったのですが」

なんとか怒りをこらえてそう答えると「あ、そう。うちはね、原則として郵送での買い取りはしないんだけど、それなら〇〇を〇〇円で引き取りますから、その1冊だけ着払いで送ってください」。

ムッカー！ 誰が郵送で買い取りだなんて言ったよ。持ち込む前にリストを見てもらっただけだろ。

もちろん、これは極めて例外的な対応で、大半の古本屋さんもつとつと紳士的な対応をしてくれる。だが、中にはこういうむちやくちや腹の立つ対応をしてくれちゃう古本屋もあるわけだ。別に金に困って本を処分するわけではないので、こういう高飛車な態度に出られる理由などまったくないのだけどねえ。

最近では、こういう希少価値を伴う本はインターネットを利用して売ることが多くなってきた。自分のホームページに「古本売りますコーナー」というのを作って、不要になった本をズラリと並べてみたり、ネットオークションに出品したりしている。その方がストレスが溜まらなくて、ずっと気楽に本を売ることができる。「ずっとこの本を探していたんです」というようなメールをいただきなが

ら本のやりとりをするというのはけっこう楽しいし、ネットオークションもゲーム感覚で楽しむことができる。時には「自分が小学生の時に亡くなった祖父が出した本なんです」「昨年亡くなった飲んだくれだった父が、若い時に書いた小説なんです。生前は気にもならなかったのですが、亡くなってみると読んでみたくなって」などというメールを貰うこともあり、「お願いだからこの本を貰ってください！」と泣きながら本を送るなんてこともあったりするわけです。というわけで、それで生活をしている専門業者の方には大変に申しわけないのだけれど、古本の世界もC to C、個人対個人で取り引きをする時代であったりするのだ。

初出…「本の雑誌」2004年9月号

読むと価値の落ちる本

「そんなに本をたくさん買って読み切れるんですか？」

時々、素人さんからそのような質問を受けることがある。ジョーダン言っちゃいけません。読み切れるわけがないじゃありませんか。そもそも、買ってる本のほとんどは、ハナツから読めるなんて思っちゃおりません。

そう答えると、たいていの素人さんはあきれ返り、理解できないという表情をなさる。本というものは読まれるためだけに存在していると信じているのでしょうか。

だけど、切手のコレクターは手紙を出したくって切手を集めていると思いますか？ コインのコレクターはお買い物をしたくってコインを集めていると思いますか？ 思わないでしょう。じゃあ、どうして本のコレクターが集めた本を読まないというだけで、そんな怪訝な表情をなさるのでしょうか。

ただし、切手やコインと違って、その気になれば本は読むことだって可能なのである。切手やコインは使ってしまったえばそれっきりだけど（場合によっては使うことすらできないのだけれど）、本は集めるだけではなく、なんと読むことだってできるのだ。ああ、なんて素晴らしいのだろう。ハレルヤ。

しかも、本は読んでも価値が落ちない。昔のプラモデルなんかは、箱から出して組み立ててしまうとそれではほとんど価値がなくなってしまうし、ビンテージワインにしたところで栓を抜いてひとくち舐めただけでもう売り物にならなくなってしまふというのに、本は違う。1ページ1ページをじっくりと味わって読み、読後の満足感にどっぷりとひたって本を撫でさすったところで、その価値はいささかも落ちることがないのだ。ああ、本はなんて素晴らしいのだろう。ハレルヤ。

だが、油断してはいけない。世の中には読まれることで価値の低下する本というものも存在しているのである。「返金保証本」というやつがそれだ。

「うっひゃあ！ こいつは面白いぜえ」と夢中になって読んでいると、途中のページから後半が封印されていて、「もし面白くないと思ったら、この封印を切らずに出版社に送り返しなさい。そしたら本代を返してあげようではないか」と偉そうに書いてある、それが「返金保証本」。そんなこと言われたって、出版社に返送する手間や送料を考えたら、なんぼでもない本代を返してもらったってしょうがないじゃないか。そんな面倒なことを誰がする？ それに、こんな面白いものをここで放り出したりしたら、続きが気になって気になって夜も眠れないじゃないか。

そこでビリビリと封を破ってしまう。どういうわけか、これがやたらと気持ちがいい。誰の足跡もついていない真っ白の雪の校庭に、

誰よりも早く入り込んで足跡をつけてまわる快感。「処女を征服する」などという表現を使ってしまうと、あまりにもストレートすぎて身も蓋もないのだけれど、ようするにそういうたぐいの精神的高揚に襲われて、つつい封を切ってしまうのである。ビリビリッ。というわけで、ほとんどの「返金保証本」は開封済となってしまう。だが、もしここで封を切るという誘惑に打ち勝ったならば、その本には「未開封」という価値がプラスされるのである。

価値がプラスされるということは、つまり古本市場で値段が高くなるということである。どのくらい高くなるかというと、これがよく分からない。なぜ分からないかというと、未開封のものが古書目録に載っているのを見たことがないからなのだ。それほどまでにみんながビリビリと封を破る快感に身を任せてしまっているということなのだが。

では、この「返金保証本」にどのような本があるか。詳しいことはよく分からないのだが、早川書房から出たハーバート・ブリーンの『あなたもタバコがやめられる』という本が最初期の1冊ではなからうか。もつとも、余り当てにならない記憶を頼りに書いているので、即座に信用してもらっても困るのだが。しかも、僕のおぼろげな記憶では、返金保証をうたいながらも、この本は特に封印はなされていないかと思う。つまり、単なる売り文句のひとつとして「この本を読んでタバコをやめられなかったら本代を返してもいいよ」というようなことが書かれていたのだろう。

では、小説の後半が封印された「返金保証本」に何があったかというところではアイラ・レイヴィンの『ローズマリーの赤ちやん』がそうだ。ロマン・ポランスキーの映画でも有名な作品だが、小説の方もむちゃくちゃ面白く、読み出したらそれこそ途中でやめられない。やめられない小説だというのに、途中から後ろが封印されて「ここでやめたらお金を返してやるけんね」と生意気な口を叩くのである。てめえ、喧嘩売ろうってのか！ よおし、買ってやろうじゃねえかよ。上等だぜ。などとやり返せるわけがない。なにしろ、そこでやめられるわけがないのだ。てめえ、ふざけんじゃねえぜ。口ではそう言いながらも、手は違うことをしている。ビリビリッ！

誰もが破く。みんなが破く。当然破く。だから未開封本は世に残



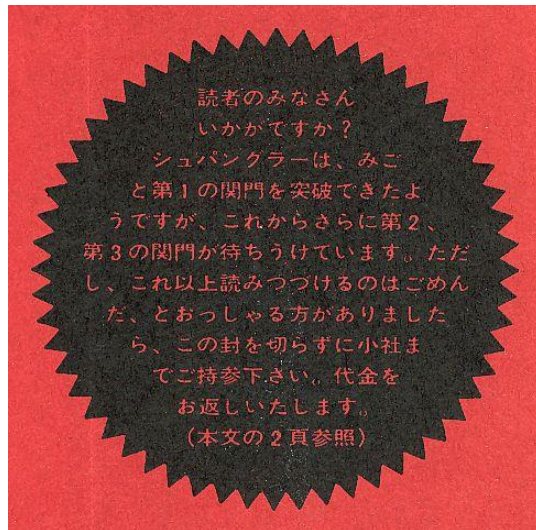
ノエル・ベーンの『シャドウボクサー』も返金保証本だった

らない。また、そういう小説だからこそ出版社も自信をもって返金保証をうたうわけだ。(ちなみに、続編の『ローズマリーの息子』の方は最低のクズ小説で、これを返金保証本にしたならば、誰もが封を切ったことを心底後悔すること間違いなしだ)

たぶん、この返金保証というシステムが話題作りにそれなりに貢献したのだろう。早川書房では何度もこのシステムを取り入れた本を出している。とりあえずとっさに思いつくところでは、リチャード・マテイソンの『地獄の家』、スタンレイ・エリンの『鏡よ、鏡』、ローレンス・サンダースの『盗聴』、ラモナ・スチュワートの『デラニーの悪霊』、ヘンリー・サットン『悪魔のベクトル』といったところがある。たしか、角川書店でもやったことがあると思うし、創元推理文庫のバリンジャーの『歯と爪』でもやってた。

だが、読むことで価値の落ちる本は実は「返金保証本」だけではない。アンカットフランス装で出された初期の幻影城ノベルスというパターンもあるのだ。

このアンカットフランス装というのが何かというと、製本する際に、本の3方の小口を化粧裁ちするステップを省いたもので、つまりこの本を読むためには1ページ1ページをペーパーナイフで切



り開かなければならないのである。幻影城ノベルスでは、天藤真の『炎の背景』、泡坂妻夫の『11牧のトランプ』、筑波孔一郎の『殺人は死の正装』、狩久の『不必要な犯罪』の4冊をこのアンカットフランス装で出している。話題作りになり、なおかつ製本の費用を

浮かすことができるという、実にナイスな企画だった。だが、意外な落とし穴というものもあるもので、製本ミスと勘違いした書店からの返本が相次いでしまったのである。おかげでこの企画は上記の4冊で終了し、以後の幻影城ノベルスは通常のハードカバーとなっている。

また、毎日新聞社から発行された筒井康隆の『私設博物誌』などもこのアンカットフランス装であるのだが、いちばんとんでもないことをやらかしたのは新潮文庫から出た泡坂妻夫の『生者と死者』であろう。

この本もアンカットフランス装なのであるが、実はページをカットせずにそのまま読むと1編の短編小説となり、ページをカットして読むとそのまま1編の長編小説となるのである。つまり、短編小説を構成していたページが、そのまま長編小説の中に組み込まれてしまうというとんでもない凝った構成の本なのだ。しかも、長編小説で扱っているテーマはというと、「消え

る短編小説」。うーん、凝りすぎ。

と、まあ、世の中には読むことで価値の落ちる本というものが存在しているのです。そのため、僕はいまだに『生者と死者』を読めないでいるのです。しくしく。

というわけですから、もしあなたの書棚の中に未開封の『ローズマリーの赤ちゃん』があったならば、

「よいではないか、ローズマリーどの」

「あーれ、お代官さま、お許しを〜」

びりびりい

なんてことはなさらないように。未開封の本は未開封のままにしておいて、破かずとも最後まで読むことのできる文庫を買ってきて読むことをお勧めする次第なのであります。

初出…日本冒険小説協会会報「イーグル」

『美人島征服』登場！

淑女スパイ、〈モDESTイ・ブレイズ〉シリーズの第1作、『唇からナイフ』が講談社ウィークエンドブックスから出版されたのが昭和41年7月15日。ギャビン・ライアルの『深夜プラス1』が早川のポケットミステリーから出版されたのが昭和42年2月15日。そして、アリストテア・マクリーンの『女王陛下のユリシイズ号』がハヤカワノヴェルズから出版されたのが昭和42年3月15日。当時、現場にいたわけではないので断言することは出来ないが、これを見るとどうやら冒険小説の翻訳が我が国で本格的に始まったのは昭和40年代になってからと言ったことができそうだ。そうすると、それ以前には冒険小説の好きな人間は一体どういう本を読んでいたのだろうか。ふと、そのことに興味を覚えた僕は、自分の本棚の中に昭和40年以前に書かれた冒険小説を捜してみた。

その結果見つけたのが梶野憲三の『美人島征服』であった。昭和34年8月10日に桃源社より発行された海洋冒険小説である。梶野憲三という作家がどういう小説を書いていた人なのかは知らないが、どうやら昭和40年以前にはこのような小説が読まれていたらしい。

今回はいつものおふぎけ、ダジャレをやめて、大真面目にこの『美

人島征服』を紹介することにしよう。

話は明治12年の秋に始まる。

旧篠山藩士の池直人は全財産200円を持って東京に出てきたのであるが、その金を何者かに盗まれてしまう。さて、困った、と腕組みしていると、今度は自分のカバンの中から500円の大金が出てくる。

「これは妙だ！」直人は目をパチクリ。

いつの間にかカバンがいれちがっていたのである。早速その金を届けに行くと、直人は金の持ち主の入江義文、肥後鶴見の二人と意気投合し、彼等について海竜丸という2千トンの日本一の船で大海原へと乗り出すことにする。

まったくもって安易でいかげんな導入部であるが、このくらいであきらかえていてはいけぬ。この小説はもともと奥が深いのである。

入江先生より航海の目的についての話が始まる。

「われわれ人間はこの地球に生まれたかぎり、どこへでも住む権利をもっている。それは神から与えられた人間の特権で、何人もこれを犯すことが出来ない。ところが西洋人種は一竿の国旗を無人の地にたててこれわが版図なりとして、他国人の入るを許さない。

それが万国公法をもって許されるならば、われわれにもまた先取権があるはずだ」

「アフリカ大陸から海に注ぐザンベツという大河がある。長さ数百里に達してその流域はきわめて豊饒だ。アフリカ南部はすべて各国にくだらされてるが、その中間南緯20度より赤道に至るザンベツ川の流域三百万里にあまる広大な土地は、未開の処女地である」

その広大な土地を開拓して、そこに新日本国を建設する、それが航海の目的だったのである。そのため、ルソン、ボルネオ、ジャバ、スマトラの諸島を巡航しながら、交易をして準備をととのえて、蛮土におしわたろう、というのである。戦後に書かれた小説であるとは思いたくない設定ではあるが、許して先に進むことにしよう。

船の中にはひとくせもふたくせもある男ばかりが乗りこんでいた。その中に一人の美少年もいた。十七、八の少年水夫。名を本荘四洲丸という。小柄で、すべすべした肌をして、女にしてみたいような若者である。

「こいつ、もしかすると変性男子かもしれんぞ。」

直人はそう思うと、なにかこう悩ましい気分になって来るのであった。(変性男子とはつまりオカマのことでありませぬ)

海竜丸は香港に着いた。そこにはありとあらゆる皮膚の色をした人種が歩いていて、日本人は見るからにパツとしない。

「アハハハハ、じゃあこうしよう。これは君なんかことに大賛成だと思おうが、世界中で最も美人を産するのは、トルコ領のアルメリアだ。そこでは美人市場が立つとる。そこでわれわれの国が出来た

ら、とりあえずアルメリア美人を百人ほど仕入れてきて、君たちにわけらんじゃね。そうして人種改造を行なうのだ。どうじゃね、この案は」

などという会話を平気でかわしている。かなりやばいんじゃないだろうか、こういう考えって。

この香港で四洲丸は女であることがばれて船を下ろされてしまう。

海竜丸はさらに進み、ボルネオに到着するが、そこで土人に襲われたり、支那人の海賊に襲われたりする。直人たちは逆にその支那の海賊船を乗っ取るが、その船には香港で下ろした筈の四洲丸がいた。彼女の本当の正体は支那の海賊王の娘、倩だったのである。そして海賊船にはもう一人、倩の妹の春妹も乗っていた。

倩はすっかり直人に惚れてしまい、なにかという直人に抱いてもらいたがるのである。

バタビヤで直人と倩は事故でジャングルの奥地に紛れこみ、土人部落に掴まってしまふ。ここでも直人はマラ族の酋長の娘、ポ二姫に惚れられて。ペロペロと顔を嘗められてしまふのであるが、このへんの土人は性交が唯一の慰安であるので、女の性欲もすこぶる猛烈であるという。

このへんでたいいていの読者はあきれかえってしまふのであるが、もう少し我慢してつきあってみよう。

酋長は酋長で倩に惚れてしまふのであるが、折りよく病気にしか

ってしまふ。それを直人がモルヒネ注射で直してしまい、今度は神さまの扱いを受けることになってしまふ。かくして物語は『冒険ダン吉』の世界へと突入していくのである！

結局、直人はポニ姫と結婚をしてマラ族の酋長の座におさまり、情を二号とすることにするが、婚礼の最中にトミニ族の襲撃を受けてしまふ。

直人は嫁にする筈のポニ姫を放り出して、情と二人で命からがら逃げ出すが、川に出たところで奴隷商人のトムに掴まってしまふ。この男がトミニ族に銃を渡していたためにマラ族は敗れてしまつたのである。

このあたりでようやく半分ぐらいなのだが、実にあほらしいストーリー展開に呆然としてしまい、本を放り出すのを忘れてしまふ読者も続出することだろう。この後も『インディ・ジョーンズ』プラス『ロマンシング・ストーン』割る百というような大冒険が続き、ようやくのことで直人と情は海竜丸に帰りつくのであるが、その辺の冒険ははぶくことにしよう。

海竜丸に戻ると、新たな冒険が直人たちを待っていた。ジャワの独立運動を援助して欲しいという要請が海竜丸に舞い込んで来たのである。直人たちは早速ジャワに向かい、独立運動勢力と合流した。

ある日、武芸大会が行われ、直人は情の妹の春妹と対することに なった。小娘とはいえ、拳法の使い手だ。油断は出来ない。

直人は春妹につかみかかる。瞬間、かわされて前にのめる。ヒラリとおどり上った春妹のすらりと伸びた白い足が直人の首にからみついて、首をしめる。

直人は狼狽して、やけくそに首をうちふった。その目に思いがけないものが入ってきた。力演のあまり春妹の下ばきの前がほころびてきたのである。直人はこんもりもろあがったスロープから、まだ開ききらない春をまつ一輪の花から、下もえのやわらかい草まではつきり見てしまったのである。

「もうだめだ。とてもかなわん」

ドシンと尻餅をついて、直人はふーっと息をついた。

実にとんでもないエピソードであるが、このあとも、直人たちは猪狩りに出て、地元のテングリ一族の女たちに襲いかかられてその欲望の餌食にされたり、そういったどうでもいいような、それでいてこの小説の本質であるようなエピソードが続き、最後の五分の一でようやく本筋、ジャワの独立運動の話に入るのである。

直人たちの活躍により、ジャワ中に独立の気運が高まっていく。しかし、今ひとつというところで、彼らが支援していた二人の王に海竜丸の人間は裏切られてしまふ。バタビヤの総督が秘かに申し入れてきた和儀の交渉を受け入れてしまったのである。もうひと押しというところまできて直人たちの努力は無駄になってしまったのだ。

「それで私たちはどうなるの」

傭が直人に尋ねた。

「元の木阿弥さ。つまらん道草をくつたと諦めて、最初の目的通り
アフリカへいくんだな」

こうして海竜丸はあっさりとジャワの独立を諦めて、希望の地、
アフリカをめざして印度洋にのりだしたのだった。

信じられないかもしれないが、ここで『美人島征服』は一卷のお
しまいなのである。まるで『戦時標準船荒丸』ではないか。これか
らという肝腎なところで終わってしまうのである。

それにしても、とんでもない小説があったものである。この小説
の作者は日本が戦争に負けたということを知らないのではないだ
ろうか。本気でそう思いたくなってしまう。面白いことは面白いの
だが、あまりにもバカらしい。

冒険小説の翻訳が本格的に始まるまで、ホントにこんな本が読ま
れていたのだろうか。翻訳冒険小説がいくらでも読め、日本でも優
れた冒険小説が多く書かれている時代に生まれ育つたことを心か
ら感謝したくなる小説だった。

初出…日本冒険小説協会会報「イーグル」

おくぎ旅館襲撃レポート

▼古本仲間の間で、「四万温泉の「おくぎ旅館」に遊びに行きたいねえ」という話は随分と前から繰り返し繰り返し出ていた。その理由が分からない人は、ぜひとも「おくぎ旅館」のホームページ（<http://www3.ocn.ne.jp/~okugim/>）をご覧ください。このホームページの「渡辺啓助の世界」「大衆文学資料」「探偵小説資料」というページをご覧になって頂ければ、きっと納得してもらえらるだろう。温泉旅館のホームページとしては異色としかいいようのないこのページを作った奥木さんは、渡辺啓助のコレクターとして知る人ぞ知る存在なのだ。

古本仲間が集まって、一緒に古本屋をまわって、一緒に酒を飲んで、「ああ、これで温泉にでも入って、その場でひっくり返って寝ることが出来たらサイコーなのになあ」などというセリフが口から出てしまうことがあるのだけれど、「おくぎ旅館」はその夢をかかえてくれる素晴らしい存在なのだ。充実のコレクションを見せてもらって、さらには温泉に入ることもできて、しかも酒に酔ったらそのまま寝ることができるという、夢の存在なのだ。

しかも、まったく面識がなければ単なる夢で終わってしまうのだけれど、実は奥木さんとは探偵小説愛好会「怪の会」で一緒だった

ので、きっちり面識がある。ちよつと連絡をとって、参加者でスケジュールの調整さえすれば、いつでもお邪魔は可能なのだ。だが、いつでも可能なのだけれど、なかなか実現しない。皆さんも御存知のように、世の中はそのようにできています。なにかきっかけがないと、なかなかこういう計画というものは動き出さないものなのです。

ところが先日、仰天の騎士さんのコレクションを見るためにいつもの古本仲間が集まった時に、「次は奥木さんのところに行きたいねえ」という話がまたしても繰り返し返され、なんとなく「機は熟した！」という雰囲気になってしまったのである。「いよいよ奥木さんに連絡をとり、温泉ツアーを決行する時が来たかあ」という雰囲気になってしまったのだ。

かくして、奥木さんに連絡をとってコレクションを見せていただく了解を得て、仰天の騎士さんの家に集まったメンバーを中心に声をかけてスケジュールを調整して、「おくぎ旅館襲撃オフ（通称・温泉オフ）」の開催が決まったのだった。

参加者は書庫を見せてもらう関係から人数を10人に絞り、石井春生さん、いわいさん、おーかわくん、喜国雅彦さん、北原尚彦さん、仰天の騎士さん、黒白さん、小林文庫オーナーさん、彩古さん、それに僕という顔ぶれとなった。彩古さんと北原さんは喜国さんの車に乗って、石井さん、いわいさん、おーかわくん、僕の4人は黒白さんと仰天さんの2台の車に分乗して、そして地元の小林文庫才

ーナーは列車とバスとで四万温泉に向かうこととなったのだった。

【1日目／2006年9月23日】

▼9月23日（土）。浦和に出て8時16分のJR快速ラピッドで小山駅を目指す。おそらくは、石井さんもいわいさんもおーかわくんも同じ列車に乗っているはずなのだけれど、本を読みたいので敢えてみんなを探しに行こうとはしない。列車の移動時間は貴重な読書時間なのだ：っと、寝てしまったぜ。

8時59分に小山駅に到着し、改札口に向かう途中でいわいさん、おーかわくん、石井さんに遭遇。ひとり、またひとりとメンバーが集まっていく様子が、なんだか映画の演出のようでおかしい。

駅前まで車で来ていてくれた黒白さんにご挨拶。おおっ、短期間のうちに、なんかすっげえ体型が変わってませんか？ロードバイクの魅力に目覚めてひたすらペダルを漕ぐ日々を過ごしているという黒白さん、すっかり身体がスリムになっているではありませんか。か。

黒白さんの車に乗せてもらって、佐野の仰天さんの家へ。

車の中で石井さんから「日本推理作家協会会報」を受け取る。僕がゲストスピーカーをした時のレポートが載っている号を受け取ることになっていたのだ。「第59回日本推理作家協会賞」の発表、

「第52回江戸川乱歩賞」の発表などが載っていて、なかなか充実した内容で、その中に「姿三四郎と富田常雄」などとあるのがいかに場違いだ。「新入会員紹介」という欄に西村健の名前を発見。ほお、ついに「しゃーまる」も日本推理作家協会の会員かあ…などということを書いてみると、ぜんぜん話が先に進まない。

予定より若干遅れて仰天さんの家に到着。ここで部屋に上がり込んでしまうと「おおっ、こんな本がある！」「うひょーっ、すげえ、こんな本まであるぜえ」って、ついこないだあつたばかりの場面が再現されてしまうので、敢えて部屋にはあがらない。今日はそんなことをしている時間はないのだ。

2台に分乗して、そそくさと出発。僕は仰天さんの車の助手席。後部シートには石井さん。3人で古本の話などをしながら、目指すは伊勢崎の「ほんだらけ伊勢崎店」だ。

出発してすぐに黒白さんの車が仰天さんの車を追い抜いていく。そして、けっこうスピードを出して遠ざかろうとする。ううっ、どうしたんだ、黒白さん？
すると、僕の携帯が鳴った。黒白さんの車に乗りたいいわいさんか。らだ。

「どこを走ってます？」

「そっちの車の5台ぐらい後ろです」

「えっ？ 後ろ？」

仰天さんの車を見失って、大急ぎで追いつこうとしていた黒白さ

んなのだった。

伊勢崎に向かう車内での最大の話題は「あれに注文入れた？」という事。

「8800円は痛いけど、あれが最後の1冊だからなあ」

「ワシも注文、いれました」

「私も注文しました」

「ああつ、すでに倍率は3倍かよ」

「AさんもBさんも注文を入れてるはずですよ」

「Bさん、持つてるじゃん。あ、だけど、かなり状態が悪いようなことを言ってたっけ」

「この調子じゃ、Cさんも注文を入れちゃうんじゃないの」

「Cさんこそ、古本市でAさんの目の前で買っていったはずですよ」

なんの話かというと、甲斐克彦の『黒帯とじゃじゃ馬』の話。インターネット古書店ジグソーハウスの目録に掲載されたのだけけれど、なにゆえに甲斐克彦の本にそんなに注文が集まるんだ？

▼「ほんだらけ伊勢崎店」は、異様に広い店だった。仰天さんの組んだタイムスケジュールでは、この滞在時間は30分だったのだが、30分で見終えることなんかできるわけがない。が、ゆっくりチェックしている時間もないので、大慌てで店内を見てまわる。

買ったのはこんなところ。

d 『小説 ハレンチ学園 (1)』 永井豪

(集英社コバルト文庫／初版) 100円

d 『小説 ハレンチ学園 (2)』 永井豪

(集英社コバルト文庫／初版) 100円

d 『小説 ハレンチ学園 (3)』 永井豪

(集英社コバルト文庫／初版) 100円

d 『縦の木の物語』 津山紘一 (集英社コバルト文庫／初版) 50円

d 『ドイル傑作集Ⅷ 失われた世界』 コナン・ドイル

(新潮文庫／重版帯・元パラ) 150円

d 『アシャンティ』 A・V・フィゲロア

(ヘラルド出版／初版) 300円

『保護者なき家』 ハインリヒ・ベル (角川文庫／重版) 300円

『アンドロイドの叛乱』 クリフフォード・D・シマック

(久保書店／再版) 500円

(※dとあるのはダブリ買いの本のこと)

ダブリが多いけれど、『小説 ハレンチ学園』全3巻が揃っていたのを見逃せません。津山紘一の『縦の木の物語』は名作なので、誰かに読ませたい一心で購入。『ドイル傑作集Ⅷ 失われた世界』は、帯・元パラ付きでやたらと状態がよかったので、『アシャンティ』は北上次郎さん絶賛(僕も絶賛だ)の『自由への逃亡』のフィゲロウアの作品できっと冒険小説協会の誰かが欲しがるかから…というように、ダブリにはダブリの理由があるのだ(ほとんど

理由になってませんか？　そうですか？。

久保書店の『アンドロイドの叛乱』に理由はいらないだろうけれど、角川文庫の『保護者なき家』をなんで買ったのかというと、この頃の角川文庫の翻訳小説をことごとく集めているからというのが理由だったりする。「この頃の角川文庫」と言っても分かりづらিদらうけれど、要するに背中になんの模様も入っていない「無地背の角川文庫」の翻訳小説が僕の収集ジャンルのひとつなのであります。

いやいや、こんなことをいちいち説明していたのでは、まるで話が先に進まない。レシートに刻印された時間を見ると、すでに11時49分だ。3時にはおくぎ旅館に到着してコレクションを見せてもらう予定になっているので、そうそう余裕はないぞ。

ああ、じっくりチェックしたならば、まだまだ買いたい本が見つかる気配が濃厚なお店なのだけれど、今日は本当にこれ以上ゆっくりしている時間がないのだ。残念！

当初の予定ではこのあと「大成堂書店二之宮店」というお店に行く予定だったのだけれど、黒白さんが「その店に行ったら絶対に時間がなくなる」というので、伊勢崎の「書肆いいだや」というお店を覗いて、あとはおくぎ旅館に直行しようということになる。

で、「書肆いいだや」。店の前にテントがあつて、雑本の並んだワゴンが出ている。うーん、いまいち！　店内には黒い本がごっそり

棚に並んでいるのだけれど、郷土史関係の本が多く、こちらの収集ジャンルにひっかかってくるような本はそれほど多くはない。文庫の棚には古めの本がけっこう並んでいるのだけれど、やはりこちらの触手にひっかかってくるような本はなかった。

残念ながら、手ぶらのまま店を出る。ま、さっきの「ほんだらけ」でたくさん買ったから、それでいいや。

よし、あとは四万温泉へレッツラゴーだ。

と、まあ、四万温泉に向かったのはいいのだけれど、ふと気がつけばお腹がすいてきている。うーん、どこかで食事をする時間はあるだろうか。仰天さんと顔を見合わせ、少し遅くなるけれど、とりあえず前橋を抜けたところで判断をしようということにする。

それにしても、群馬というところは、やたらと大型のリサイクル系古本屋が多い。車を走らせていると、国道沿いに「夢書房」だの「富士書房」だのと、いくらでもあるのだ。が、看板には「古本、DVD、写真集」などの文字があり、あきらかにアダルト系のお店である。さすがに覗きに行く気にはなれないのだけれど、あれだけ並んでいれば、中には1軒ぐらいミステリのレアな絶版本が紛れ込んでいたりもするのかもしれない。

ようやく前橋市を抜けたところで時計を見ると、1時を少し過ぎている。仰天さんの買ってきた「るるぶ」によると、渋川伊香保インターチェンジから四万温泉まで1時間10分程度とのこと。前橋市から渋川伊香保インターチェンジまで30分かかるとしたら、う

「む、食事にかげられる時間は20分だけだ。「おくぎ旅館」に3時に集合して、奥木さんの書庫を見せていただくという約束になっているのだ。

仕方がないので、コンビニでおむすびでも買って、車の中で食べようということになるのだけれど、そうなる今度はコンビニがない。どういうわけか、反対車線の方にはコンビニがあるのだけれど、こちら側にはまるっきりコンビニがないではないか。そうなる、なおさらに空腹がつのってくる。

あつ、ブックオフだ。進行方向右側にブックオフ前橋上小出店を発見。だが、寄っている時間はない。ふん、今日のところは勘弁しておいてやらあ。

そうこうするうちに、本格的にコンビニなどありそうにない雰囲気になってくるが、進行方向右側にあったコンビニに入り、ようやく昼飯がわりのおむすびやら飲み物やら、夜のつまみなどを買うことができたのだった。

1時半を少し過ぎたあたりで渋川伊香保インターチェンジを通過。

はたして、喜国さんたちは先行しているのだろうか。石井さんが彩古さんの携帯に電話をかけてみる。

「いまどこですか？ えっ？ 高崎？ なんで高崎にいるんですか？ なに口ごもってるんですか？ まさか古本屋をまわってるんじゃないでしょうね？ はっきり言いなさいよ、はっきり！

え？ 携帯の電池がなくなる？ なにごまかそうとしてるんですか？ あ、切れた」

な、なんでまだ高崎にいるんだ？ そもそも、喜国さんの車は、関越自動車道でまっすぐ渋川伊香保インターまで来る予定だったんじゃないのか？ なんで高崎なんかにいるんだ？ まさかネタ作りのために、世界で一番値付けが高いことで知られる「高崎古書センター」を覗きに行ったのか？

あとで問い詰めたところ、こつちが早くに集合して古本屋をまわるといっているので、喜国さんたちも出発の時間を早めて古本屋に行こうということになったものらしい。だけど、彩古さんが高円寺の古書市に寄っていくというので早めの出発にはならず、結局は「昼食のために時間は割かない。昼食を抜いても古本屋に寄る」という方針で、高崎の「赤坂堂書店」に寄っていたとのこと。さすがだ。というか、せっかく観光地まで来て、地元のおいしい料理を食べようとしてもしないこのメンバーって…。

「高崎古書センターにも寄ったんでしょ」と聞くと、「高崎古書センター」はすでに店舗はやっていないとのことだった。

渋川から353号線に入り、中之条を抜け（中之条で地図と道路標識が一致せずに一瞬混乱するが、道路標識を信用してことなきを得る）、道はどんどん山奥へと向かい、3時ちよつと前によく四万温泉「おくぎ旅館」に到着したのだった。

▼四方温泉というところは、それほど派手な温泉地ではなさそうだけれど(結局、温泉街には一歩たりとも足を踏み入れていないので、よく分からないのだ)、「おくぎ旅館」はその中でもいちだんとひっそりとした場所にあった。まわりには、自然だけがある静かな旅館だった。こんなところに、本当に凄くコレクションがあつてもいいのか?と、そう思ってしまうような環境の旅館だった。

玄関を入って奥の方に声をかけると、年輩の女性が現れる。奥木さんのお母さんだろう。

「よしだといいます。お世話になります」

「ようこそいらっしゃいました。さきほどお一人いらっしゃいました、お散歩に出ていらっしゃいますよ」

小林文庫オーナーがもう来ているらしい。

部屋は2階の4部屋を使わせてもらえるということで、1部屋を石井さん、あとの3部屋を男たちの部屋とする。3部屋のうちのいちばん広い部屋が宴会部屋兼用だ。

とりあえずはお茶でも飲んでのんびりと後続組の到着を待っていると、小林文庫オーナーが戻ってくる。温泉街を散歩して、立ち寄り湯にも入ってきたのだという。温泉街に来て、ただひとりまともな行動をとった人物だ。

喜国さんの車から石井さんの携帯に電話が入る。近くまで来て迷っているらしい。喜国さんの車だけがカーナビをつけているというのに、なんで喜国さんだけが迷子になるかな。

ちなみに、石井さんの携帯にはアンテナが立っているようだが、僕の携帯は圏外となっているから連絡先をいちいち教えとかないでも大丈夫だよな」なんて言って家を出てきたので、家族はこちらの旅行先をまったく把握していないというのに。

外に出て喜国さんの車を待っていると、別の車が「おくぎ旅館」の駐車場に入ってきて、出てきた男性から「よしださんですか」と声をかけられる。「Tです」。

このT氏とは、直接の面識はないが、ホームページで売っている本を買ってもらったりして、何度かメールのやりとりなどはしたところのある人だった。実はしばらく前にこのT氏から「近所のブックオフに嘉納治五郎大系が揃いで出ているのですが、必要ですか?」というメールを頂いていて、さすがに全巻揃えると置く場所に困るので、第10巻の「自伝・回顧」と第11巻の「嘉納治五郎伝」の2冊だけを頼んでいたのである。もちろん郵送してもらおうつもりでいたのだが、よくよく確認してみればこのT氏、住所は中之条で、四万温泉とはものすごく近い。そこで、喜国さんにサインをお願いすることもできるし、奥木さんのコレクションを見ることができると、「よかつたら本の受け渡しがてら、いらっしゃいませんか」と声をかけていたのである。

T氏と握手をかわし、お願いしてあった本を受け取る。

『嘉納治五郎大系 第10巻 自伝・回顧』監修・講道館

（本の友社／再版） 250円
『嘉納治五郎大系 第11巻 嘉納治五郎伝』監修…講道館

本来は1冊1万円ぐらいする本がたったの250円なんなんでもないなあ。

丁氏の車に引き続いて喜国さんの車も到着。遅刻だぞ。旅館の玄関に戻る途中で奥木さんにも遭遇。お久しぶりでございます。

というわけで、メンバーは揃った。いよいよこの旅行のクライマックス、奥木コレクションの公開だ！

▼奥木さんのコレクションは、決して旅館のロビーにガラスケースがあつて、そこに展示されているというわけではなかった（それならそれで、旅館の売りになると思うのだが）。旅館とは別の敷地に建つ一戸建ての家、その2階の書庫の中



にズラリズラリと並んでいたのだった。書庫の広さは8畳ぐらい。入り口を除く四面の壁はすべて作り付けの書棚が並び、部屋の中央にもがっしりした木製の書棚が設置されている。その書棚にギッシリと超レアな本がひしめきあっていたのだ。

11人の訪問客はその部屋に一歩足を踏み入れるなり古本特有の香りに陶然となり、そして並んでいる本の背中を見ては目を瞠り、羨望のため息をもらし、石井さんは「ああっ、ここにはこんな本があるう！ ぐはあっ、こっちは○○の○○まであるう！」と四方ダムまで届けとばかりに雄叫びをあげるのだった。

事前の予想では、渡辺啓助の充実のコレクションを中心に、綺羅星のごとき本がきれいに並んでいるのだろうと思っていたのだけれど、予想をはるかに上回るボリュームのコレクションに圧倒されてしまう。



渡辺啓助の本なんて、奥木コレクションのほんの一角にすぎないではありませんか。あっちで座り込み、こっちで背伸びをして、コレクションを舐め回すようにチェックするマニアたち。

「古本を集め出してからの期間はほとんど一緒なのに、どうしてこんなに違うんだ？」

黒白さんが呆然とつぶやく。

いや、それを言ったら、僕の方がよっぽど早くから古本を集め出しているのだけれど、ぜんぜんレベルが違いすぎるじゃないか。

部屋中央の書棚のまわりを、回遊魚のごとくゆつくとまわりながら書棚を見ていく。1周しても、まだまだ見たりない。

「この部屋に寝泊まりしたら、いつまでも暮らせませよ」

石井さんが声高に主張する。

2周しても、まだまだ終わらない。

「うーん、この本にこのバージョンがあるとは…」



彩古さんが、なにやら僕などには理解できないレベルの発見で興奮している。

3周しても、まだまだ部屋から出る者は出ない。

「ふっふっふ、香山滋と富田常雄に関してだけは勝ったぞ」
要するに、勝てるのはそれだけってことなんですけど。

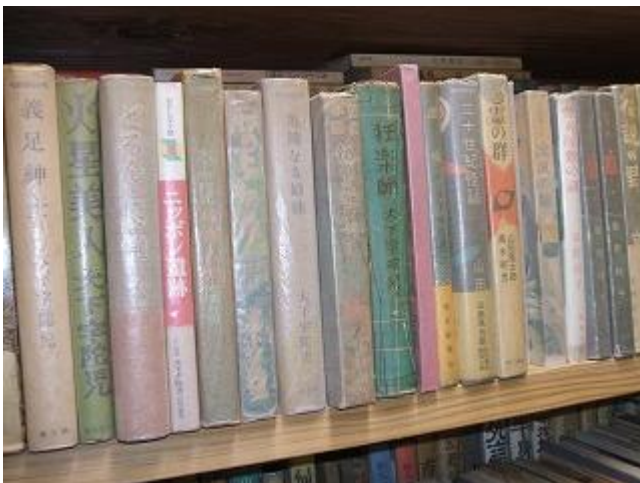
「あすなひろしと真崎・守と高橋亮子のマンガが並ぶるのは、さすが同世代ですね」

喜国さんが妙なところで納得している。確かに僕の部屋にもあすなひろしと真崎・守は並んでいる。高橋亮子の絵は、一時期は完全に模写をマスターしていた。うーん、見事に趣味が重なる。

「北原さくん、ここにあるシャーロック・ホームズは持ってるんですかあ？」

「え、なにになに…、ああっ、これは持ってないぞ！」

4〜5周したところ



で、なんだか古本にのぼせてしまつて部屋を出る。他のメンバーはまだまだ飽きずにぐるぐる回っている。

「ここから好きな本を1冊だけ貰えると言われたら、どの本を選びますか？」

「ええっ、そ、それは悩むなあ……」

いや、なにも、みんなで一斉に本気になって悩まなくていい。

マニアたちが痴呆と化した様子を、にこやかに大人の如き慈愛のまなざしをもって眺める奥木さん。というか、かなりあきれたまなざしだったかも。

「Aさんがここにいたら、

「いいなあ、いいなあ、欲しいなあ、これ欲しいなあ」って、完全に子どもと化しますね」

力強く断言する石井さん。そういう石井さんだって、さつきから自分の欲しい本を見つけたときに凄い叫びをあげてますけど。

いつまで見ていてもきりがないので、適当なところで切り上げて旅館に戻るが、



その途中のみんなの口からは「凄かった」「凄かった」と同じセリフがうわごとのように繰り返されるばかりなのであります。

いやあ、でも、本当に凄かった。まさか、こんな山奥の一軒家にこれほどのコレクションがあるとは、誰も予想だにしないよなあ。

喜国さんと北原さんをお願いして、T氏の持ってきた本にロビーでサインをしていただき、そこでT氏とはお別れする。わざわざ嘉納治五郎の本を持ってきていただいたのだけれど、奥木さんのコレクションも拝見できたとし、喜国さん、北原さんのサインももらえたので、充分満足していただけたのではないだろうか。

ちなみに、のちほどT氏から来たメールには、こんな文章が。

「それにしても、集まった人たちの会話が面白かったです。喜国さんとの座談会そのものでした。石井女王さんいい味



出しているな。」

やっぱり、生の石井さんを見ることができたってのが、いちばんの収穫なんだ（笑）。

▼部屋に戻っても興奮醒めやらず、ひたすら本の話なのだけれど、この調子だと夕食前に温泉に入ることができそうにないので、後ろ髪をひかれる思いで席をはずし、風呂へと向かう。

風呂は男女各ひとつと、混浴岩風呂がひとつ。混浴と言っても、今日の宿泊客は僕らだけで、

女性は話に夢中の石井さんだけなので、遠慮なく岩風呂の方にいらせていただく。

湯は無色無臭。すぐ隣りの草津温泉のお湯がもつと硫黄くさいのに比べると、かなりすっきりとしている。残念なのは、湯温がかなり低めであるということ。いくら入ってもまったくのぼせるということがないので、長時間入っていられるというのは嬉しいのだけ



れど、もう少し温度が高い方が嬉しい。表示によると、もつと寒い時期には沸かしているらしいのだが。

それに比べると、あとから入った男風呂の方はもつと湯温が高く、岩風呂でひたすらゆっくり入ってからは、男風呂でさらに暖まるというのがけっこう気持ちのよい入り方なのかもしれない。

▼夕食後はひと部屋に集まったのオークション大会。この濃いメンバードークションをしたところで、果して盛り上がるのかどうかが不安だった。なにせ、

なまじっかな本を出品したところで、入札があるとも思えないし、ただひとりしか入札が入らなければまったく競りが成立しない。果して、競りが成立するほどの出品物があるものやら。

ちなみに、僕の場合はハナから真つ当な出品物は諦めていた。屋根裏をチェックしたり、本の山の奥深くを探せばそ



れなりのブツを引つ張り出すことはできるのだが、とてもそこまで手間をかけることはできなかったからだ。結果、出品したブツはというと、単なる受け狙いのブツとなった。なにせ、20年以上前にフィリピンで買ったフィリピン製のニンジャコミックスなんて、確かにいまや再入手はほぼ不可能にしても、欲しい人間がいるものやら。ちなみにこのコミックス、絵柄が白土三平の『カムイ外伝』に影響をモロ受けているという点が売りだったりします(結局、北原さんがいやいやながら(笑)落札してくれました)。

誰が何を出品して、誰が何をいくらで落札したのかはまるっきり記憶にないので、とりあえず自分が落札した本を報告しておこう。

『燃える海』デュ・モーリア

ア (三笠書房デュ・モーリア作品集／初版) 100円

何人かデュ・モーリアなら欲しいなという声が出ていたのだけれど、「世界大ロマン全集から出ている『情



炎の海』です」と言ったら、途端に入札がなくなってしまった本。仕方がないので入札を入れたら、そのまま誰からも声がかからずに落札となってしまった。

三笠書房のデュ・モーリア作品集が100円でこたあないでしょう。みんな、入札しろよな。

『女怪』横溝正史(角川ミステリ文庫／初版) 120円

特に欲しかったわけでもないのだけれど、誰も手を出さなかったから。あ、でも、100円スタートで120円ということは、とりあえず競りは成立していったってことか。

『レディース・パズル』

桜井一(集英社文庫／初版) 150円

探していた本ではあるのだけれど、それほど積極的に欲しいと思っていたわけではない。でも、まあ、こういう機会に買うというのもいいでしょう。

『東京0番地』井上孝(筑摩書房／重版帯) 2



00円

奥木さんの書棚に2冊並んでいた本のうちの1冊。『壇ノ浦0番地』なら盛り上がるのだけど、『東京0番地』ならよく見かけるかなあ。誰からも声がかからないので、とりあえず声をかけたところ、そのまま落札となってしまうた。

『セレナーデ』 ジェームス・ケイン

(日本出版協同/初版) 300円

うーん、この僕がジェームス・ケインを落札してどうするんだよ。いや、文句を言っても仕方がないけれど、誰か他に落札してくれよな。これを機会にジェームス・ケイン選集を揃えよう：などという気はさらさらありません。

『遙かなる虹』富田常雄(春陽文庫/初版帯) 500円

これまた奥木さんの書棚にあった本。奥木さんから「これは持ってますか？」と聞かれて、「たぶん持ってません」と答えたら、そのままオークションの出品物



となってしまうました。そんな、出品されたって僕以外に入札する人がいるわけがないのに。

『無法者一代』牧野吉晴(東京文藝社/初版) 1700円

牧野吉晴はなんとなく集めている作家なので、これを落札できたのはちょっと嬉しいかも。これが「武道小説」であれば、仰天さんと熾烈なる争いをしてあっさり身を引いていたところだけれど、これはいわゆる侠客を主人公にした小説ということなので仰天さんとしてもそれほど執着はなかったようだった。でも、少なくとも1700円までは競りあがったということなんだよね。

ちなみに、僕が落札した本で、ともに競りが成立していた唯一の本がこれなのでした。他の競りが成立した本は、ことごとく競り負けていたのであります。

『暗黒館の殺人 限定愛蔵版』綾辻行人

(講談社/初版) 2000円

これは喜国さんが持ち込んだ本。『暗黒館の殺人 上巻』『暗黒館の殺人 下巻』、それに喜国さんの画集の3冊がセットになった函入りの豪華な本である。真つ黒の函に金色の箔押し文字だけが入っている。

喜国さんがこの本を出して、「これは、安くスタートしましょう」と言うなり何人かから「定価で買います」との声があがる。確かに出た時に買い逃した人にしてみれば、定価で買う価値のある本だろう。ここで落札して喜国さんにサインを入れてもらえれば、それで

お宝になることは間違いなしである。

「いや、安くスタートしてください」

はつきりいって出品者の喜国さんとしたら、妙に高くなってしまうのも困るというものだろう。

それに、定価でスタートしたのではわざわざオークションに出品する面白みというものが無い。安く出してお互いの顔色をうかがいながら値をあげていくのがオークションの醍醐味というものなのだ。

進行役の彩古さんが「うーん、でも、あんまり安くもスタートできないうしなあ」と、スタートの値段を考慮している時に、なにやら喜国さんの手許からビリっという紙の破れるような音が。

「あっ！」

「あっ！」

「ああっ！」

「あああっ！ 帯が…破れちゃった」

なにげなく函の中の本を取り出そうとして、喜国さんが帯を破ってしまったのである。

「あ、でも、この帯はバーコードとか値段を入れるために巻いただけの帯で、他には何も書かれていない帯だから」

喜国さんがフォローするのだけれど、さっきまで定価で買うと言っていた人の反応がなにやら冷たいような…。バーコードと値段が入っているだけの帯が破けたただけなのに（笑）

「じゃあ、帯も破けたようなので、2000円からスタートとしましょうか」

「いや、もっと安くしてください」

「でも、あまり安くしてもあれだから」

彩古さんと喜国さんのやりとりがあつて、2000円でスタート。シーン…。

「じゃ、じゃあ、2000円」

沈黙に耐えかねて入札を入れてみる。

落札。

嘘！ なんて誰も入札してこないのさ。ここで落札しておけば、喜国さんにサインを入れてもらうことだってできるんだよ。限定愛蔵版だよ。そもそも、綾辻さんの本は『殺人鬼II』しか読んだことのない僕が落札してどうするのさ！

かくして、『暗黒館の殺人 限定愛蔵版 函付き・帯破れ』は僕の手許にくることになったのでした。なぜ、僕の手許に新本格？

ちなみに、あとでこの限定愛蔵版についていた喜国さんの画集にサインをお願いしたところ「ああっ、この本、真っ黒だから普通のペンじゃサインができないんだった！」。おおっ、なんと意外な落とし穴が！

僕が落札した以外の本で盛り上がったのは、『海底散歩者』渡辺啓助、『花笠浪人』栗田信、『旋風社員』萩原秀夫、『大暴れ台風娘』

城戸禮、『電光山猫娘』城戸禮、『頑張れゴンさん』宮本幹也といったところ。相変わらず貸本小説の人氣が高いのであります。

他には、「かすとり雑誌5冊セット」とか『私が選んだもつとも怖い話』Aヒッチコック、『魔女の誕生』都筑道夫編、『慄然の書』ウイワード・テーズル傑作集』といったむちゃくちゃレアな本が続々と登場し、信じられない安値で落札者の手許に渡っていったのでした。『魔女の誕生』とか『慄然の書』あたりは、もし持っていないければそれなりに頑張って入札しちゃう本なただけどなあ。

▼オークションのスタート時には、1階の自販機で買ってきたビールを飲んでいただけけど、途中から黒白さんに手配をお願いした日本酒、焼酎を引っ張り出し、湯飲み茶碗で飲みながら盛り上がることとなった。実は奥木さんがいるところで持ち込んだ酒を出していいものかどうかためらいもあったのだけれど、ビールで物足りなくなると奥木さんに「実は日本酒を持ち込んでいるのだけれど、かまいませんか」と聞くとぜんぜん気にしていない様子だったので、遠慮なくやらせていただくことにした。ま、奥木さんも一緒になって飲んでいたので、問題はなすすね。

オークションが終わっても、そのまま本の話で盛り上がり続ける。男どもが本の話に夢中になっている間が混浴岩風呂に入るチャンスとばかりに石井さんが風呂に行く。が、風呂から戻るなり「あー、ぬるかった！ 岩風呂、ぬるすぎ！」と大きな声をはりあげ、奥木

さんをひたすら恐縮させるところがさすがは石井女王様である。

続いて僕も温泉に浸かり（岩風呂でのんびりして、仕上げは男風呂でしっかり暖まる）、再び宴会場と化した部屋に戻ってエンドレスのバカ話。いったい何を話していたのか、まるっきり記憶にないのだけれど、ひたすら楽しかったことだけは間違いない。凄いのは、アルコールをまったく飲んでいないのに、同じテンションで楽しんでいる喜国さんだ。

黒白さんが「明日も運転がありますから、早めに寝ます」と言って部屋を出ていく。が、ふと気がつくときまた一緒になって楽しんでいる。いつのまに戻ってきたんだ？

一緒になって飲んでいた奥木さんのろれつもだいぶあやしくなってきた。僕らだって、そうそう頻繁に本の話のできる仲間とこうやって集まれるわけではないけれど、奥木さんはそれ以上に本の話のできる機会は少ないだろうからなあ。こういう時に思う存分本の話をおこななくっちゃ。

日本酒がカラになり、焼酎をチビチビやって、再び自販機でビールを買ってきて飲み干し、次第に酔眼朦朧となったところで部屋にひきあげて布団に潜り込む。時間は深夜の1時を少し過ぎたあたり。いやあ、酔っ払っても寝る場所があるってのは楽でいいなあ。

というわけで、ようやく1日目のレポートは終了となったのでした。

【2日目／2006年9月24日】

▼朝の6時を少し過ぎたあたり。隣りの布団で寝ていた仰天さんがむっくりと起き上がって、しばらく窓際の椅子に腰掛けていたかと思うと、タオルを持って温泉に向かう様子。

こちらはまだしばらく布団の中でポーツとしていたのだけれど、7時になったところで布団を抜け出して「よし皆さん、まだ早いですよ」という黒白さんの声を背に岩風呂へ。

岩風呂で一緒になった仰天さんは、すっかりしゃっきり目が覚めていて、いまだポーツとしている当方とはまるっきり違う。なんで、そんなに元気なんだか。黒白さんによると「仰天さんはとにかく朝が早い」ということなんだけど、早寝早起き元気な子をいまだに実践してるんですね。

ぬるめの湯にたっぷりと使ってから、男風呂へまわると、こちらでは小林文庫オーナーに遭遇。こちらもすっかりしゃっきり目覚めていて、皆さん、健康ですなあ。

通りすがりにビールの自販機を覗いてみると、すべて売り切れとなつている。うう、あったけのビールを飲んじやったのね。

部屋に戻って荷物の整理。予想外に本が増えてしまって、手提げのバッグがパンパンに膨れ上がってしまった。うーん、こんなに本を増やしてしまつて、いったい家に帰つたらどこに突っ込んだらいいんだろう。

8時に「食事の支度ができました」と電話が入り、ぞろぞろと一階の食堂へ。途中、石井さんの部屋に寄つて「朝食だよ」と声をかけると、部屋からちよこつと顔を出して「あと30分待つてください。いま、『仮面ライダー』が始まつたところです」。

「待てるかよ！」

そういう人はほっときましょう。

あとで喜国さんたちから「そんなの、録画しておけばいいじゃない」と言われて「録画してるに決まつてるじゃないですか！」と言



い返していたけれど、それならみんなと一緒に食事しろよな。ま、そういうところか女王様の女王様たるゆえなんだけどき。

宿の支払いを済ませ、旅館のアイドル犬、もちちゃんにも挨拶をして、それじゃあぼちぼち出発しましょうか。

▼今日は黒白さんの車の後部座席に乗り、助手席に乗った地元の小林文庫オーナーがナビゲーター役。地図もないので、昨日と違ってどこをどう走っているのか、いまいちよく分からなかったので、うまくレポートを書くことができるのやら。もつとも、今日は古本屋をまわって帰るだけなので、さほど書くことがあるわけでもないのだけれど。旅行のクライマックスはすべて昨日のうちに終わっているのだ。

3台の車で四万温泉を出発して、中之条を抜け、昨日と同じ道を通っているはずがなぜか違う道を通っていて、それでもいつの間にか昨日と同じ道に戻っているという不思議な現象があったものの、無事に「ブックオフ前橋小出店」に到着。

まあ、「ブックオフ」なんてものは全国どこにいても同じようなものだと思うのだけれど、この「ブックオフ」ではバイト店員が一斉に「いらっしやいませ!」「ありがとうございます!」と体育会系的な蛮声をはりあげるといふアホらしいことはやっていなかったの、多少は落ち着いて本を見ることができた。もつとも、落ち着いて見たところで、買いたい本があるわけでもないのだけれど。

「ブックオフ前橋小出店」を出て、そのまますぐ前橋市を突っ切って、「ほんだらけ前橋南店」へ。昨日に引き続いて、2軒目の「ほんだらけ」だ。

ここで買ったのはこんなところ。

d 『鼠』ジエームズ・ハーバート

(サンケイノベルス/重版) 100円

d 『アメリカの鱒釣り』リチャード・ブローティガン

(晶文社/重版) 100円

d 『ボブ・ディラン』サイ・リバコブ/バーバラ・リバコブ

(角川文庫/重版) 50円

d 『縦の木の物語』津山紘一(集英社コバルト文庫/初版) 50円

うおっ、ぜんぶダブリだ。でもまあ、合計300円なら別にいいかあ。

ところが、ふと彩古さんが持っている本を覗き込んでみると、集英社のワールドSFシリーズを持っているではないか。タイトルは失念してしまったが『さらばふるさとの星』だったか、『衝撃波を乗り切れ』だったか、いずれにせよ僕の持っていない本だったはず。うーむ、悔しい。

レシートの刻印を見ると、この時点で時間は12時14分。昼を過ぎてはいるが、朝食をしっかりと食べたので、まだお腹は空かないぞ。

前橋市内の古本屋を回るといふ喜国さん一行とここで別れ、こち

らはお隣の高崎市へ。

高崎市ではまず「ブックオフ高崎貝沢店」へ。ここは店舗がふたつの建物に分かれているという、ちょっと珍しい形態となっている。それぞれの建物にレジ、スタツフが必要となるので、いまいち効率がよくないのではないかと思うのだけれど。

ここでも買うものはなし。やっぱり、「ブックオフ」はダメだなあ。

続いて「ほんだらけ高崎江木店」へ。

『ハローサマー、グッドバイ』マイクル・コニイ

(サンリオSF文庫／初版) 1500円

『世界の男の味』園田てる子(あまとりあ社) 200円

それなりにいい本が並んでいたりして、それなりに買う本があるのだから、「ほんだらけ」は侮れません。しかも、今度はダブリじやないってのが嬉しい。

この「ほんだらけ」の道を隔てた向かいには「富士書店高崎店」という大きな古本屋があるのだけれど、例によって看板に「DVD／写真集」の文字が並ぶアダルト系のお店だ。

「いや、そういう店にこそあまとりあ社の本があつたりするんですよ」

石井さんはそう主張していたのだけれど、さすがに覗きに行くとは言わなかった。

「ほんだらけ」のレシートの刻印を見ると、時刻は13時40分。

そろそろ昼食タイムかな。だけど、もう1軒、いいお店を見てからというので、「赤坂堂書店」へとまわる。ここは喜国さんたちが昨日寄っているの、何も残っていないだろうと思ったが、それなりにいい本が並んでいて、棚を見ているだけで充分に楽しめる。

じっくり見て回っていて、鳴山草平の『南国の出張社員』なる本を発見する。本の上に横になっていたので、先にその棚をチェックした仰天さんも見落としていたらしい。東方社の本で、函帯付き。

けっこう貴重かもとか

思いながらも、これは仰

天さんにお譲りいたし

ましよう。彩古さんはこ

の本に気がついていて

スルーしたのか、それと

も見落としたのか、非常

に気になるところだ。見

落としていて悔しがっ

てくれると、ちょっと嬉

しいかも(笑)。

▼「じゃあ、そろそろお昼にしましうか」とい



うことになる、なぜかお昼を食べるような店が見つからなくなつてしまふ。どういうわけか、道の反対側にはお昼を食べるのに良さげなお店が何軒もあるというのに。

高崎から前橋方面に戻って行って、その途中でようやく見つけたラーメン屋でお昼を食べることにする。店の横にバスが連結してあって、そのバスの中もラーメンを食べるお店の一部になっているというちよつと妙な作りのラーメン屋。はつきりいって、あのバスの中でラーメンを食べたら、ガラス越しの日差しですごく暑いと思うのだけれど。そうでなくても、今日はやたらと天気がよくて暖かい。昨日今日と天気が崩れるという予想はどうなつてしまったのだろう。台風が来ていたはずだけれど、どうしてしまったのだろう。汗をダラダラ流しながらあつついラーメンをすすする。それを見越してつけ麺を選んでいたおーかわくんたちは正解だと思う。だけど、にもかかわらず、激辛ラーメンを食べている石井さんて…。

食後は前橋駅前にまわり、大成堂書店本店の前で小林文庫オーナーが下車。この大成堂書店も気になるのだけれど、車を停めておける場所がないので諦めて、佐野市に向けて国道50号を走る(喜国さんたちはこの店もチェックしたということだが、店構えから受ける印象を裏切つて値付けがちよい高で、けつこう不評だったとのこと。また、山猫館書房にも寄つたところ、喜国さん、彩古さん、北原さんそれぞれに気になる本があったものの、値段が付いていなくて買えなかったということだった)。

「富士書房前橋店」「夢書房前橋店」と、アダルト系古書店が右に左に登場するが、それはことごとくスルーして、「大成堂書店二之宮店」へ。ここは当初の予定では、昨日行くはずだった。だが、1軒目の「ほんだらけ伊勢崎店」で時間を使いすぎてしまい、ここを覗いていたら絶対に3時までには四万温泉に辿り着けないと判断して諦めた店なのだ。

ところが、ようやく「大成堂書店二之宮店」に辿り着いてみると、「臨時休業」の看板が！

外見からすると、やたらと雑本の多そうな、実に楽しそうな店だというのに。非常に不便な場所にあるので、車を運転しない小林文庫オーナーにはチェックしようのない店なのだと言っていた店なのだ。ああ、きつと、今回が我が人生の中で「大成堂書店二之宮店」をチェックする唯一のチャンスだったんだろうな。残念。

あとはブックオフの看板にも目もくれずに一路佐野市を目指し、まずは仰天さんのアパートへ。けつこういい時間になっていたのも、もちろん部屋に寄つたりはせず、駐車で別れの挨拶をして、全員が黒白さんの車に乗り込む。そして今度は佐野市から小山市へと向かうが、「どうしますか？ 小山のほんだらけにも寄りますか？」と黒白さんに聞かれて、思わず首をタテに振ってしまう一同。いい加減、古本屋の棚をチェックするのに疲れたとか言っていたはずなのに。

というわけで、2日間で4軒目の「ほんだらけ」だ。

d 『黒い犬の秘密』 エラリー・クイーン

(ハヤカワ文庫Jr/再版) 100円

『赤いリスの秘密』 エラリー・クイーン

(ハヤカワ文庫Jr/初版) 100円

d 『アニメヒットソング PART II』

(朝日ソノラマアニメ文庫/初版) 200円

『アニメヒットソング PART II』はいわいさんが見つけてきてくれた。

「よし皆さん、これ持ってますか？」

「あ、持ってません。探してたんですよ、これ。嬉しいなあ」

なんのことはない、持っていました。自分の持っている本ぐらい、ちゃんと把握しておけよな(無理です)。

レシートに刻印された時刻はというと18時45分。

それにしても、2日間で「ほんだらけ」4軒チェックというのは、前代未聞ではないだろうか。こうなると、「ほんだらけ太田店」をチェックできなかったのが悔やまれる。関東で行ったことのない「ほんだらけ」は、「太田店」とあと千葉の「成田店」だけでもなあ。

ちなみに、喜国さん一行はこの日、帰りに「ほんだらけ所沢店」を襲撃したのだとか。あっちも久しく行ってないんだよなあ。

黒白さんに小山駅前まで送ってもらって解散。だいぶ疲れた様子の黒白さんに「気をつけて帰ってくださいよ」とみんなで念押し。「家に帰り着くまでがミスコンです」おいつ！

でも、本当に、黒白さんも仰天さんも、長時間の運転、ご苦労さまでした。お陰様で、ものすごく楽しい二日間を送ることができました。

また、貴重な本の並ぶ書庫を公開してくださいました奥木さん、本当に本当にありがとうございます。あの書庫は、かなり刺激的でした。

古本三昧して、温泉入って、酒飲んで、ひたすら本の話をして、疲れたらひっくり返って寝るといふ夢が、ようやく実現しました。ほんとにほんとに楽しかった。機会があったら、またやりたいですね。

長いあとがき

中学生で本格的に古本屋まわりを始めて、ふと気がつけばもう50才を過ぎていてではありませんか。その間に、いったいどれだけの本を買いこんだことか。

中には、むちゃくちゃ希少価値のある本もないのではないのだけれど、買った古本のほとんどは二束三文の価値しかない雑本だったりする。40年近くもの歳月を、雑本を買い集めることに費やしてきたのかと思うと、実にまあなんとというか、内心忸怩たるものがないわけじゃあない。

でも、キラ星のごとき絶版本を集めるよりも、そういう雑本を買うのが好きなのだから仕方がない。

ここには、そうした雑本を買いながら、ちよこちよここと書いてきた古本ネタの原稿を集めてみた。いささか内容的に古い原稿もあるのだけれど、いまさうら手を入れてもあまり意味もないので、そのまま収録することになっている。

以下、各原稿に関して、ちよいとつけたしなど。

■途中下車の古本屋

新宿1丁目にある勤務先から、自宅最寄り駅の南浦和駅の間にあ

る古本屋をネタにしたもの。本書のための書き下ろしです。

いわば、自分のなわばりにあるお気に入りの古本屋に関する情報をオープンにすることになるので、もしかすると自分のなわばりを荒らされることになるのかもしれない。だけど、このままだと街中の古本屋はかたはしから消滅していつてしまうので、本書を読んで僕のお気に入りの店に行く人が増えて、それでお店が存続してくれた方がいいのかも、とか思っています。

当初は通勤経路にある古本屋を完全に網羅して、その店舗の写真を全部掲載しようと思っていたのだけれど、意外と手間がかかるのでやめてしまいました。古本屋の写真を撮るのって、けっこう難しいですよ。通行人がいるとシャッターを押せないし、店の人に気付かれるのもバツが悪いし。古本屋をまわってはその店舗の写真をホームページに掲載している人がいるけれど、あれはきつと手間がかかってるんだろうなあ。

■ジュニア文庫への招待

本の雑誌社が刊行した「おすすめ文庫王国'09」に書いた原稿。そもその依頼はジュニア文庫の今年1年間の動向についての原稿を書いて欲しいということだったのだけれど、とてもとてもそんな能力はない。「それは無理だけれど、絶版文庫についてだったら原稿を書けますよ」というと、それでいいというので書いたもの。1年間に出版された文庫の中からおすすめの本をピックアップする

という「おすすりめ文庫王国」の趣旨からは完全にはずれていると思うのだけどなあ。

この頃は小野不由美のファンが初期の絶版本を血まなこになって探していたりはしたけれど、ジュニア文庫全般に目配りして、毛色の変わった絶版本を探すなどということをしていたのは早見裕司さんぐらいだったので、けっこう内容的には時代を先取りしていたのではないかと思う。

この原稿のせいで、一部の絶版ジュニア文庫の値段が上がったと、冗談半分でクレームをつけられたこともあった。

■均一棚への招待

本の雑誌社の「おすすりめ文庫王国2003」に書いた原稿。「ジュニア文庫への招待」の続編みたいなもので、ジュニア文庫に限定せずにエンターテインメント系の絶版文庫全般を題材にしてみた。この中でとりあげている本の中には、この頃はまだそれほど手間をかけずに手に入ったような本もあったのだけれど、その後、どれもこれもなかなか見つからなくなってしまった。ただし、『幽霊の2/3』だけは別で、とうとう復刊されてしまったのだった。

■バブル崩壊の日は近い？

「本の雑誌」2000年11月号に載った原稿。ヤフーオークション登場で衝撃を受けた頃に書いたもの。

それまで、絶版本を手に入れる主な手段というものは、古書店の店頭、古書店の発行する目録、古本市、友人とのブツブツ交換などであったのだけれど、この頃からインターネット経由で本を探して手に入れるというパターンが増えてきた。特にヤフーオークションの登場はそれまでの古本探しを根本から変える大事件であった。

初期のヤフーオークションでは、それほどむちゃくちゃレアというわけでもない本までもがとんでもない値段でやりとりされていて、「あの本がいくらで落札されたぞ!」「すげえよ。〇〇が1万円を超えてるぞ」などという情報が仲間内で飛び交っていたりした。それまで、均一棚で探すしかなかったような本が、高値でやりとりされる様子は、実に実に衝撃的であったのだ。

最近では、中途半端な絶版本はほとんど落札されず、ごく一部の本だけにレアな本だけがとてつもない値段で落札されるというように、様子は大きく変わっている。

■恥ずかしいあとがきベスト1に悶絶だ!

「本の雑誌」2002年6月号に載った原稿。

実は、パソコンのハードディスクの中をチェックするまで、こんな原稿を書いたことなどきれいさっぱり忘れていた。いちご文庫に最初に注目したのは『メイド刑事』の早見裕司さんで、早見さんの影響でチェックしてみると、けっこう意外な作家が書いている作品が多いので、こちらも集め出したという次第。それにしても、この

「あとがき」は本当に恥ずかしいよなあ。

■古本極道大西範彦氏の書棚拝見

『初期創元推理文庫 作品&書影 目録』で知られる奈良泰明さんが、『秘密探偵王』という同人誌を作るから、よしださん、大西さんの書庫を見学してそれを原稿にしてよ」というので、大西さんのお宅にお邪魔して書庫を見せていただいてまとめた原稿。基本的に人の家の本棚を見せて貰うのは大好きなので、大喜びでお邪魔させていただいたのだけれど、あまりの蔵書のすごさに圧倒された覚えがある。

インパクトが薄れないうちにと、一気に原稿にしたのだけれど、その後、いつまでたっても同人誌は発行されず、ついにその同人誌は幻のまま終わった。

ちなみに、その同人誌に掲載されるはずだった原稿のひとつに、岩堀泰雄さん、石井春生さんの兩人による「島崎博さんのインタビュー」があり、その原稿が引き金となって『幻影城の時代』が刊行されることになったのです。

■「西部活劇双書」を先に買ったのは誰だ！

「本の雑誌」2000年6月号に載った原稿なのだが、こんな原稿を書いたこともきれいさっぱり忘れていた。

「西部小説」というのは、僕がかなりこだわって集めているジャ

ナルものだけれど、ほとんど見つかることがない。むちゃくちゃレアな世界なのだ。その中でも特にこの「西部活劇双書」というのは入手困難で、この原稿を書いた時点ではもしかすると1冊も持っていないかったのではないだろうか。

その後、周辺の古本仲間の協力もあって、なんとかあと1冊というところまでこぎつけているのだけれど、その1冊がまったく出てこない。多少高くても買うつもりになっているのだけれど、まったく見かけることがない。コンプリートの道は遠く険しい。

■西部小説の世界

日本冒険小説協会の会報「イーグル」に書いた原稿。

「西部活劇双書」を先に買ったのは誰だ！」を書いた頃は、まだコレクションも貧弱で、日本における西部小説の刊行史めいた原稿を書けるような状況ではなかったのだけれど、手元にそれなりのコレクションが揃ってきたことで、こうした原稿も書けるようになった。実にめでたい。

それにしても、暮らしの手帖社の『おゝ フロンティア（西部開拓史物語）』の在庫がまだあったというのは衝撃だった。久保書店も物持ちのいい出版社として一部で知られているけれど（古書店でプレミア価格のつくQTブックスなど、実は出版社在庫がけっこう残っていたりするのだ）、暮らしの手帖社というのは盲点だった。

■山形古本奇譚

「ワトソン JAPAN」という雑誌の創刊号から第3号まで連載された原稿。

どう考えても作った話としか思えないだろうけれど、原稿の最後にも書いたように、本当に山形の古本市会場で初めて会った古本屋のおやじさんから聞かされた話なのである。自分が人から聞かされても、「そんなめっちゃくちゃな話を、初対面の客にする古本屋なんてあるわけないじゃん」と言いたくなるだろうけれど、本当に本当に僕が聞かされた話なのである。

ちなみに、文中に「ランニングシャツに麦藁帽子、それに釣り人用のゴム長靴といういでたちで古本市に現われる謎の老人の話」というのが出てくるが、これも本当に聞かされた話なのである。麦藁帽子は内側に鉄板が貼ってあって、分厚い本で後ろから殴られても大丈夫なようになっていたとか、ゴム長靴は古本市会場で足を滑らせることがないように履いていたとか、確かそういう説明であった。ランニングシャツは……なんらかの理由があつたはずなのだけれど、すっかり忘れてしまいました。

それにしても、いま考えてみると、なんであの時もっと本を買わなかったのかと、身もだえしたくなるようなレアな本がめっちゃくちゃ安い値段で並んでいた。いまなら、根こそぎ買い漁っていただろうに。

■読まないのには訳がある？

「本の雑誌」2002年11月号に載った原稿。掲載された時には別のタイトルがついていたと思うのだけれど、掲載号が見つからなかったので特集のタイトルをそのままこの原稿のタイトルにしてしまいました。

ちなみに、僕は原稿にタイトルをつけるのがめちゃくちゃ苦手で、担当編集者の方に「適当にタイトルをつけてください」とお願いしちゃったりしています。だから、手元に原稿のデータが残っていたとしても、どういうタイトルで掲載されたのか、分からなかったりするわけです。

■実録・30冊155円の悲劇

「本の雑誌」2004年9月号に載った原稿。

この原稿が載ったあと、あちこちで「あのむちゃくちゃハラ立つ神保町の古本屋ってどこのこと？」と聞かれたけれど、百貨店の古本市などにもよく出品しているサブカル系の本を得意とする「あのお店」のことであります。「面識のあるお店だったので、まさかここまで屈辱的な扱いを受けるとは思ってもみなかった。この事件以降、二度とこの店には足を踏み入れていない(けっこう執念深いな、オレも)。

最近はそれなりに高く売れそうな本はヤフーオークションで処分をして、そうでない本は近所のブックオフに持ちこんだりしてい

るのだけれど、いちばん困るのがそこそ珍しいのだけれど、ヤフーオークションに出しても誰も落札してくれないといったあたりの本。こういった本ばかりが、処分できずにどんどん溜まっていくのは、どうにも困ったもので…。

■読むと価値の落ちる本

日本冒険小説協会の会報「イーグル」に書いた原稿。ふと気がつくと、自分のコレクションの中に未開封の「返金保証本」が溜まってきていて、笑ってしまう。滅多に見つかるともないのだけれどね。いまだに手に入らないのは、幻影城ノベルスの未開封本。自分で買った『11枚のトランプ』なんかは、きっちり開封して読んでしまっているし、古本屋で未開封のものを見かけたこともない。途中で開封して読むのをやめてしまったとおぼしきものなら、持っているのだけれど（そんなものを古本屋で買ってきて、どうしようというのか）。

先日は、ヤフーオークションで『11枚のトランプ』の未開封本が出ていたので落札したのだけれど、いざ届いてみると、最初のページと最後のページだけが開封されていた。微妙なところだけれど、完全未開封でなければ価値はないと判断して返却させてもらった。

■『美人島征服』登場！

日本冒険小説協会の会報「イーグル」第13号に書いた原稿。

いまなら、かつて「貸本小説」と呼ばれるジャンルの娯楽小説があったのだとか、梶野恵三とは黒澤明が脚本を書いた『ジャコ万と鉄』の原作者であり、梶野千万騎という別名義で少年小説を書いていたとか、いろいろとうんちくをたれることもできるのだけれど、この原稿を書いた時点ではそういうことはまったく知らなかった。そういう意味では、これまた時代を先取りした原稿ということができるのだけれど、本当はただ単に変な小説を面白がっていただけのことにはすぎない。

ちなみに、古典SF研究会の藤元直樹さんによると、この『美人島征服』のストーリーは、矢野龍溪の『浮城物語』という小説の焼き直しなのだそうです。いやはや、単なる時代錯誤のバカ小説だとはっきり思っていたら、そのベースとなる作品があったのですね。

■おぐぎ旅館襲撃レポート

古本仲間たちと集って古本屋をまわるといふことは何度かしているのだけれど、これが実に楽しい。そのものすごく楽しい古本屋まわりに、宴会と温泉をセットにして、さらに人様の充実のコレクションを見せていただくというイベントまでがついてくるという、これ以上はあり得ないという楽しい旅行のレポートであります。

そのあたりのいきさつもすべて原稿に書いてあるので、特ににくわえることはない。とにかく、読んでいただければ、古本バカバカたるゆえんを理解していただけることでしょう。



書庫近影



途中下車の古本屋

2009年12月1日 発行

発行：よしだ まさし

連絡先：PXM04577@nifty.com

HomePage：ガラクタ風雲

<http://homepage2.nifty.com/GARAKUTA/index.html>

印刷：株式会社にじろのもり ADルーム